IS×DMC ～Infinity Devil～

尾時山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ×ＤＭＣ　～Ｉｎｆｉｎｉｔｙ　Ｄｅｖｉｌ～

【Ｎコード】
Ｎ６３３１Ｗ

【作者名】
尾時山

【あらすじ】
ＩＳと勘違いされ、「ドレッドノート」で入学した少年・神威悠李。正体は悪魔狩りを職業とする魔剣士であった。　「コピーだろうが関係ない、僕が生きていることが、僕が存在する意味だ！」

Ｂｒｉｅｆｉｎｇ

◆◇◆◇◆◇

「……はあ？」

間抜けな声が響く。ここは便利屋「Ｂｌａｃｋ　Ｃｈｅｒｒｙ」。

「ですから、あなたのお子さんを、ウチのＩＳ学園に入れたくて……」

「アイツ男だぜ？ＩＳとかも使えねェぞ？」

「いや、使えます。私は見ました。あの鎧を……」

ったく、と呟く男、神威　創龍。息子の入学を了承する為の交渉を持ち掛けられたが、彼は何故か解らない。

「だから、あれはドレッドノートっつって……」

「ドレッドノートと言うＩＳなのですね！！戦艦の様なあのタフさ、相応しい名前だ」

「聞けよ、オイ」

創龍は交渉人の顔を掴んだ。しかし、すぐメンドくさくなり、その手を離して、話をした。

「ウチは代々、悪魔の血を注いでるんだ。スパーダとか、クラウスの話、知ってるだろう？」

「は？知りませんが……」

「知らねェのかよ。まあいい。取り敢えず、行かせりゃいいんだろ、ウチの馬鹿悠季を」

悠李。創龍の義子である。クラウスの所謂コピーというモノで、創龍が昔、仕事で見付けた。

因みに、創龍はクラウスの実の息子だ。一人っ子であり、また、嫁も恋人もいない。相棒と、友人が一人ずつ、この便利屋にいるが。しかも、二人とも女性。

「行かせてやるよ。アイツにも、いい刺激になるだろうし。ただ、ＩＳなんてのは持ってねェことは信じてくれ」
「あ、はぁ……。ともかく、ありがとうございます」

本人の意志無しで、勝手に決めてしまった。

ここからだ、彼――悠李の人生に、花が咲き始めたのは。

Profile

氏名：神威　悠李
偽名：ランチア・ストラトス

ＩＳ：なし
登録上では「ドレッドノート」
身長：１８４ｃｍ
体重：６５ｋｇ
髪型：黒のショートポニー
目の色：水色
一人称：僕
性格：穏やか、冷静
年齢：一応１６
誕生日：１２／７（創龍が見付けた日）
人種：悪魔

【概要】
創龍が、依頼にてイギリス・バーミンガムにて見付け、義子とした。
伝説の魔剣士・クラウスのコピーとして生まれ、創龍に育てられた。

クラウスは悪魔であるため、彼も一応悪魔。そして、性格もクラウスと同じく穏やか。

物事を常に冷静に判断し、いつでも正確に行動する。
また、卓越した眼を持ち、人の心中などを探るのが得意。

彼のロイヤルガードの技「ドレッドノート」を発見され、ＩＳと勘違いされ、入学させられた。

半分は、ＩＳじゃないと分かっている創龍のせい。だが、本人も満更ではないらしい。

武器は、学園内では危なくないように一応木刀を使っている。

しかし、本来はパイファー・ツェリスカの改造銃「デスイービル」と、魔剣・天上天下無双剣（あまさげのむそうのつるぎ）＆ａｍｐ；闇魔刀（複製品）を使っている。

顔立ちは綺麗。二重の少し釣り眼。よくいうイケメン。

女運はそこそこ。ファンクラブまで出来た勢いだが、あまり興味は無いらしい。一見細身に見えるが、意外と筋肉質。

画像はこちら

ｈｔｔｐ：／／ｕｔａ．ｌａ／ｕｐｐｂｓ／ｄａｔａ／１３１５７５５９７５－１１０９１２－００２８％７Ｅ０１．ｊｐｇ

因みに偽名は悪魔狩りとバレない様にするため。学園で感づく人間もいるため、こちらを主に使っている。

偽名の考案は創龍。ネタはランチアの名車「ストラトス」より。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１　英の誇り

桜散り、吹き荒れる。その花びらが、紫の布に舞い落ちた。

「でっかい建物だなぁ……」

黒紫のコートの下に、白を基調とした制服。その下に、黒のアンダーウェアを着込んだ、長身の男が一人。

彼こそ、女性のみが扱える兵器、ＩＳを扱える”と勘違いされた”男、神威　悠李である。

魔剣士である父・神威創龍。それと同じ血を継いでいる息子という関係。だが、”捨て子”
あり、また、生い立ちも不明だ。

馬鹿でかい校門を潜る。生徒玄関を見つけ、入ろうとすると、黒スーツの女性に声をかけられた。

「遅刻だぞ。しょうがないかもしれんが」
「あはは……。すいません」

教師の様な発言。スーツの女性が口を開く。

「神威　悠李。いや、ランチア・ストラトスだな、今は」
「あ、ええ。そうです。偽名を使えと言われましたので」
「神威　創龍は、裏で有名だからな。お前も知名度はあるが」

どんなに胡散臭い依頼を”進んで”受ける便利屋を、父親と経営

しているのだ。裏の危険な依頼を受け持つのが主。日常の依頼は滅多にない。

「ＩＳ、無いんだろ？貴様のアーツ、とかいう物が勘違いされただけ、とか」

「まあ、そうなんですよね」

悠李が苦笑い。その勘違いの所為で、結局、こんな所に入るハメになってしまった。

「忘れていた。私は、お前の担任、且つ、上の依頼伝達の織斑（おりむら）　千冬だ」

女性専用パワードスーツ・ＩＳ。それを使って、空中戦を行う世界大会があるらしい。それの第一回覇者が、この教師らしいのだが、あまり悠李は興味が無いようだ。

「この学園にも、お前がいう”悪魔”が出るかもしれん。その時の為に、本名と偽名を使いこなせ、とのことだ。あまり表沙汰にしたくないことが多いのでな」

千冬の言うことは、要は「裏の人間なら隠蔽出来る」とのことだろう。その為にも、ランチアと悠李の名を用意したのだ。

「ストラトス。お前も、学園を守る一員になっている。それを覚えておいてくれ」

千冬は無表情で言った。悠李――いや、ランチアが、軽く頷く。

「では、ストラトス。入学式だ。行くぞ」

「あ、はい」

入学式の会場へと案内される。ストラトスは迷わないよう、気をつけて着いて行った。

2

◆◇◆◇◆◇

「度肝抜かれた……」

入学式が終わっても、体育館の大きさに、ランチアは驚きを隠せなかった。あんなに人が入っても、まだ余裕がある。

教室に戻って来ても、室内の設備の充実さ、そして広さに、ランチアを動揺させる。

「ざけんな、僕を驚きで殺す気か」

軽口を叩く。彼の得意技だ。

次第に他の生徒も来たので、指定された席に座る。担任の千冬に、副担任の山田　真耶がまず自己紹介をした。

世界覇者だけあって、千冬の自己紹介の時に、女子から黄色い声援が上がった。彼女は無愛想に制したが、真耶は慌てたようだった。

「諸君らは、初め半月はＩＳの知識を座学で全て注ぎ込んでもらう。勿論実技もあるが、ＩＳは兵器であると言うことは忘れるな。それと、教師が言ったことは全てやれ、死んでもやれ、殺されてもやれ」

鬼の様な発言。　千冬は本当に教師の自覚があるのか、と思ってしまう。

「それと、これから過ごす仲間達を知るため、自己紹介をしてもらおう。出席番号の若い順から、立って自己紹介しろ」

ある意味、今日一番のメインイベントかもしれない。生徒の声がまた上がった。

ランチアは机に突っ伏し、適当に自己紹介を聞き流すも、名前と顔だけは一致出来るようにした。

このクラスの目玉は二つある。一つは、男が二人いるということ。ランチアと違い、正式にＩＳを動かせる唯一の男の様だ。その名も、織斑一夏。千冬の弟だ。

もう一つ、トップで入試をクリアした留学生、セシリア・オルコットがいること。試験官を唯一倒したらしい。

ランチアは入試はパスで入った。

そういうのに興味は無いのだが、それでも、知っておくべきことではあるだろう、とランチアは考えた。

「次だよ、君」

「ああ、はいはい」

近くの生徒がランチアに、彼の番が来たことを教えた。立ち上がり、無難に自己紹介を始めた。

「ランチア・ストラトス。イギリスはバーミンガム出身。趣味は特に無し。好きな物はピザ。よろしく」

無難というより、ぶっきら棒だ。さっさと椅子に座り、先程の体勢に戻る。

「あいつも男か……、よかった……」

男一人じゃ心細い、と思っていた織斑一夏が安堵する。

それから、少しして、自己紹介タイムが終了し、休み時間へと入った。

◆◇◆◇◆◇

ランチアの予想通り、質問攻めが一夏とランチアに集中した。しかし、ランチア自身は適当に答えただけだった。

「音楽聴く？」
「メタルなら」
「特技は？」
「ないよ、そんなもん」

突っ伏しながらも、答えるだけ答える。顔が見えない、という女子もいたが、気にしない。

「美形だよね～」
「はっ、どこが？」

含み笑いをして返す。顔を上げた時、ジロジロ顔面を見られる。

端正な顔立ち。二重瞼に、透き通ったスカイブルーの瞳。眉は細く長い。
輪郭もシャープで、顎が尖っている。評価としては、高い方だろう。

「顔だけで人を決めるモンじゃないよ。心を見なきゃ」

彼なりに、らしい言葉を言っているつもり。そう言うと、また机に突っ伏した。

「もう授業始まるよ。準備した方がいいんでない？」

ちょうどチャイムが鳴る。ランチアは筆記用具だけを出し、授業の用意をした。

3

◆◇◆◇◆◇

一限目は、ＩＳの基本情報の授業だった。
ＩＳが生まれた経緯、不当な使い方をした場合や、今の情報など。
山田先生が区切りを付け、生徒に質問する。ランチアは今の話の要点だけを記憶しつつ、片手でシャーペンを回した。
「今ので、解らない所がある人はいますか？」
どや顔とまではいかないものの、胸を張って聞いている。
手が一つだけ上がった。どうやら一夏の手の様だ。山田先生が一夏に問う。
「織斑くん、どこが解りませんか？」
「ほとんどわかりません」
「あの……、入学前に渡された参考書を見ていれば、解るんですが……」
「古い電話帳と間違って捨てました」
新しいボケか。しかし、本人の様子からして、事実らしい。教室の時間が少し止まった。
時間差で、一夏の顔に出席簿が飛んできた。見事に命中、彼は顔を抑えた。
「馬鹿者。再発行してやるから、放課後、残って山田先生と私とで

補修だ」

投擲者は千冬。意外と真剣に言った。

「いいか。ＩＳは”兵器”なんだ。知識を持たずに使えば、必ず事故に、仲間共々巻き込まれる。もう一度言う。ＩＳは”兵器”だ。理解しなくとも、必ずこれは覚えておけ」

――理解するための、今の授業じゃないのか？

ランチアは心中で突っ込んだ。力あるものがそれを自覚し、理解しなければ、己の身をも滅ぼす。そういう場を何度か見てきているからこそ、そう思った。

「で、では！これで授業を終わります！！」

「ありがとうございました」

一限目が終わる。終わると同時、ランチアは立ち上がり、一夏の席へノートを持って移動した。

「ほら」

「へ？」

「貸してやるよ。わからないんだろ？」

「あ、ああ……。ありがとう、ストラトス」

ランチアの少しの優しさに、一夏は心からありがたく思った。

「気にしないでいい。野郎二人なんだし、水入らずで仲良くしようよ。あと、ランチアでいいよ」

優しさが笑顔にも出ている。まるで菩薩だ。

「ああ、よろしく。俺も一夏でいいよ」

「遠慮なく呼ばせて貰うよ、一夏」

ランチアと一夏の仲は良好。それを影で見て、安心した千冬が廊下にいた。

その二人に近付く影。一夏が気付き、振り返ったが、ランチアはそちらを向かなかった。

「ちょっと、よろしいかしら？」

「Ｎｏ．Ｉ－ｍ　ｂｕｓｙ　ｎｏｗ．」

「はあ？どこが？」

わざと英語で嘘を着くランチア。どうやら、声をかけて来たのはセシリア・オルコットらしい。

「嘘々。それで、何か用でもあんの、お嬢さん？」

「まぁ！なんですの、そのお返事？わたくしに話しかけられることだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？

というか、あなた、こちらを向きなさい！」

お嬢様気質の性格だ。ランチアはやっとセシリアの方向を見た。

「何かな、僕と同じ、ブリテンのセシリア・オルコット嬢？」

実際、顔立ちは日本人だが。

「本来なら私の様な選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡なのよ。

……その現実を、もう少し理解していただける？」

「あー、はいはい。解りましたよオルコットさまー。僕達二人はあなたといられて光栄ですー」

「はいー」

嫌味っぽくランチアが言った。それに乗って、一夏が続く。別にこういう人間は嫌いではない。むしろ、面白みがあって面白い。

「バカにしてますか？」

「いや？」

肩を竦めるランチア。その動き一つ一つが、一夏にとってツボに入った。

「そ、それより……くっ！！一つ、聞いていいか？」

「普通に話せ、普通に」

「下々の者の要求に答えるのも、貴族の勤め。よろしくてよ。

……あなた、本当に何をしていますの？」

セシリアの「貴族の勤め……」と同時に、ランチアが「貴族のつとめ」というボードゲームを取り出した。というか、どこから出したのだ、という疑問が湧く。

「１５００円で購入しました。みんなもやってみてね！！」

「誰に言ってんだ、誰に。

あと、入試って、筆記あったのか？」

一夏のネタ発言、その2。まあ、参考書を捨てたくらいだから、こんなのは予想できていた。

「はあ？まさか、試験を受けていないとでも？」

「首席っていうから、点数があるのかとな。ＩＳを使って戦うヤツなら出たぞ」

模擬戦の様な物か、とランチアは思った。実際、ランチア自身が試験すら受けていない。

「それ以外に、何が？その試験で、唯一試験官を倒したのが、この私ですから」

「どや？」

胸を張り、どや顔のセシリア。それを強調する様に、ランチアはボケた。

「俺も倒したんだが、試験官」

「……へ？私一人って……」

セシリアにとって衝撃の事実。一夏は何食わぬ顔で続けた。

「女子限定か、もしくはそれを知らさなかったかじゃね？いやぁ、世界って広いねェ」

「貴族のつとめ」で自らを扇ぎながら、ランチアは言う。どちらも可能性は高い。

「あなたは？」
「さあ？入試パスだから」
「それの方が凄いんじゃないか？つか、もうチャイム鳴るぞ」
「ちょ……ま……！くっ！」

悔しそうに言うが、時間は推す。

「次の時間も待ってなさい！いいですね！逃げないでくださいよ！」

はいはい、とセシリアに相槌を打ちながら、ランチアも自席に戻った。

「4

「今回は、戦闘における武装の特長や、戦闘スタイルについての授業だ。だが、その前に、クラス代表を決めたい」

教壇の千冬が言う。ランチアが興味を持ち、伏せた顔を上げた。

「クラス代表は、生徒会の会議にも出席し、再来週行われるクラス対抗戦にも出場する、責任ある役職だ。いわば、クラス長だ」

――聞きたいのはそっちじゃない！！

期待ハズレ。どうでもいい、セシリアでも選んどけ、と思うランチア。しかし。

「はい、私、織斑くんを推薦します」

どこかの女子が言う。当の本人が困惑しているが、周りは気にせずに続けた。

「候補に織斑一夏だな。他には？他薦でも、自薦でもいいぞ」

千冬の説明。まあ、面白そうだ、とランチアは思った。あいつなら、やらかしてくれそうだ。

「誰もいないのであれば、無条件で当選――」

「納得が行きませんわ！！」

でも、そんなに簡単には行かない。やはり、セシリアが黙ってい

なかった。

「男がクラス代表など……。いい恥晒しです！！そのような屈辱を、一年間通して味わえと！？」

「なら、自薦すりゃよかったじゃねェか……」

ランチアがぼそりと呟く。しかし、それが耳に聞こえたらしい。

「黙りなさい！実力からすれば、私が選ばれるのは当然……。なのに、珍しいという、そんな理由だけで、こんな極東の猿と安易に決めるなど！」

「なら、ストラトスくんは？」

セシリアの意見を遮り、誰かがランチアを推薦した。千冬が苦い顔をし、ランチアはずっこけた。

「言い忘れていた。ストラトスは学園上の理由で、代表を務めることが出来ない」

「へ？」

千冬がその場凌ぎの嘘を言い始めた。周りから、間抜けた声が上がった。

「なあ、ストラトス？」

「あ、はい。実は、学園長直々の授業がありまして、僕だけ抜き出されたんですよ。だから、余裕がないので」

ランチア自身も嘘を付く。学園長が誰かも知らないのだが。

「だから――失礼」

千冬が言いかけた途端、彼女のＰＨＳが鳴り出す。廊下に出て邪魔にならないよう通話し始めた。

５０秒程で終わり、教室内に入ると、ランチアを呼び出した。

「ちょうど、その時間の様です。では」

ドアを静かに開け、教室を出ていく。

セシリアも聞かされていなかった。もしや、あの男もなかなかの手練れなのでは？

その疑いを持った途端、更に彼女のプライドは燃え上がった。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　２　戯れ

◆◇◆◇◆◇

千冬は、ランチアを連れ出し、今の連絡の内容を伝えようとした。
だが、ランチア自体感づいていたようだ。

「悪魔、でしょう？」
「気付いていたのか」
「異質ですからね」

言った途端、悠李としての顔を出した。
悠李が左手に石をを握り込む様な形にする。どこからともなく、黒塗りの鞘に収まった日本刀が出て来た。

「どうやった？
まあいい。場所は……まあ、わかるだろう」
「はい。南２０。ですね。余裕です」

悠李が近くの窓から飛び降りようとする。しかし、千冬はそれを止めた。

「倒す前に死んでどうする。それに、制服は脱げ」
「え、脱いでいいなら」

返り血を浴びた時、制服だと色々マズイ。悠李はコートを渡し、制服だけ脱いで、コートをまた着る。

「じゃ、行ってきます。あ、死にませんよ、大丈夫」

そういい、ひょいっ、と飛び降りていった。窓から下を覗きこんだ途端、悠李は壁を蹴り付け、前へと進み出す。

今、自分が見たものが信じられない。

――アイツは、本当の化け物だ。

千冬の、悠李への認識が、その様になってしまった。

◆◇◆◇◆◇

「おほっ、いたいた」

広い敷地無いの、森の様に入り組んでいる所に悪魔はいた。

ＩＳを使って攻撃をしている様だが、全く当たりもしていない。

「あれは自動運転か？そんなんじゃ、仕留められないっての」

闇魔刀を構え、地上に降り立つ。四つん這いの、人間の様な顔をした生き物が、一斉に悠李を見た。

「ムシラねェ……。写メっとこ」

片手に携帯。カシャリと音が鳴り、鮮明な画像が見れる。

その動作をしながら、爪で斬り掛かってきた一体のムシラを紙一重で避ける。後ろに着地した直後、闇魔刀の鞘を刺した。

「あーらよっと」

残り三体のムシラに、刺したそれを投げ付けた。間髪入れず、腰のホルスターに入っていた回転式拳銃を抜き、撃ち込む。

６０口径のマグナム、ツェリスカ。それをモデルに改造したのが悠李の銃だ。名を「デスイービル」といい、本来シングルアクションのこの銃をダブルアクションにしたり、トリガーを長め、且つ滑り止め加工にしたり、グリップを変えたりしている。

「これだけじゃつまんないねえ」

片手でデスイービルを撃ちながら、死んでいくムシラに言った。数も少ないし、強くも無い。つまりは、手応えが無い。

「これの5倍はいるでしょ？」

そこら中にムシラの血が飛散した。無論、悠李の顔にもかかった。

彼は周りを眺める。まだ本当にいるようで、１４つの赤い光点が見えた。

「×２＋４かい。つまらん」

彼を興奮させるには、少しばかり数が足りなかった様だ。

ちょうど１２体出て来る。サイズの大きいものもいた。それでも、

雑魚には変わりが無い。

「ふう……。闇魔刀でちゃっちゃと終わらせよ……」

軽くその場でジャンプする。そして、するりと闇魔刀を抜き、剣先をムシラに向けた。

「C'mon wimp.（来な、弱虫）」

悠李の眼はムシラを見据えている。いつ攻撃されようが、全て避ける気だ。

早まったのは二体。両サイドから、爪を立ててきた。

悠李はその場で飛び上がり、真下にデスイービルを撃ち始める。

鬼畜な威力を誇るデスイービルだ。食らって無事では済まない。

「Who is next?C'mon full power!（次は誰だ?全力で来い）」

二体の死亡を確認すると、死骸に足を乗せて、挑発する。恐怖心を煽りながらだ。

ムシラが一歩引くような感じであるが、まだまだ、彼等の闘争心は萎えていない。

悠李は闇魔刀を構え、ムシラ達の行動に対応出来るよう、体勢を整えた。

2

ムシラが動く前に、悠李は動き出す。軽く走って、一体にドロップキックをお見舞いした。
吹っ飛ぶそれに見向きせず、他のムシラを斬り付ける。

左薙ぎ払い、すかさず右の逆袈裟斬り。向きを変えながら、別のムシラにも攻撃を与えていた。

一撃喰らう度にのけ反る。その間にも、悠李は攻撃を続けていた。
鋭い突きから、踏み込みながら斬り払い。彼の基本連撃だ。速さも威力も申し分ない。

太刀筋は早過ぎて、人間の眼では確認出来ない。しかし、無駄が無い、ということだけは解る。

「ほらほら、やられっぱなしはいけないんじゃない？」

蹴り上げながら、自らを独楽のように回転させ、闇魔刀で斬りまくる。アクロバティックショーでも見てるかの様な動きだ。

残りは４体。一気にカタを着けるため、悠李は闇魔刀を鞘に納めた。

攻撃が止んだかと思い、ムシラ達は悠李に一斉に飛び掛かる。醜い顔面が、更に醜く歪む。

にやり。

悠李は闇魔刀に手をかける。そして、三回ほど、腕を動かした。

目の前に、三個ほどの大きな球体が現れる。斬撃が蠢くドーム。

悠李から、ドームに突進したムシラは、それに呑まれて、血を降らしながら死んだ。

死体は残っていない。ドームは消えた。

「技一つ。次元斬」

次元斬。その名の通り、次元を斬る技だ。好きな所に、自由な形で、好きなだけ出せる強力な技。悠李が創龍に教わった技だ。

しかも、その発動方法も居合である。抜刀と納刀は腕を動かした様にしか見えない。人の枠を超えた化け物だ。

居合は彼と創龍の十八番。その居合も特殊で、間髪入れず、連続で繰り返すのが彼等のやり方だ。

「戻るかねー。あまりにもつまらないから、不完全燃焼だけど」

イカれた発言が飛び出して来る。まるで戦いを楽しむ様な、戦闘狂の気持ちを表したようだ。

「このまま戻るか？血生臭いけど」

「いや、どうにかしろ」

「ああ、千冬さん、来てたの？」

いつの間にか、千冬が来ていたらしい。悠李が後ろを振り返ると、手刀で頭を殴られそうになった。
片手で白刃取りの様な真似をする。きちんと手刀は止められた。

「織斑先生と呼べ」
「僕も仕事中だから、いいんでないの？裏と表は別に」
「まあ、そうではあるが」

血でびしょびしょの悠李を見て、千冬は溜息を着く。

「やり過ぎだ。銃も発砲しおって。お前、少しは考えろ」
「考えてる間にやられたら、カッコ悪いでしょ？スタイリッシュ、かつクレイジーに倒さなきゃ、織斑女史」
「キチガイか、お前は。変な呼び方もするな」

至って真面目に話しているつもりなのだが、悠李はヘラヘラとしている。段々千冬のフラストレーションが溜まってきた。

「おい、いい加減に――」
「おっと」

言いかけた途端、悠李はデスイービルを抜き、二発、千冬ね後ろを撃つ。仕留め忘れていた、二体のムシラがいたのだ。

後ろを見る千冬。ムシラがもがき苦しみながら地に倒れる。悠李はそれを踏み付け、トドメを刺した。

「悪い、血が付いちゃったかも」
「かもじゃない、付いた。礼を言う」

――こいつ、強すぎる。

まともにやり合っても勝機がないように思えた。化け物が自分のクラスにいると思うと、ぞっとする。

反面、頼もしいのも事実だ。クラスだけじゃない、学園全体にとっても、悠李は必要だ。

そう考えると、出来ればクラス代表にはなってほしい。

しかし、代表は無理と言ってしまった。ならば、と千冬は悠李に聞く。

「神威、お前、クラス副代表をやらないか？」

「別にいいですけど、副なら」

即決。実際、女子もその様なことを言っていたが、実力が怪しかった為、その場では決めなかった。

「よし。では、教室に戻れ。血を拭いてな」

「タオル下さい」

「すまない、忘れた」

しょうがない、と悠李は言う。彼は学園へと向かって、「エアトリック」という瞬間移動技で、足早に戻って行った。

「……化け物め」

千冬が、二回目のその言葉を発する。彼女は溜息を付き、歩いて

校舎に戻った。

「3

◆◇◆◇◆◇

ちゃんと血を拭き、教室に戻ってきたランチア。臭いだけはあまり取れていないが。

どうやら放課らしい。教室内には殆ど人は残っていなかった。一夏はランチアのノートを見、理解しようとしている。

「やっと戻って来ましたわね。……あなた、何か臭いますけど」

セシリアがわざわざ近付いて来る。あまり気付いて欲しくはない臭いだ。

事実化するため、背中に幻影剣という、魔力で生成した飛来武器を刺して、自傷する。

「ちょっと怪我して、出血した。ま、大丈夫大丈夫。全部やれたし」
「まあ、情けない……って！足元！！」

少しばかりやり過ぎたようだ。足元に血が垂れている。

「ああ、止まってなかったんだ。大丈夫、唾でも付けときゃ治るよ」
「唾って……汚らしい。それに、背中に届かないでしょう。大人しく救護室へお行きなさい」
「だりぃ。すぐ止まるさ」

痛そうな素振りを見せず、セシリアの横を通る。セシリアがラン

チアの背中を見たとき、傷口が次第に塞がっていくのが見えた。

「な、なんでですの？」

つい声が出てしまうが、ランチアはセシリアに答えようもせず、一夏に近付いた。

「どう、捗ってる？」

「ん？ああ、お前のお陰でな」

ちょうど終わったらしい。一夏のノートと、右手の側面が真っ黒だ。

「これ出して、補修を逃れようかな、って考えてるんだけど」

「良いじゃん。それでいきなよ」

一夏の提案。それなら、山田先生はわかってくれるだろう。

「ちょうど、来た様だよ」

言葉通り、山田先生が教室に入ってきた。彼女はこちらに向かって歩いて来る。

「先生、これ、今日の授業のノートです」

「あ、はい？」

一夏からいきなりノートを渡されて、困る山田先生。ノートを開くと、要点と補足が綺麗にまとまっている。

「素晴らしい……」

「これで、補修無しでいいですよね？」

「あ、はあ。
っというか、それより。ストラトス君に、織斑君。もっと重要なことがあります」
「はい？」

一夏にとって重要なのは、今日の補修。それより大事な物とは、何か？

「寮の部屋を決めましょう」
「ああ、なるほど」

そういえば、この学園には寮があった。ランチアも忘れていた。三食寝床付きとは聞かされていただけだが。

「ストラトス君と織斑君だけ、まだ部屋が決まっておらず、織斑君は自宅から通うように、との連絡があったと思います」
「あ、ああ、そんなこと、聞いていたような……」

何もかもがうろ覚え。ランチアは、一夏の発言にくすりと笑った。

「ストラトス君は、どうしようも無いので、ホテルと言われたはずです。しかし、都合が変わり、部屋が空いたので、今からそれを決めたいんです」
「俺とランチア、一緒じゃダメなんですか？」
「上からそう言われてます」

珍しい男のＩＳ操縦者だから、何かしら狙われる率が高くなる。
そう考えてのことだろう。

「今のところ、６６６号室と、６６７号室が空いています。６６６

は完全に一人、６６７は相部屋です」

ランチアが６６６に入るのが好ましいだろう。一人で対処出来るのは彼くらいだ。逆に、一夏が６６６では、自己防衛手段に乏しい。

「僕は６６６で。一夏は？」

「じゃ、俺は６６７でお願いします」

一分掛からず決まった。山田先生は、彼等二人の仲の良さを見て、心が落ち着いた。

「良かった……。さっきみたいなことがあったから、ストラトス君と織斑君の仲も悪いと思いましたが、全くの反対でしたね」

「さっき？」

先程の授業のことだろう。ランチアは一夏に聞いた。

「ああ、あのセシリアって奴が、日本を侮辱したんだ。俺も少しカッとなって言い返したら、決闘だって言われて、でもそっちのほうが簡単でいいから受けた」

「やるじゃん」

呆れるか、と思った一夏だが、ランチアは笑いながら褒めた。意外に思った一夏が、更に続ける。

「来週の月曜だとさ」

「来週ねえ。大丈夫、勝てる勝てる。副代表を信じなさい」

「あ、お前、副代表になったのか」

「まあね」

この立場だと、一夏をサポートするのか、若しくはセシリアをサポートするのかが悩み所だ。しかし、ランチアはそういう考えを持たなかった。

「思う存分やりなよ。僕はただ見てるからさ」

中立の意見。一夏は、それを、意図を理解して頷いた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　３　魔剣士と女剣士

◇◆◇◆◇◆

生徒寮。一夏と一緒に移動し、６６６号室の鍵を開けると、ランチアはドアを開けた。

「そこそこの部屋だね」

ベッド二つに、机一つ。ソファと、トイレ、シャワールームが着いていた。

率直な感想をランチアが述べる。しかし、一夏にとっては少し豪華過ぎた様だ。

「高級ホテルのスウィートみたいだな……。よく見ろ、冷蔵庫、液晶テレビ、ＢＤプレイヤーに、マッサージ椅子までである」

一夏に言われるまで気が付かなかった。と、いうか……。

「これ、全部僕ん家の部屋のじゃないか！！」

「は、はあ！？」

近付いて、傷や使用感などを確かめる。本当に全て『Ｂｌａｃｋ Ｃｈｅｒｒｙ』の、悠李の部屋に置いてあるものだ。

「ふざけんなよ……。戻すの大変だろうに……」

「いやいや、ツッコミ所がおかしい。それに、お前はそこまで金持ちだったのか」

あっちでは自分で稼いでいるのだ、食費は家族で賄っているし、自然と金は貯まる。

「こんなもんより、エレクトロヘヴィの方を運んで欲しかったよ……」

ランチアがボソリと呟く。一夏は知らぬ間にマッサージ椅子の虜になっている。

「ああ、極楽……」

「じゃねェよ!!おま、使うなって!!」

勝手に使われるのはあまり快いものではない。ランチアは椅子を止め、一夏の頭を掴み、６６７号室へ移動した。

片手で軽々と運ばれる一夏。頭にはそんなに力はかかっていない。

「ほらっ」

隣のドアを開けた。ちょうど、一夏のルームメイトがシャワーから出て来たようで、バスタオル姿で現れた。

「ああ、同じ部屋の者……か……」

「ほ、ほほ、箒!?」

ランチアはこっそりと逃げ、自室に入る。隣からは、騒がしい声と、一夏の謝罪が聞こえてきた。

「い、一夏!!何のマネだ!?」

「い、いいいや、ランチアが！！つか、不可抗力！！」

どったんばったんと、迷惑になりそうな行動だ。しかし、ランチアは面白がり、笑った。

「笑うなランチアぁぁぁ！！つか、お前も悪いだろぉぉ！！」

必死な悲鳴。一夏の命は風前の灯だ。ランチアは笑うことをやめず、ベッドに腰掛けた。

しばらくすると、音が止み、６６６のドアが開く。

ボロボロの一夏を連れた、黒髪のポニーテールの女性が、ランチアの前に来た。

「悪い、見苦しい姿を見せてしまったな」

「いやいや、僕も悪かった訳だし」

笑顔で応対するランチア。しかし、女性はまだ怒ったような顔をしている。

「篠ノ乃さん、だっけか？一夏と知り合いなの？」

「出来れば、下の名前で呼んでくれないか、ストラトス」

篠ノ乃箒。いかにも、純日本人の顔立ち。美人で、清楚といったイメージがランチアの頭に入っている。

「それじゃ、箒さん。なら、僕もランチアって呼んでよ」

「ランチアか。わかった」

表情は変わらない。ランチアは、彼女の顔を緩くしようと、ニッコリと笑った。

「ランチア、こいつは元々こんな顔だから――ひでぶっ！」

「余計な事を言うな。ああ、一夏と私は幼なじみで、小４の時に、私が転校したんだ」

「へ、へぇ……」

段々一夏が気の毒になってきた。千冬の時と同じく、今度は落ちてあった小説で、一夏の頭を叩いた。

二人に共通することだが、振りが速い。ランチアにはゆっくりと見えるが、常人には、何をしたか分からないだろう。

箒の腕をマジマジと見る。なるほど、剣に使う筋肉が着いている。

「箒さんって、剣道でもやってたりする？」

「ん？ああ。昔から、これ一本でやっていてな」

「毎年、全国大会で優勝する腕なんだぜ？」

試しに聞いてみて、箒がその様に答え、一夏がマネージャーの様に彼女を宣伝する。

「知っていたのか？」

「幼なじみのことは知っておきたいからな。ランチア、実は俺も剣道やってたぞ」

「へえ」

正直、一夏が剣道をやっていたのはどうでもよかった。しかし、今の一夏の発言で、何故か箒が顔を赤らめる。

「照れてるでしょ？」
「な、何をっ！？」
「今のこと」

クスクス、と笑いながら箒に言った。頬を真っ赤に染めながら、箒はしらばっくれた。

――絶対、一夏に気があるだろ。

幼なじみの関係を超えたいようだ。誰が今の状況を見てもそう思うだろう。

しかし、一夏は気付かない。どうやらこの男、かなりの鈍感らしい。

「いやー、ニブチンさんがあれだと、苦労するねェ」
「ぐっ……。ああ、全く……」

その言葉を意味するのが大体分かり、箒が恥ずかしそうに返した。

「ま、チャンス到来？な訳だし、頑張ってほしいなァ」
「っぅ……」

更に顔が赤くなり、一夏を横目で見る箒。ランチアは思う。是非とも頑張って欲しいと。

「ははっ。ま、時間もあるし、ゆっくり仲を深めて行きなよ。僕の部屋でもいいからさ」
「あ、ああ……」

「よし、じゃあマッサージ椅子でも使うか」

遠慮なくマッサージ椅子に直行する一夏。ランチアは苦笑いしながら一夏を見た。

「しかし、お前の部屋は豪華だな……」

「全部、実家の、私物です……」

箒も、この部屋の豪華さには溜息を着く。それが全部ランチアの者というのだから、更に驚きだ。

「ま、仲良くやろうや、隣人同士さ」

「なんだ、この手は」

「スター篠ノ乃に握手を求めてるのさ」

意味もなくヨイショし始めた。箒はふっと軽く笑い、その手を握った。

2

◆◇◆◇◆◇

「ふぃー……。やっぱ風呂っていいわ……」

箒が戻ってから、シャワーを浴びたランチア。一夏しかいないので、自前のカーゴパンツだけ履いて、上半身は裸でいた。

逞しい身体付き。全身の筋肉が、入念に鍛え上げられている。制服の上からは、誰がこの様な身体を想像出来ただろうか。

「う、ううっ……」

「なに見てんだよ……。ああ、動物のＢＤね」

「ボブちゃん可愛いなぁ！！」

適当に買った動物のビデオを見ていた。いわゆる、アニマルビデオである。

「アザラシいいわぁ……。もふもふもふもふ」

「ははっ」

ベッドで寝転がっていた一夏の前を通り、冷蔵庫を開けた。中身もそのままだ、ペプシやらなにやら、沢山入っている。

ペプシを取り出し、栓を開けた。ぷしっ、と炭酸が抜ける音がし、それに気付いた一夏が、自分にも、と言った。

ペプシではなく、ファンタオレンジを渡す。遠慮無く、一夏はそれを飲み始めた。

ベッドに腰を下ろし、ボトルのキャップを閉めて、そこらに置いておく。

ちょうど同時、ノック無しに、ドアが開くが、ランチアは見向きもしなかった。

「いつまでいるん……、お、おい！！」
「ん、なに？」
「お前、服を着ろ！」

やはり箒だ。ランチアはコートを羽織り、一夏の首根っこをを掴んで、箒に渡した。

「はい」
「だから、服を着ろ」
「コートじゃダメ？」
「中を着ろ、と言っているんだ」

もがく一夏を横目に、箒とランチアは話す。渋々、一夏を離して黒のハイネックインナーを着る。

「身体のラインが出過ぎだが、まあいい」
「てかここ、僕の部屋だから、良くない？」
「こんなことが多々あるから良くない」

多々あるのも困る、とランチアは言った。

「修学旅行のノリみたいに、３日くらい経ったら冷めるよ」
「なんだ、それ」

そのノリが判らない。箒は溜息を付きながら言った。

「ったく。風呂上がりの姿は見られるわ、上半身を見せ付けられるわ、散々だ」

「箒さんと同じ、筋肉の身体だよ。箒さんも、筋肉の付き具合は、普通の女子以上だもの」

「デリカシーというものがないのか、貴様には！？」

それが、ランチアにとって一番の欠点だろう。しかし、裸で無くとも、服から筋肉のラインがうっすら見えているのだ。

「そりゃ、剣を振る身体付きになるさ。嫌でもな。しかし、考えて発言しろ」

「ごめん」

確かに、ランチアが今のは悪い。謝罪し、小さく笑う。

「何か、憎めん奴だな」

「はい、肉まん」

ランチアの笑顔に、あきれた様に笑う箒。ランチアはすかさず、その発言のボケを実行した。

「どこから出した！？」

「コートから。こっち来る時にコンビニで買ったの忘れてた。どう？」

差し出すが、忘れられていた一夏が、普段よりも恐ろしい背筋力を見せ、肉まんにかぶりつく。

「冷めてんなー」

「お前が食うんじゃねェよ」
「温めてくれよ」
「聞いてないな」

一夏の感想に、ランチアと箒が突っ込む。ランチアは、ベッドに一夏を起き、一瞬で、掛け布団で簀巻きにした。

「はい、一夏巻き」
「ばっ、お前、バッキャロ！！」
「助かる、これでこいつも悪さをしないだろう」

二人で一夏巻きを担ぐ。具が喚いているが気にしない。

ランチアが６６７号室のドアを蹴り開け、ぽいっ、と同時に一夏巻きを投げ飛ばした。

「よし……。食事に行くか」
「良いね、何食べる？」
「ちょ、お前ら……。これ解けって」
「久しぶりに麺ものが食べたい」
「いいね。ラーメンでも食べようか」
「おいコラ、洒落になってねえぞ！？」

学生食堂に、ランチアと箒、二人で向かう。身動きが出来ない一夏が、ごろごろ転がるが、ベッドに顔面を強打し、悶絶した。

「たわばっ！！」
「ピザもどう？」
「食堂にあるか？」

ドアが閉められる。一夏の八方が塞がった。

「ちょ！？ごめんなさい！！もう長居しませんから！！これ解いて！！助けて！！メシ食いたい！！お願いしますだ箒さまー！！ランチアさまー！！」

3

◆◇◆◇◆◇

「お前、昨夜あれだけ喰っておいて、何故またそんなに食える……」

翌日。ランチアと箒、一夏が一緒に食堂まで行き、朝食を取っていた。

「それでも腹が減るから」

「寝ただけでか」

「朝に身体動かしてたよ」

朝４時位に起きていたランチア。広大なグラウンドを２０周ほど走り、ストレッチやラジオ体操などで身体を目覚めさせていた。

因みに、ここのグラウンドは１周約５ｋｍ。約１００ｋｍ走っている計算になる。

「織斑君って、朝、結構食べるんだねー」

「晩飯食ってないからな。誰かの所為で」

「ファンタあげたじゃん」

ランチアと箒の間の一夏も、量が恐ろしい。茶碗がいくつも重ねてある。

「落ち着いて食べなよ」

「時間がねえよ。遅刻でもしてみろ、きっと千冬姉に叩かれるぞ」

「聞こえているんだよ、馬鹿者」

後ろから、ポコリと叩かれる。ちょうど千冬がそこにいた。
彼女は一年の寮長も勤めているらしい。正にスーパー・ウーマンである。

「迅速かつ効率的に食事は行え。遅刻した者は、ストラトス以外校庭5周だ」
「僕は無しなんですか？」
「お前は50周だ。見ていたぞ、朝の。お前、体力は無尽蔵にあるだろう」

見られていたのか。千冬が見た限り、ランチアは速いペースで20周を走り切り、息切れも何もしなかったという。
「化け物め……」

千冬だけでなく、箒と一夏も言い始めた。面と向かって言われると、かなり傷が付くらしい。

「マジ萎えたわ……」
「いいから早く食べろ、私は走るつもりはない」

食べ物を口に全て頬張り、牛乳で流し込む。一夏もそれに続き、味噌汁でとどめを刺した。異様な光景を目の当たりにした箒が、変な顔をする。

「それは味わえるのか？」

飲み込んだランチアと、喉を通らせる一夏が、一緒に首を横に振る。

「もっと、品のある食べ方をしろ……」
「時間ないなら、手段は選ばないよ」

一夏と箒の食器類を持ち、返却口に戻すランチア。頭にも、自分の食器を乗せていった。

「サンキュ、ランチア」
「ありがとう」
「いいから、準備しようか一夏、箒さん」

やっと飲み込んだ一夏が、ランチアに礼を言う。箒もそれに続き、ランチアは笑顔で返しながら言った。

◇◆◇◆◇◆

「おし、１０分前」
「案外、余裕だったね」

教室に着くと、バラバラと生徒が集まっていた。時間的にも余裕があった。流し込み作戦が効果的だったのだろう。

それぞれの席に座り、教科の準備をする。チャイムが鳴り、ＳＨＲが２分で終了すると、時間を早めて授業をし始めた。

授業開始の時に、言い忘れていたことを千冬が話した。

「ああ、そうだ。副クラス代表だが、ストラトスが快く引き受けてくれた」
「皆さん、よろしくお願いしまーす」

ニコニコとしながら立ち上がり、挨拶するランチア。セシリアが何かこちらを睨むが（と、いっても、ジト目の様にしか見えないが）、ランチアは気にしない。

「クラス代表が決まるまでは、ストラトスに従え。いいな」

千冬の釘刺し。しかし、教師権限を使っている為、セシリアにも反論出来ない。

「では、授業に入る」

◇◆◇◆◇◆

「――ここまで判らないもの、いるか？」

一夏の専用機の話から、今に至る。まだ、時間がかかるということをついでに言ったのだ。ちょうど、今日の授業もそれの関連らしく、一夏に教科書を音読させた。

ランチアが挙手をし、質問する。

「世界に４６７機しか存在しないとのことですが、それは今、確認出来ている台数ですよね？作られてはあるが、まだ公表・発見されていない、という機体もありますか？」

素朴な疑問。ランチアの質問に、千冬は感心する。

「いい質問だ。そうだな、まだ未知のＩＳがあるやもしれん。篠ノ乃博士も、コアを作って、外装を着けたが、公表していない、というのもあるだろうしな」

篠ノ乃博士、という単語に、女子がざわざわとし始めた。

「先生、篠ノ乃って……」

「ん？ああ。博士は、そこの篠ノ乃の姉だ」

やっぱり！、と騒ぎ始めた。ランチアが、箒の顔を後ろから伺う。複雑な心境だ。

「ねえ、篠ノ乃さんも、ＩＳの知識が豊富だったりする？」

必要以上に騒ぎ立てる。ランチアは腰を上げ、ゆっくりと箒の周りに近づいた。

「今度、操縦教えて――」

「はいはい、授業中ですよ」

パンパンと手を叩き、気付かせた。箒の顔が、暗い顔から、途端に真顔になり、ランチアを見た。

「兄弟、姉妹だからって、同じ才能があるわけじゃないんだ。それぞれ、個々の光るものを持っているから、個性があるんだよ」

綺麗事だろうか、と思いながらも、ランチアは言う。

彼自身、父親の才能と比べられるが、自分と父は違う、と自然に思っている。

「ストラトスの言う通りだ。黙って席に着け」

千冬のフォロー。箒はランチアを見続けた。ウインクで箒に答え、

ランチアも席に戻る。
再開する授業。ランチアはノートを取りながら、周りの様子を伺った。

◆◇◆◇◆◇

休み時間のチャイムが鳴り、ノートを閉じて、シャーペンを仕舞う。昨日の飲みかけのペプシのフタを開け、飲もうとする瞬間、一夏がランチアに近付く。

「副代表、流石」
「あ？なにが？」
「さっきのことだよ。一まとめに言っちまったし。俺もあれ、共感した。千冬姉がモンドクロッソの覇者だからって、俺は俺だからさ」

そうだ、一夏も、箒と同じ様な者なのだ。

「ら、ランチア……」

二人で話しているところ、箒が照れ臭そうにやってきた。

「さっきは、ありがとな……」
「いいよ、別に。当たり前のコトをしただけだからさ」
「そ、そうか。当たり前か」

当たり前だと思えるランチアが強い、と一夏と箒は思った。

「ちょっと!?なんで私の知らない間で、あなた如きが副代表になっていますの!?」
「あのさ、空気を読めよ」

いきなり近付き、話を無理矢理変えたセシリアを、一夏が睨む。
「私の下に着くというのなら、それなりの実力を見せなさい！！」
「聞いちゃいねぇ」
一夏は呆れ返る。自己中、と付け足した。
「ま、そこの方は専用機があるらしいですが、貴方は訓練機でやることになりますわね」
「何？僕とタイマン張るの？」
ランチアさえも呆れ返る。肩肘を付き、セシリアを着いた。
「どうせエリートさんだから、『私は４６７機の中の、専用機持ち！だから選ばれた存在！どや？』とでもしたいんだろ？」
一夏が悪態を着く。図星だったようで、セシリアは悔しそうな顔をする。
「と、ところで、あなた。どうやら篠ノ乃博士の妹みたいですわね」
「妹というだけだ。それがどうした」
無表情で返す箒。セシリアはそれが気に入らないようで、更に言う。
「出来の悪い妹を持って、博士も大変ですわね」
ランチアの耳にそれが入ったとき、彼の中で、何かが切れた。
「ま、誰であろうと、クラス代表は私が相応しいことをお忘れな――」

机を拳で叩き割り、セシリアを睨む。そして、彼女の胸倉を掴んだ。

「ふざけんなよ、お前……」

剥き出しの殺意。セシリアの顔に恐怖が現れる。

「何も知らない奴を、出来が悪いだ？よくもまあ、そんな偉そうな口が叩けるな」

そのまま壁に押さえ付ける。セシリアの足が震え出した。

「何がクラス代表だ。人を見下してェだけだろうが、てめェは」

まともに目が会えば、視線で人が殺せるくらいだ。クラス内の空気が凍り、一夏と箒ですら、足が動かない。

「同じコト、言ってみろよ？」

気迫から伝わって来る。ランチアは本気だ。完全に竦み上がって、言葉が出ない。

「身体に一発入れないと、判らないか？」

拳を握る。そのままセシリアの顔面を狙うが、恐怖を振り切った一夏がランチアを止めた。

「もうその辺にしとけ」

鼻先スレスレで拳を止めた。同時に、掴んだ手を離す。
その手から滴り落ちる血。セシリアにもその血が着いた。

「助かったな。次は無いと思え。
一夏。僕、気分悪いから救護室行ってくるわ」

ランチアは拳を固く握り締めた。更に血が溢れた。
ドアを開け、救護室に向かう。皆はそれを只見送るだけ。セシリアが崩れ落ち、意気消沈とした。

「今回は、全体的にお前が悪い」

一夏がそう言う。彼が席に戻って座ると、チャイムが鳴った。

「はーい、私……が……」

入って来た山田先生が、ランチアに壊された机と、空気とを見て、悲鳴を上げた。

4

◆◇◆◇◆◇

救護室に行き、拳にテーピングを施しただけで、廊下に出る。どうせすぐに治ってしまうのだが、取り敢えずテーピングをした。

「ホント、マジねェわ」

狂暴な一面を晒し出した。獣の様に荒かった。

机一つで済んで良かった。あそこで一夏が止めていなければ、本当に殺していただろう。

「ああいうの、本当うぜェ……」

教室ではなく、自室へと戻ろうとするが、途中で千冬に見つかった。

「何処へ行く気だ」
「自室です」
「机、弁償しろ」
「わかりました」

コートから財布を取り出し、１００ＵＫポンド札を5枚ほど差し出した。

「日本円は無いのか……」
「すいません。あります」

勘違いした。１万円を5枚出し、千冬に渡す。

「自分で稼いでいるから、払えるのだろう。だが、お前が壊したのは公共物。公共物破損だぞ」

「すいません」

テーピングした筈の手から、血が止まらない。また強く握っているのだろう。

「許せないんですよ、ああいうの。親父がクラウスの息子だから、僕も期待されてしまう」

「クラウス？」

「２０００年前、魔界の侵攻から世界を救った、魔剣士ですよ。ご存知ございませんか？」

「知らんな……」

その息子の創龍も、ニブガルムという異世界を救ったり、デュマーリという島を守ったりしている。裏では有名なのだが、悠李はその名に期待されてしまう。

「誰もが、活躍している兄弟と、一緒の能力があるわけじゃない。何も知らない人間が、見てくれや名前だけで人を非難したり、比べていい筈が無い」

「まあな」

悠李は唇を噛み締める。唇が切れ、そこからも血が流れ出る。

「少し落ち着け、神威。お前の気持ちも、よくわかる」

「はい……。取り乱して、すいません。自室で頭を冷やしてきます」

「解った。落ち着いたら、教室に来い」

今の状況では、どうにもならない。千冬は悠李に、自室に戻ることを許可し、彼女は教室へと向かう。

「魔剣士、か……」

興味を沸かせつつも、それを抑えながら。

◇◆◇◆◇◆

結局、悠李は教室には戻らなかった。テーピングは血で真っ赤に染まっている。新しいテープに変え、握った手をやっと解いた。

ベッドに寝転がり、天井を見上げる。真っ白な、汚れなき天井を。

少しして、ドアのノックが聞こえた。ランチアとして気持ちを切り替え、ドアを開けると、そこには箒と一夏がいた。

「よう、ランチア」

あんなことがあったのに、一夏は変わらずランチアに接してくれた。ランチアは自然に笑顔になった。

「どうしたの？」

「ランチア……。本当に、ありがとう……」

箒がランチアの眼を見て言った。ランチアは優しく微笑み、首を横に振る。

「箒さんは、箒さんだから。箒さんのお姉さんでもなく、箒さんだから」
「そうだよな。箒、ランチアの言う通りだぜ」
「それでも、あそこまで怒ってくれる奴はいない……」
「僕も同じ境遇だからさ。家系がそんなんだし」

自分は自分。他者とは違うのだ。父・創龍の教えでもあり、ランチアのモットーだ。

「右手、大丈夫か？」
「大丈夫。ピンピンしてるよ」

これ見よがしに、手を握ったり、開いたりする。テーピングにも血は付かない。

「よかった。折れていたら、大変だからな」
「そんなヤワじゃないよ、僕は」
「わかるよ、机割るくらいだからな。あれ、１ｔの衝撃くらいなら、軽く止めるらしいからな」

化け物の片鱗、その3。ランチアが苦笑いしながら、困ったようにした。

「大丈夫なら、剣でも振らないか？いいストレス解消になるぞ」
「いいの？」
「ああ。私が、相手になってやる。ちょうど、一夏にも剣を振らせたいところだったしな」

滅多に見せない笑顔を、箒が見せた。

「いいね。ついでに――」

部屋のバックから、あまり見せてはいけないもの――デスイービルを出した。

「射撃も、試さない？」

◆◇◆◇◆◇

武道場へ移動し、箒は更衣室にて、胴着に着替えて出て来た。無論、愛用の竹刀もだ。

「適当に得物を取れ」

一夏は借りた胴着だが、ランチアはいつも通り、コートの姿である。ランチアにあう胴着が無かったのだ。

一夏は竹刀を選んだ。ランチアは愛用の木刀を出し、肩に担いだ。

「一夏から行くぞ」

「い、いきなり！？」

有無を言わさず、打ち込みを入れる。体重を掛けた、重い一撃。速さもやはり申し分ない。

「ぬおっ！！」

肩膝を付き、受け止めた一夏。いくら女子でも、実力の差があり

すぎる。

「それで全力か！！」
「そうだよ！！」

そろそろ腕が限界らしい。プルプルと震えている。

見切りを付け、ランチアは木刀を振り始める。ウォーミングアップとして、闇魔刀で行う四連撃を二度繰り返した。

続いて、左の斬り払いから、右の逆袈裟斬り。ここから派生し、右の回し蹴り、すかさず突進突き、そのまま連続突きをした。

「情けない……。三年間、何をやっていた！！」
「帰宅部だ！三年間、皆勤さ！！」
「胸を張って言うことか！！」

夫婦漫才。横では、黙々と剣の連撃をしているランチアがいた。

水面蹴りから、サマーソルトキック。飛び上がって、急降下しながら、兜割りを放った。

剣からくる風圧。箒のポニーテールを揺らした。

「ランチアを見習え」
「出来るかよ、あんなん！！」

箒の方向を向き、ランチアが剣を構える。

「やろうか」

「ああ……。行くぞっ！！」

先程より速い打ち込み。ランチアはそれを紙一重で避け、木刀を箒の頭に付ける。

「あれ？終わり？」

「ふっ……。なかなかだ、しかし、まだ終わらんよ」

竹刀が戻ってくる。ランチアは宙返りでそれを避けた。

宙返りの最中に、剣を突き出されるが、それをも木刀で捌き、避ける。

「まるでサーカスの一員みたいだな。自由自在に動き回る……」

着地を狙い、胴抜きを狙われるが、素早く左に転がって避けた。身を翻し、突きを放たれるが、それをも木刀で防いだ。

息も付かせぬ高速バトル。一夏が竹刀を置き、二人の動きを必死に眼で追った。

防戦一方に見えるランチア。だが、箒もいっぱいいっぱいな様だ。

「さて……。そろそろ反撃と行こうかい」

捌いていた剣撃を、力を入れて跳ね返す。箒の剣が上に行き、胴ががら空きになった。

続けて、左袈裟斬り、右斬り上げ、右回転斬り、と、光速の連撃を繋いだ。箒の左肩から右脇腹、右脇から左腿に当たり、布を軽く

斬った。

留めに、腹部を、とすっと軽く突く。これで完全に勝負ありだ。

「すげえ、勝っちまったよ……。あの箒に……」

「ふっ、ふふっ……！流石だ、ランチア」

箒が竹刀を置くと、ランチアも木刀を肩に担ぐ。

「昨日の握手から、お前の掌は堅かった。明らかに剣ダコが出来ていた。しかし、剣道じゃないな。実戦向きの剣術だ。どこで覚えた？」

木刀を頭上でくるくると回しながら、ランチアは答えた。

「オリジナルと、親父から教わった、代々伝わる剣術だよ」

「流派は？」

「無いよ。名付けるなら、クラウス・アーツ、かな？」

適当に名前を付けた。しかし、クラウス・アーツのネーミングセンスは悪くない、と自画自賛した。

「一夏。私とランチア、どちらに剣を教わりたい？」

「へ？俺は、出来れば箒の方が、人間味があって、好きな剣なんだが」

「そ、そうか」

何故そこで照れる、と一夏が突っ込む。ランチアは、一夏の鈍感さに思わず吹き出してしまった。

「では、明日から稽古を付けてやる。ＩＳ云々より、まずは生身の

身体の鈍りを取ってからだ」

竹刀を一夏に向けて話す。彼は頭で考えた。

ここで鍛えておけば、後々ＩＳの操縦にもスタミナでカバー出来るだろう。それに、専用ＩＳも無いことだから、それに備えるのも大切だ、と。

「よろしく頼むぜ、箒」

「後は、クラウス・アーツも教われ。剣だけじゃなく、回避も技だ」

「僕が教えんの？まあ、いいけど」

「判った、ビシバシ来い」

「ここまでしてやるんだ、絶対オルコットに勝てよ」

そういえば、来週がセシリアとの決闘か。ランチアが思い出すと、一夏は拳を握り、顔を真剣さで埋め尽くした。

「任せろ、お前らがいれば怖くない」

そいつは頼もしい。ランチアと箒は、一夏の眼差しを見てそう思った。

「5

◆◇◆◇◆◇

武道場から、射撃練習場へと移動したランチア達。ランチアが耳栓とゴーグルを一夏と箒に渡すと、銃の説明をし始めた。

「自動拳銃の話をしよう。ここがスライドね。弾切れ時に後ろでストップする。その時は、マガジンを入れ替えて、スライドを引く」

試しに弾を一発的に撃ち、弾切れ状態を作り出した。スライドが止まるのを確認すると、マガジンを取り替え、スライドを引く。次弾がチャンバーに装填され、スライドが戻った。

「弾丸は９ｍｍパラベラムだから、これをマガジンに詰めて装填してね」

「詳しいな、お前」

「まあね」

ここにある銃は、Ｍ９とグロック１８、ＵＳＰ。そして、コルト３５７　パイソン。

「ちゃんと両手で、こういう風に持ってね」

ＵＳＰを持って、実演して見せる。一発、人型の的の脳天部分に撃ち込んで見せた。

「リボルバーは、撃つのは同じなんだけど、装填は、クイックローダーか、一発ずつ詰める」

パイソンに持ち替えて、シリンダーをスイングアウトする。薬莢を全部抜くと、クイックローダーにセットされた弾を差し込み、真ん中のボタンを押して、横に引いた。

「ま、これが一番速いかな」

「軍隊出身者か、お前」

セフティを掛け、くるくるとガンプレイをするランチア。まるで西部劇のガンマンみたいだ。

「じゃ、実際に撃ってみよっか。好きな銃を取って」

一夏がＭ９、箒はＵＳＰを選んだ。ランチアはそのままデスイービルで、的に向かう。

「なんかワクワクしてきた！！」

男だから、と言うのもあるだろう。一夏はニヤニヤしながら、トリガーを引いた。

心臓部に当たる。なかなかの腕前だ。

反動で腕が少し弾けたが、怪我になりそうな訳でも無い。

隣の箒はというと、ＵＳＰを一発撃った後、ジャムらせてしまった。ランチアがそれに気付くと、ＵＳＰの薬莢を抜き、直して渡す。

今度は、と思って、三連射。ジャムることなく、綺麗に頭を撃ち抜いた。

「なるほどな……」

コツを掴んだらしい。箒は続いて、下腹部の方を狙い、五連射した。

「やるじゃない、二人とも」

デスイービルを片手で撃ちながら、ランチアが言う。全くと言っていいほど、反動がない様に見えた。

連射速度が速い。まるでサブマシンガンでも撃っているかの様だ。若干速度は落ちるが。

的を撃ち抜いて何か模様を作ったらしい。双眼鏡で箒が的を見てみると、薔薇が華麗に咲いていた。

「軍人だろ、お前」

「違うよ」

反動の逃がし方といい、精度といい、何かしらがレベルが高い。

「剣と銃、どちらも強いとか、万能過ぎだろ。羨ましいぜ」

「いやぁ、照れるなぁ」

一夏がランチアを称賛する。素直に彼はそれを嬉しがった。

「二人も上手いよ。なかなかの腕前で」

「そうなのか？」

「うん。初回であそこまで出来たら、もう言うこと無しだよ」

反動の逃がし方も、精度も、やはり剣道からくる、力の使い方なのだろう。

「銃か……。こちらも、極めてみよう」

「剣道の一環でね。肩とかも強くなるだろうし」

箒がＵＳＰを気に入ったようだ。グリップから手を離そうとする気配が無い。勿論、セフティは掛かっている状態だ。

「息抜きにやるとするさ。その時は、ランチアに付き合ってもらう」

「僕？いいけど……」

ふふっ、と笑いながら、ランチアは立ち上がり、箒の耳元で囁いた。

「一夏のハートは、自分だけで撃ち抜きなよ。なるべく早目にね」

箒の顔が赤くなり、ランチアを見た。ランチアは笑いながら、箒の肩を叩き、自室に戻った。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　４　力の証明

◆◇◆◇◆◇

決闘当日。朝から一夏はハイテンションでいた。

クラウス・アーツの回避術、「バックムーン」、「スイッチング」、「シャッフル」などを教わり、また、箒の剣の教えで、身体の鈍りは完全に取れている。

「よしよしよしっ！！」

「肝心なのは、専用機だな」

まだ専用機は来ていない。到着予定は今日の午後らしい。それまで、授業の辛抱だ。

「勝ってやる……！俺なら出来るっ！！」

自信満々な一夏。しかし、それをやっているのは教室だ。

「うるさい、馬鹿者。判ったから落ち着け」

箒のツッコミ。一夏はそのテンションで、箒に親指を立てた。

「そういや、ランチアが来ないな……」

◆◇◆◇◆◇

結局、ランチアが来ないまま、決闘の時間になった。アリーナに移り、自分のピットへと入った。一緒に箒も着いてきたが、別に誰も気にはしなかった。

「お、織斑くん織斑くん！」

ピットに駆け込んでくる山田先生。落ち着きがない。

「先生、ストップ。そのまま息を吸ってー」

言われた通りに、山田先生は息を吸う。

「吐いてー」

「はぁー」

「一夏、全然面白味がない」

吐くと同時、ランチアがドアを開けて入ってくる。千冬も一緒だ。

「ランチア！！どこ行ってた！？」

「学園長んとこ」

勿論、嘘である。パシらされて、一夏の専用機を取りに行っていたのだ。

「ほら、一夏。お前のＩＳ」

コンテナがランチアの後ろから顔を出した。一夏がそれを開けると、くすんだ白い機体が現れた。

「白式、という。織斑、初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）をしろ。最速でな。すぐに出るぞ」

千冬が指示した通り、二つの作業を素早く行った後、装備してカタパルトに移動する。

「一夏」

「ん？なんだ」

ランチアが一夏の前に出る。拳を突き出し、言った。

「叩きのめしてこい！！お前ならやれる！！いや、やれ！！殺っちまえッ！！」

「応！！」

拳を突き合わせた。男の友情。千冬や箒、真耶がそれを見て笑った。

大空へと飛び立つ一夏。背中を見守り、送ると、ランチアは外へ出ようとする。

「待て、ストラトス。お前も後で戦うんだぞ」

「判ってますよ……。力の差を、見せ付けてやりますから……」

「ＩＳを準備しておけ。それと、渡したいものがあるから、ついて来い」

ピット内部でか？と疑問に思ったが、どうやら、本当にそのようである。

何やら、細長い段ボールに包まれた物。千冬はそれを渡したい。

「お前の親父さんからだ」

ランチアの手と、段ボールとが、稲妻で結ばれている。

大体予想がついた。段ボールを引っぺがし、エアキャップを取ると、所謂ストラトキャスターと呼ばれるエレキギターが姿を見せた。

「エレクトロ、ヘヴィ……」

千冬の顔を見る。ランチアは、ネックを両手で持ち、軽く振った。ギターが変形し、鎌の様な形になる。

ネックの中心から割れ、ピックガードが刃になっている。ランチアは肩にそれを担ぎ、にやりと笑った。

これは魔具だ。偶然で出来た産物だが。

「そのような使い方なのか」

箒が眼を見開きながら、エレクトロヘヴィのボディ部を触った。指先から、得体のしれないパワーを感じ、手を押さえた。

「っ！！」

「これで、箒さんにはバレちゃったかな……」

「ストラトス。いや……、神威」

「ほぇっ！？」

本名でランチアを呼ぶ千冬。真耶と箒が、ランチア――いや、悠李を見た。

「神威悠李。一夏の後に、オルコットに、何者であるかを思い知らせてやれ。悪魔狩りの力、私に見せ付けてみろ」

「あいよ」

鎌を閉じる。悠李はそこらにエレクトロヘヴィを立てかけると、腰溜めに構え、身体全身に、魔力を行き渡らせた。

「ロイヤルガードが一つ、ドレッドノート……！！」

魔力の鎧。恐ろしい外見をしており、全身が刺々しい。

人間から掛け離れた生物。それを見た三人が息を呑む。

「ランチア。いや、悠李と呼ばせてもらおう。お前は、何なんだ？」

「ＩＳを使えると勘違いされ、学園にぶち込まれ、その学園の依頼を受ける、便利屋さ」

エコーが掛かった声。不気味さを強調している。

難攻不落の、魔力の鎧。悠李は手を握り、木刀を出した。

「それも、人とは違う、悪魔っていう生き物のね」

エレクトロヘヴィを担ぎ、悠李は歩き出す。カタパルトはいらないらしい。レールの上を歩き始め、上空を見上げた。

一夏とセシリアが戦う景色。悠李はそれを見て笑った。

「篠ノ乃、山田君。いいな。今聞いたことは、極秘事項だ。あの馬鹿が全部喋ってしまったが、決して口外しないでくれ」

悠李の背中を見つめる箒。彼女の眼には、悠李が悪魔の化身にはとても見えなかった。

2（前書き）

こんにちは。初めてお目にかかります。尾時山です。

今回、原作通りではなく、オリジナルでセシリア戦を進めていきます。結果が違いますので、ご了承下さいませ。

2

◆◇◆◇◆◇

「あら、逃げずに来ましたのね」
「誰が逃げるかよ」

空中にて、一夏とセシリアが睨み合う。セシリアが腰に手を当て、喋っているが、一夏は無視をした。

「最後のチャンスをあげますわ」
「それは、こっちの台詞だな」

唯一の武器であるブレードをセシリアに向けて、一夏が言い放った。

「今、箒と、日本の事を謝れば、見逃してやる。それを断るのであれば、俺はお前を叩き潰す」
「んまっ……。本当のことを言って、何が悪いのですか!?」

チッ、と一夏が舌打ちをした。スラスターを吹かし、セシリアに急接近し、特攻を仕掛ける。

「潰される覚悟はあるようだな。いいぜ、溺れちまいな!自分の傲慢さが作り出した、毒の海に!!」

ブレードで、セシリアの専用機・ブルーティアーズに傷を付ける。シールドエネルギーが、少しではあるが、減少する。

「なぁっ!?私に、一撃を……っ!!」

途端に激昂し、ブルーティアーズから、八機程のビットが射出される。一夏はビットを確認し、スラスターを吹かしながら、ビットの焦点をずらした。

「動きが荒いっ!!」

動いている最中、隙ありと言わんばかりに、セシリアがライフルを乱射してくる。横目でそれを確認した一夏は、身体をくるりと一回転させ、受け流した。

クラウス・アーツの回避技、リバーシブルという技だ。単純かつ汎用性の高い技である。

「外した!?」
「ハエが止まって見えるぜ」

ビットのオールレンジ攻撃をものともせず、ブレードで反射させながら、別のビットを撃たせた。機転の応用。ブレードならば、シールドは減らないし、反射も出来る。

ランチアと箒のおかげで身についた危機察知能力と動体視力。十二分にそれを発揮しながら戦っている。

「くっ……!!」

一夏の白式の移動速度が遅いのが、逆に狙いにくい。当てたと思ったら、残像であったり、ブレードで防がれたり。

「どうした、エリートさん！！」

ゆっくりと近付いてくる一夏に向かって、後ろに下がりながらライフルを連射する。

射撃特化機体なので、弾数は多いが、それでも、弾切れは怖い。セシリアが少し焦りを見せながら、トリガーを引き絞る。

「当たり……なさいっ！！」

思わず、顔面に撃ち込む。搭乗者の命を守るシールドが張られているので、大丈夫ではあると思うが、それでも顔面は剥き出しであるため、衝撃はとてつもないだろう。

「ちぃっ！！」

歯を食いしばって、受け止める一夏。エネルギーが大幅に減るが、それでもまだ、一夏の方が多い。

衝撃で口が切れ、流血する。しかし、そんなことで止まる一夏ではなかった。

「くっ……！どこまで！！」

ライフルのビームを刃と見立て、サーベルにして斬りかかるセシリア。一夏は後ろに下がってそれを避け、振り切った隙を突き、踏み込んで前蹴りをお見舞いした。

「きゃあっ！！」

セシリアのシールドエネルギーはもう殆ど残っていない。一か八かで、数少ないビットを一斉掃射するが、一夏はスラスターの推力

を切り、急降下して、セシリアに自爆させる。

「一発一発が軽いな、ビットは」

「っ！！」

一夏がビットの弱点を突いた。まさにその通り、セシリアのシールドエネルギーはまだ切れない。

「こんなこと、時間が掛かってしょうがない……。だから！！」

白式から、くすみが取れ、純白の輝きが見えた。ブレードからは、ビームが出、先程とは違う機体の様な印象を受けた。

「一次移行（ファースト・シフト）……！？まさか、初期状態で、私を圧倒していたと！？」

「一気に、カタを付ける！！」

ブレードのビームがほとばしる。シールドエネルギー残量をも食っているが、一撃でセシリアを倒せるなら、小さい対価だろう。

一閃。ブレードがセシリアを斬り付け、とどめを刺した。試合終了。ブザーが鳴り響き、アナウンスが入る。

「勝者、織斑一夏。織斑一夏」

ブレードのビームを止め、セシリアを見る。

「俺の勝ちだ。謝りに来いよ」

――信じられない。自分が、この男に負けるなんて！

悔しげに歯を食い縛る。しかし、次の戦いに備える為、セシリアはピットに戻った。

「3

◆◇◆◇◆◇

「やった!!一夏が勝った!!」

悠李が手を握り、自分のことの様に喜ぶ。ちょうど、一夏が帰還すると、ハイタッチを交わした。

「やるじゃん」

「いやいや、ランチアと箒のおかげさ。ん?お前も、あいつと戦うのか?」

悠李がドレッドノートを展開していることに気付いた。悠李は頷くと、そのままカタパルト無しで飛び上がった。

「人間、じゃねえなあ、あいつ……」

的を得た言葉だ。事実、彼は人間ではないのだから。

◆◇◆◇◆◇

「そこか……」

セシリアを視認する。悠李はエレクトロヘヴィを鎌に変え、セシリアの正面に現れた。

「来ましたわね、殺人鬼」

「……否定はしない」

悠李とセシリアの眼が暗くなる。暗黙の空気が張り詰めた。

「大体、あれはお前も悪い。確かに、キレたことは謝る。ごめん」

その場で頭を下げる悠李。しかし、セシリアは銃口を向け、引き金を引いた。

「あなたの方が、人を見下していてよ」

自分が舐められている、と感じたのか。悠李はビームを避けず、そのまま頭で受け止めた。

ドレッドノートは全ての攻撃を防ぐ。大したショックも何もない。

「……これで、あなたの気は済んだか？セシリア・オルコット嬢」

悠李が顔を上げる。セシリアは驚いたように眼を開いた。

「あなた、それで怒らないんですの！？」

「戦いに、卑怯もクソもあるもんか。それに、僕だけならまだいい」

――しかし。

言いかけた途端、悠李の身体が消える。セシリアが動揺し、辺りを見回した。

気付くと、喉元には、エレクトロヘヴィの刃があった。まだ斬られてはいないが、首を刈り取られてしまいそうだ。

「負ける気は、そうそうない」

セシリアの背後に悠李が現れた。しかも、彼は宙に浮いているのではなく、宙で立っている。

魔力で足場を固める、ホバリングという技を使っているのだ。悠李はそのまま、セシリアの頭を、片手に持っている木刀で叩く。

一撃で、1／3のエネルギーを持って行った。続いて、ビットを一つずつ握り潰し、セシリアの腕から、ライフルを奪い取る。

ここまでして動かないセシリア。動けないのである。悠李が出している、独特のオーラに触れているため。

「終わりだ」

めぐるましいスピードでライフルを連射する。エネルギーがみるみる削られ、セシリアの負けが決まった。

わずか1分の戦い。セシリアが呆然とするが、悠李はセシリアの腕を掴み、彼女のピットへと連れ込む。

「あ、あなたは……」

「実力は見せた。文句はないだろう？」

あまりにも呆気ない。悠李はライフルを返し、自らのピットに戻った。

◆◇◆◇◆◇

「圧倒的だったな、おい」

ピットにて、一夏がまず最初に出迎えた。ドレッドノートを解除し、エレクトロヘヴィを収縮・収容する。

「エアトリックからの、スラッシュもどきで終了です。あまりにも弱すぎる」

「そうか……」

悠李の感想。エアトリックは千冬は前に見た。彼の瞬間移動技だ。

「なあ、ランチア」

一夏がランチアを呼ぶ。彼だけ、千冬から話を聞かされていないのだろう。

「お前が、俺の補佐になるんだろ?それなら、お前が代表になってほしいんだが」

「一夏、話聞いてるよね?僕は――」

「名前だけなら、代表にはなる。けど、実質的な代表は、お前の方がいい」

一夏がそういう。それなら支障は出ないだろうが、それでいいのか?

「織斑先生、どうすれば……」

「クラス代表の命だ、従え」

つまり、一夏の言う通りにしろ、ということか。

「……わぁった。僕に任せな。でも、対抗戦は一夏、君が出ろ」
「ああ」

二人に繋がる手。この二人の友情は、どんなものよりも固い絆で結ばれている様だ。

「よろしくな、副代表さん」
「こっちこそ、代表」

にこりと笑い合う。本当に彼等は仲がいい。

「終わったら戻るぞ。ゆっくり休め」
「はい」

ランチアと悠李。表裏一体の同一人物。

一夏がそれを知る日は、いつ来るのであろうか……。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　５　中国女孩在恋（前書き）

下ネタ注意です……、すいません。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　５　中国女孩在恋

◆◇◆◇◆◇

翌日の夜。

その日は、ＩＳの飛行練習や、何やらがあり、一夏が少しヘマをして、顔面から墜落した。

ランチアが一夏を担ぎ、救護室に運んで、その後も、訓練機の後片付けや、山田先生の気付けなど、雑用に追われた一日であった。

セシリアとは和解し、箒、一夏共々、彼女に謝罪された。ランチアに至っては、ピットに連れられた礼をも言われたのだ。

「ふいー……」

自室にて、シャワーを浴びて、制服でベッドに寝転がる。同タイミングで、千冬から携帯の方に連絡が入った。

「はぁい……」

「悪いな、疲れているところ。どうやら、校舎内に不審人物がいるらしい。見回りに行ってくれ」

それは用務員の仕事だろう、と言うも、仕方なく従う。

コートを羽織り、あくびをしながら、校舎に戻るのであった。

◆◇◆◇◆◇

「無駄に広いわね……」

暗闇の校舎内の中、ツインテールの少女が一人。

地図を見ながら移動するも、なかなか目的地に着かない。

「イライラするわね、どこにあんのよ、事務受付」

同じ所をぐるぐる回っているだけな気がしてならない。彼女は溜息を付き、座り込む。

「冷静に考えるのよ、鳳鈴音。例えば、こういう時は、人を呼ぶとか」

ちょうど、コツコツと、ソールと地面がぶつかる音がした。それは、どんどん彼女に近付いてくる。

「ナイスタイミング！！」

「ふぁぁ……っ。なんだ、不審者じゃないじゃん」

無論、その人物は悠季であった。携帯を取り出し、連絡をし始めた。

「もしもし、千冬さん？不審者じゃなかったです。なんか、迷ってるだけみたいです」

＞そうか。案内してやれ。終わったら、食堂に来い＜

「人使い荒っらぁ……」

通話終了。くるくると携帯を回して、仕舞った。

「とのことなので、君を今から案内することになりました。どこに

行くの？」
「一階、生徒受付」
「はいよ……」

大きなあくびをしながら、悠李は彼女の前に立ち、案内する。あまりにも悠李が大きいので、彼女はコートしか見えなかった。

「いくつあんのよ、身長」
「１８４ｃｍ……。眠い……」
「だっらしないわね」
「疲れてんだよ……」

コツコツと歩く悠李。歩いて3分で目的地に到着した。

「ほい、いってらっしゃい」
「ありがと、助かったわ。そういや、アンタの名前を聞いてなかったわね」
「ランチア・ストラトス……。好きな呼び方していいよ」

眠そうな受け答え。相当疲れているのだ、と彼女は思い、早めに用を済ませた。

「鳳鈴音（ファン・リンイン）さん、ようこそＩＳ学園へ。２組への編入です。案内は、そこのストラトスくんに任せますから」

隣を見ると、眠眠打破を飲んでいるランチア。段々彼が気の毒になってきた。

「全然効かねぇ……」

「大丈夫なの、あんた？」
「大丈夫。１組の副代表さんに任せなさい」

立ち上がるランチア。コートから飴玉を取り出し、舐めながら、鳳鈴音をまた案内する。

階段を上り、１組の教室の隣ここだ、と紹介してから、さっさとずらかろうとする。

「ああ、そういや」
「まだなにか……？」
「寮も案内してくんない？６６６号室って行ってたんだけど」

ランチアの中で、何かが崩れ落ちた。まさかの、一人部屋生活からの転落。

「それ、僕の部屋」
「ならちょうどいいわ……って、ええ！？」
「ああ、大丈夫大丈夫、君にあんま興味ないから、襲ったりなんかしたりしないよ」
「したらぶっ殺すわよ」

勘弁してくれ、とランチアがぼやいた。しょうがなく、彼女を連れて自室に戻る。

「ほれ」
「だから、なんでこんなに広いのよ。しかもアンタ、これじゃスウィートじゃない」

どうでもいいだろ、んなん、と言って、ランチアは外に出た。

「じゃ、呼び出し掛かってるから、ごゆっくり」

足早に離れるランチア。ゆっくりした方がいいのは彼自身だろう、と鈴は感じた。

◆◇◆◇◆◇

そして、呼ばれた通り食堂に向かう。中に入ると、1組全員がランチアを出迎えた。

「クラス代表&副代表決定記念」という、派手な幕が下がり、一夏が鼻に絆創膏を貼ったまま、写真を撮られている。ランチアは横目で軽く笑うと、千冬の元へ動く。

「お疲れ様です……」
「お前がな……。大丈夫か？」
「まあ、大丈夫です。転校生のファン・リンインさんが同室ってことは知らなかったので、メンタル持ってかれましたけど」
「ファン？ああ、そいつは中国の代表候補生だ。後は、一夏の幼なじみでな」
「あいつ、そういうの多いなぁ……」

学園で顔見知りも多いのは羨ましい。一夏を羨むのは何か新鮮だ。

「神威、呑むか？」
「酒ですか？」
「親父さんから聞いたぞ。なかなかイケる口とな」
「あのバカ親父が勝手に呑ませるだけですよ」

ビールを渡す千冬に、悠李は、教師がしていいことか、と思った。全て創龍の所為にしておきたいが、酒は嫌いな訳ではない。

プルタブを開け、一気に飲み干した。缶を握り潰し、近くのごみ箱に投げ入れた。

「まだあるぞ」

「宴会じゃないんですから……。普通にコーラとか下さいよ」

「あいつらの中に特攻すれば飲めるかもな」

「だから普通に表現しなさいって」

千冬にツッコミながら、悠李が女子の群れに入っていく。肩を触られた女子が黄色い声を上げながら、顔を赤くする。

「なんかちょうだい。飲み物と食べ物」

「はい、喜んでっ♪」

一斉にピザを差し出された。続いて、ペットボトルのスプライトを渡される。

一枚取って口に入れながら、スプライトを飲む。炭酸の刺激が心地好い。

「ランチアさん、こちらもいかが？」

「ありがとう、セシリアさん」

「普通にお呼びになってくださいな」

声をかけたセシリアが、ショートケーキを提供する。一口で平らげると、指に付いたクリームをペロリと舐め取る。

「グローブも、お外しになられては？」
「そだね」

フィンガーレスグローブのベルトを外し、コートのポケットにしまう。手を握ったり、開いたりした後に、ちょっとしたマジックを行った。

掌から、大福が出て来た。それを口の中に投げ入れ、もぐもぐと味わう。

「んむ、んまい」
「凄いマジックですわね」

Ｂｌａｃｋ　Ｃｈｅｒｒｙの居候である女性から教わった。カロリーを消費して出来るマジックだ。

「食べる？」

二個目を作り出す。チョコレート餡の大福だ。

「素敵なマジックですこと。美味しいですわ」

セシリアにも喜ばれる。笑顔にする為のマジックだと教わったから、使い道は正しい。
「いたいたっ！！副代表ランチア・ストラトス！！」
「あー……」

学園内の新聞部であろうか。カメラで写真を撮りながら、ランチアに近付いてきた。

「どう？心境は？」
「えー……。あんなんが代表なので、僕が副代表として、命を削って努めさせていただく気持ちを持ってます」
「大人……」
口からでまかせ。ランチアがスプライトを飲みながら言った。
「そこのセシリア・オルコットさんとの戦いは、どういう感じだった？」
「女性の強さを、生徒代表として表に出していました。正直、気にやられそうでした。結果には勝ちましたが、気持ちだけなら、彼女が勝っていたと思います」
実際、恐怖心などなかったが、気持ちも持っていなかった。その点、セシリアは、ちゃんと闘心を持っていたことを、ランチアは評価していた。
「この方こそ、我が大英帝国の誇りですわ」
「あまり持ち上げないでよ？」
「事実ですもの」
何か？とセシリアが言う。ランチアは薄く苦笑いした。
「もしかして、お二人はデキちゃってたり？」
「それはない」
「ないですわね」
即答。あまりの速さに、新聞部が引いてしまった。

「ランチア？どうした、ピザ、食べないのか？」

ちょうど後ろから、ピザを持った箒がやってくる。これをネタに……、と思った新聞部が、また質問した。

「じゃあ、篠ノ乃さんとデキてるの？」
「何がですか？」
「ないねー」

先程と同じ様な反応。一応先輩なので、箒が敬語を使う。ランチアは、箒が持って来たピザを食べながら言った。

「いや、篠ノ乃さんとストラトスくんが恋人同士か、ってコト」
「ああ、それはないです。確かに頼もしいし、なってくれたら、助かるとは思いますが」
「遠回しに好きって言ってないかい？それ……」

変な言い回しをした所為で、突っ込まれてしまう。箒が顔を赤らめながら、否定した。

「無いです！！」
「だって、思い人は僕じゃないもんね」
「……なるほど」

ランチアの一言で感づいた。一夏か。

「ランチアさん、それは言ってはダメでしょう」
「なんで？だって、学園外の人間かもしれないじゃん」

わかっているから、余計質が悪い。しかし、それはそれでごまか

せると思った。

「学園外？」

「例えば、アイドルグループの人とか、同中の男の子とか」

「マジで？」

「……東〇紀〇ですよ」

「……渋くね？」

あまりの年代差に、ランチアと新聞部が突っ込んだ。唯一そのネタが判らないのがセシリアである。彼女の頭の回りに、？がたくさん浮かんでいた。

「ま、まあ。随分ネタも貰ったし、〇山紀〇が好きって判ったしで、私はここらでお邪魔するよ」

「お疲れ様でした」

「あ、そうそう。ギャラ」

新聞部がポケットから、缶と、袋を出した。

「レッドブルと、バが付く五文字のもの」

「ちょ、これは洒落になりませんよ？セクハラですよ？つか、買っちゃダメでしょ」

「何を貰った？」

ランチアの手元が気になる箒。見ようとするが、ランチアが必死に抵抗する。

最終的に、その場から走って離れ、箒を振り切る。その時であった。

「うわわわぁっ！？」

女子とぶつかり、飲み物がランチアに直撃した。無論、ランチアがびしょびしょになり、制服が汚れる。

「ごめんっ！！大丈夫？」

「う、うん……」

びしょびしょのランチアが妙にエロい。服が張り付き、気持ちが悪いランチアは、上の制服を脱ぎ、アンダーウェアだけになった。

アンダーウェアが濡れて、透けている。そこから見える、逞しい筋肉に、数人の女子が魅了された。

「ら、ランチアぁぁっ！！コートは羽織れっ！！」

「え？あ、あかん！！」

美しい背筋。逆三角の体。それを見た箒が顔をまた赤くし、叫んだ。

「んまぁっ、努力の体ですこと……」

セシリアが遠目から見る。筋肉の盛り上がり様が尋常ではない。努力して作った身体だろう。

「いやぁぁっ！！写真提供ありがとぉぉぉっ！！」

帰る直前の新聞部に、シャッターを連写される。ランチアはまた走り、レンズを避けながら、自室に戻った。

「ぐはぁ……。なんじゃこりゃぁっ……」
「あら、おかえ……り……」
「見、見ちゃダメだよ！？」
「アンタ、なかなか良いカラダしてんわね。ボディビルダー？」
「そっちじゃねェだろぉっ！？」

自室の鈴音に、見当違いの言葉を言われる。ランチアはアンダーウェアをシャワールームで脱ぐと、自分のマッサージ椅子に放り、バッグからタンクトップを取り出して、着替えた。

「制服もコートもびちょびちょだよ……」
「酒臭いわよ、コート」
「あの子、酒呑んでたのかよ！」
「あら、何か落ちたわよ……って、なんつーモン持ってんのよ！」

ポケットから出たバイ○グ○。ランチアは慌ててそれをごみ箱にぶん投げ、その場に膝と手を付いた。

「もうやだ……。この学園、なんか怖い……」

2

◆◇◆◇◆◇

翌朝。腹部に鈍痛を感じたランチアが、痛みの余りに眼を覚ます。

鈴のボストンバッグが腹部に落下していた。そして、横にはその当事者が。

「あのねぇ、私に起こされたら、さっさと起きなさいよ」

「……おはよう、ございます」

ボストンバッグを床に置き、ベッドから出る。乾かした制服を着、汚れたコートはそのままに、バッグから別の白いコートを着て、顔を洗う。

寝癖が酷い。手櫛で適当に整え、ゴム紐で後ろ髪を纏めた。

「今何時だ……？」

左腕のロレックスの腕時計を確認。7時になったばかりだ。

「朝メシはどうしたの？」

「食堂わかんないから、行けないっての」

「……それで、この有様か」

冷蔵庫から、緑茶と冷凍のパスタが出ていた。レンジで温め、食

べたらしい。

「あんまりパスタ好きじゃないんだけど」
「何故食ったし……」

昨夜のレッドブルを飲み干しながら、鈴に言った。

「始業が8：00からだから、まだ時間あるよね」
「余裕じゃない。食堂行くなら、さっさとしなさいよ」
「鈴音さんも行く？」
「勿論。早く行くわよ、神威悠李」

随分と偉そうだな、と思ったが、その時に、悠李と呼ばれたのに気付いた。

「アンタねえ、裏の人間の神威創龍の息子とか……。アンタのバッグの連絡先から判ったわ」
「まさか、親父に電話とか」
「したわよ。起こし方を聞きに。『一発入れりゃァ起きンだろ』とか言われたわ」

なんと酷い親だろう。悠李が頭を抱えながら思った。

「取り敢えず、ランチアで今は生きてるから、その名はあまり呼ばないで」
「なんで？」
「裏関係が混じってるんだよ」
「……ああ。なるほど」

裏関係、多分、彼等の本業だろう。感づかれては困るために、偽名を使っているのだ。

「じゃ、食堂行きましょうか」
「5分で行くわよ」
「5分？」

ランチアが鈴を担ぐ。ちょうど、ランチアの肩から、腰で分かれる感じだ。

「2分で行くさ」

◆◇◆◇◆◇

階段を全て飛び越え、言葉通り2分で着いた。ランチアは鈴を下ろすと、鈴がランチアの背中を叩いた。

「やるじゃない、アンタ！！」
「いいからメシだメシ」

料理を受け取るため、カウンターに行こうとすると、生徒が一斉にランチアに料理を渡す。

「ストラトスくん、食べて！！」
「私自身を食べて！！」
「最後はイラネ」

ありがたく頂戴し、空席に座る。鈴が隣に座ると、ランチアの料理を摘みはじめた。

「なにやってんの？」

頬を手で挟み込むように掴みながら、鈴に問うランチア。

「いいじゃな……いたたた！！離せっ！！」

「謝りなさいよ、まずは」

「悪かったからぁっ！？」

ランチアの手が外れた。鈴は顎をぺたぺたと触り、怪我が無いか確かめた。

「食べたかったら、言えばいいのに」

「ちっさいことを一々言ってられるかっての」

食事を進めるランチアに、鈴は睨みながら言った。余程痛かったのだろう。

「パンとスープ、おかわりしてこよっと」

「ついでに私のもね」

「判った」

パシリな感じではあるが、別に気にしない。料理を受け取り、人混みを飛び越えながら、元いた場所へ戻る。

「速いじゃない」

「飛んだからね」

「便利な身体能力よねぇ。羨ましいわ」

パンにかぶりつく鈴。ランチアはスープを啜りながら、彼女と話す。

「これも、父さんのおかげかな」
「何てったって、父親があの神威創龍だからね。敵なしの、最強の裏の人間よ」
「知っているのは、それだけか」

やはり、悪魔狩りの話は出て来ない。しかし、鈴は何故創龍を知っているのだろうか。ランチアが聞いた。

「アンタの父親はね、中国の麻薬のシンジゲートを1人で制圧したりと有名なの。その手柄を公にしたくない政府は、軍隊の手柄としてるけどね。中国の英雄なのよ、あの人は」

その話なら知っている。なるほど、それなら辻褄が合う。
「んで、ウチの親父と喋って、息子の僕と出会って、僕の冷凍パスタを食らう、と」
「あれ、美味しかったわ。ごちそうさま」

二人とも、持って来た料理を平らげ、食器を片す。そのまま校舎へ移動すると、1組の教室にて、鈴の話題が飛び交っていた。

「この時期に転入生!?」
「まさか、その子が対抗戦の相手……?」
「それはないでしょ。いきなりクラス代表を変えるなんて無理だし」
「そういや、ここのクラス代表は?」
「織斑一夏。君の幼なじみでしょ」
「一夏!?ふふふ……、チャンス到来!!」

この子も、一夏目当てか。ランチアが苦笑いしながら鈴を見る。

――そういう理由で入ってこれるも凄い。

その為の実力なのか、どうなのか、果して。

「対抗戦は４組とここが大穴なんだってさ。専用機持ちがそれだけだから」

「その情報、古いよ」

いきなりカッコつけはじめながら、鈴が話し始めた。ランチアは苦笑いしながら、彼女を見守る。

「２組も専用機持ちが代表になったから。そう簡単には優勝させないわよ」

「おはよう」

「ああ、ランチア。おはよう」

「人の話を聞きなさい！！」

教室に入り、先に来ていた一夏と挨拶を交わし、次に箒、セシリアと、お馴染みの面子に声をかけた。

「んで、なんで鈴がいるんだ」

「やっぱり、知ってたんだね」

「転入してきたのよ。代表候補生としてね。今日は宣戦布告ってワケ」

ランチアと一緒にいて、なんだそれ？と突っ込む一夏。鈴がランチアを見るが、「こいつは副代表なだけでしょ、しても無駄無駄」

と言った。

「ま、楽しみに――」

「し、志村ー！！後ろー！！」

「あん？後ろ？……って誰が――ぶみゅっ！！」

観客のランチアと一夏が叫ぶ。志村けん――ではなく、鈴の後ろから、出席簿という突っ込みが入った。相方の加藤茶――ではなく、これまたお馴染みの千冬である。

「いいから教室に戻れ。ＳＨＲの時間が過ぎてるぞ。それと、ストラトスに織斑。８０年代はやめろ」

「ええーっ」

ネタを知っている人間が何人いることだろう。ランチアがつまらなさそうに言うが、皆には大ウケであった。

「これでも、私も笑いをこらえているのだよ」

千冬が言う。どう転んでもそんな風には見えないが。

志村で始まる朝の学園。８時だよ！の偉大さを思い知らせたランチアと一夏であった。

「3

◆◇◆◇◆◇

「それで、一夏。あいつはなんなんだ？」

昼休み。箒が一夏に問い詰めるが、一夏はまたすかさずボケる。

因みに、それが気になり、午前中だけで、五回も出席簿による兜割りを食らっている箒。ランチアが氷嚢を持ってくると、ありがたく頂戴し、頭頂部を冷やした。

「お前、まさか志村けんを知らないのか！？」

「そっちじゃない！今朝の転入生だ」

志村けんは誰でも知っているだろう。ランチアはツッコんだが、セシリアだけ、ネタに着いていけていない。

「ランチアさん、志村けんとは？」

「日本のお笑い芸人だよ。チャップリンみたいなヒゲを付けてヒゲダンスをやったり、顔に白粉塗って、バカ殿とかやったりね」

「是非、見てみたいですわね」

ズレた会話が隣でされているが、箒は気にもしない。

「鈴か？お前が引っ越したのが小四だから、あいつが小五のころにこっちにきたんだよ。いわば、セカンド幼なじみ」

「じゃ、じゃあ彼女とかでは無いんだな？」

「何故彼女になる……」

一夏の緩いツッコミ。最近、この集団はツッコミ合戦になっている気がする。

昼食の為に食堂にやってきたが、ちょうど鈴が出迎えた。

「待ってたわよ、一夏！！」
「よう志村」
「志村じゃないっ！！」

そしてボケ。志村のノリが気に入ったのだろうか。
「いいから、そこどいてくれないか？食券が買えんし、通行の邪魔だし」
「わ、わかってるわよっ！！」

手に持っているラーメン。そこで、今日のランチアの昼食は決まった。激辛坦々麺を頼むつもりだ。

「麺、伸びるよ？」
「一夏が早く来れば、伸びなかったわ」
「俺の所為かよ」

食券を取り、カウンターに向かう一夏。それにランチア、箒、セシリアが続く。

「あ、鈴音さん？」
「何よ」
「席取っといて」

◆◇◆◇◆◇

真っ赤なスープの坦々麺を持ち、鈴が取っておいた席に座る。彼女がスープを覗き込んだ途端、顔が「うわぁ……」となる。

「それは人の食べ物じゃないわぁ……」

「そう？」

箸を咥え、ぱきっ割る。巷では、この割り方を「仕事人」と言うらしい。

「臭いが凄いな……」

ランチアの隣に座る箒。彼女はきつねうどんを頼んだ様だ。因みにセシリアは洋食セット、一夏は鯖の味噌煮と、バラバラなメニューだ。

「しかも、普通に食ってるし」

「美味しいよ？食べてみる？」

一夏に、スープが良く絡んだ麺を、自分の箸で取って食べさせた。よく言う「あーん」状態だ。

「か、辛っ！！バカ辛い！！」

口から火を吹くほど辛いらしい。ランチアは大袈裟と思いつつ、水を差し出した。

「あのですね、あなたたちの視線が痛いんですけど」

箒と鈴がランチアを睨む。別にそこまでおかしなことはしていない。

「い、一夏！！私のきつねも……」
「いや、今は水が欲しい……」

一杯の水がわずか3秒で無くなった。まるで吸水機だ。

「それにしても久しぶりだなぁ。丁度丸一年ぶりになるが、元気だったか？」
「げ、元気にしてたわよ。あんたこそ怪我病気しなさいよ」
「今、まさに怪我してませんか……？」

セシリアのツッコミ。一夏の舌は燃えている。

「なかなか上手いよ、今の」
「いや、思っただけですが」

ランチアの評価。セシリアは苦笑いしながら言った。

「そいで、一夏。対抗戦の為の練習なんだけど」
「あ、ああ。箒はダメだな」
「な、何をっ！！」

箒が激昂するが、ランチアは致し方ない、と思った。

擬音や感覚のみで話すのだ、彼女は。

「あれでわからないのか！！」
「いや、あれは無理がありますわ……。私が指導した方がいいのか

もしれませんが、やはりランチアさんに敵うのは誰ひとりいませんし」
「グリッドターンとかは教えた方がいいよ」
「随分初歩的ね」

鈴が釘を刺すが、しょうがないと思った。実際、一夏は初心者なのだから。

「でも、ランチアさんは凄いんですのよ?あの回避法は特殊かつ画期的です」
「ああ、リバーシブルとシャッフル?他にもスイッチとか、バックムーンとか教えたんだけどね」

スイッチは、自分と相手が入れ替わるように思わせる技だ。そして、バックムーンは後方宙返りである。

「剣も教えよっか?」
「それは箒の方がいい」
「わかっているじゃないか」

自信ありげな顔をする箒。ランチアがそれを見て笑った。

「あとは、あの瞬間移動だな」
「私との戦いで使ったあれですわね」
「あー。あれは流石に教えたくないなぁ」

エアトリックは魔力が関係してくる。そのため、彼等には不可能だ。

「流石、化け物」

横の鈴がそう言う。この子にまで、そう言われるのか、と思い、がくりと肩を落とした。

◆◇◆◇◆◇

そして、午後の授業も終わり、訓練が始まる。

「そうそ、そんな感じ」

回避技の「１３０Ｒ」を教えたランチア。バックムーンの要領で、頭を視点にし、足を振り子のように振って、元いた場所に着地する技だ。

「それと、グリッドターンでかなりの力が得られますわ」

「なるほど」

セシリアとの共同授業。箒は竹刀を持って待機している。

「後、一つだけ。僕取っておきの攻撃を教えちゃおう」

箒の竹刀を借りる。生身のまま、地面を蹴りだし、光線の様な速さで、剣を突いた。

「うおおお……」

「突進突き。クラウス・アーツの一つ、『スティンガー』さ。ブースターを吹かせば出来るでしょ？」

一撃当たれば、即撃墜の可能性もある、強力な技だ。ランチア以外が目を見開き、彼を注目した。

「おい、地面にクレーター出来てるぞ」
「あら。ほい」
砂を蹴り飛ばし、地面を埋めた。続いて、竹刀を箒に投げ渡す。
「実用的だな」
「まあね」
箒の一言。実戦向きの型だが、悪魔狩りにしか使用したことが無い。
「スティンガー、ね。なるほど、使ってみよう」

◆◇◆◇◆◇

そして夜。ランチアは箒の射撃練習に付き合うため、射撃練習場に来ていた。
「……」
「箒さん？ＵＳＰの弾は９ｍｍパラベラムだよ？」
「これは違うのか？」
「それは４５ＡＣＰ弾。誰が使ってんだ、これ」
見知らぬカートリッジ。気になって隣を見てみれば、千冬がソーコム・Ｍｋ．２３を撃っていた。
「何してはるんですか」
「見ればわかるだろう」
「いえ、わかりません」

射撃練習は教師も使えたのか。というか、これは私物なのだろうか。

「自前すか？」

「学校のだ」

「え、この前Ｍ９とグロ１８とＵＳＰとパイソンしか無かったんですが」

「探せばもっとある。Ｍ１９１１Ａ１とかな」

ここは武器庫か。悠李はため息を着いた。

ちょうど悠李のデスイービルに気付いた千冬も、それを見て呆れる。

「ゴツいリボルバーと思えば、ツェリスカか……。なんてものを。象狩りの拳銃など、お前しか使えないだろ」

「親父が使えます。アイツはＤＥを片手で、且つ無反動で連射しますからね」

「化け物家族め」

片手で６０口径の大砲を撃つ人間が目の前が居るから、この世界は広いと感じさせられる。

「悠李、弾をくれ」

「あい」

新たに持って来たマガジンを渡す。きちんとマグチェンジも出来る箒に、千冬が感心する。

「箒、誰から教わった」

「そのヘラヘラ笑っている死神から」
「なるほど」
「千冬さん、軍隊出身だっけ？」

千冬も、マグチェンジから、初弾までの動作が速い。悠李がそれに感づいた。

「ああ、ドイツにな」
「ミハエル・シューマッハ、いた？」
「ああ」

いきなりＦ１の顎兄弟の話が始まった。悠李はこういうところにも詳しい。

「フザけた看板した店もあったさ。見知らぬスラムの辺りだった。確か、『Ｂｌａｃｋ　Ｃｈｅｒｒｙ』だったか？」
「そこ、僕ん家……」

まさか、家を知っていたとは。悠李がはは っと笑う。

「しかも、そこは国の範囲にない……」
「無国地だと……」
「政府が関与しないから……」
色々とメチャクチャだ。千冬と箒が苦い顔をした。

「あそこの店主、女しかいなかったが」
「どんな人？」
「水色のロングの髪の毛だ」
「キリエさんだ。槍とガバメント使いだよ」

創龍が異世界に行った時、相棒として連れ帰ったらしい。

「てか、なんでウチに？」

「雨宿りだ。少し迷ってしまってな」

スラムで迷うと危険である。何に襲われるかわからない。

悠李も幼い頃、暴漢に襲われたが、走って逃げ切り、最終的に暴漢が創龍に殴られてカタが着いた。

スラムまで来て雨宿りとは、なんとも呑気だ、と悠李が思った。

「悠李、そろそろ帰るか」

「あ、うん。解った。では、お先に失礼します」

「ちょっと待て」

千冬が悠李達を制する。彼女はスーツのポケットから、小銭を出した。

「なんか買ってこい」

「やった！！」

「何を勘違いしてるんだ、私にだ」

◆◇◆◇◆◇

適当にコーヒーを買って、千冬に渡して自室に戻る。箒が肩を叩き、悠李を慰めた。

「そういう日もあるさ」

「教師がやることじゃねえ……」

生徒をパシる教師など、前代未聞。これを教育委員会に訴えたらどうなることやら。

帰りに自分の金でお茶を買う悠李。ついでに箒にも奢ってやった。

「ありがとな」

「いいよ。箒さんなら、ドンペリだって入れちゃう」

「アホか」

ふふっ、と笑う箒。悠李はボトルを傾け、口に緑茶を注いで喉を潤した。

「あとな。呼び捨てでいいぞ？私も呼び捨てでお前を呼んでいるんだから」

「じゃ、遠慮なく箒って呼ぶね」

にこりと笑顔。箒もそれに釣られて笑った。

自室内に入る。鈴がいない。隣にいるのだろう。

一日でベッドがぐちゃぐちゃだ。鈴の荷物を片付け、衣服は自前の洗濯機にかける。

「い、言ったわね！！言ってはいけないことを言ったわね！！」

案の定、隣から鈴の声。感情的になっているようだ。

続いて、鳴り響く爆発音。悠李は慌てて隣に駆け込む。

鈴が片腕だけＩＳ展開をしていた。一夏が怯え、箒は頭を抱えている。

「鈴音さん、自重しようか」

「うるっさい！！黙ってなさい」

言いながらも、首根っこを捕まれ、引きずられていく鈴音。ドアが閉まる前、鈴が捨て台詞を吐いた。

「あんた、次の対抗戦、覚えてなさい！！ギッタンギタンにして、思い出させてやる！！」

Ｍｉｓｓｉｏｎ　６　覚醒　－Ｆｉｒｓｔ　Ｂｒｅａｔｈ－

◆◇◆◇◆◇

「落ち着けって」
「これが落ち着いてられるか！！」
「話を聞かせてよ」
「部外者は黙ってなさい」

部屋へ連れ戻したはいいが、鈴音の怒りは収まらない。取り敢えず、ＩＳを仕舞わせたはいいが、話は聞かせてくれない。

「なんであんなに大切なことを……っ」

その瞳には、うっすらと涙が浮かんでいる。悠李は鈴の瞳を見つめ、優しい声音で言った。

「ねえ。泣いている女の子を、無視出来る訳、ないじゃないか。話を聞かせてよ」
「な、泣いてなんか……」
「泣いてるよ。アイツの鈍感さが、ここまで傷付けたのは、予想出来る。だから、話して」

微笑む悠李。潤んだ瞳から、河を作る一滴が流れた。

ティッシュで涙を拭き取ってやる。まるで、小さな子供の相手をしているようだ。

「あ、アイツ、昔交わした約束の意味を、判っていなくて……」

「どんな約束？」
「『毎日酢豚を作ってあげる』、って。アンタなら、解るわよね？」
大切な人の為に、料理を作ってあげるという意味だろう。つまりは、『付き合って』という意味か。
「なるほどねぇ……」
「なんでわかんないのよ、って言ったら、逆ギレされて、しまいには貧乳呼ばわりよ！？」
発展途上の胸の膨らみ。コンプレックスを悪く言われたら、流石に怒るだろう。
「僕よりデリカシーがないなんて……。あのバカ」
「でしょ！？だから、一回痛い目に合わせて、思い出させてやるんだから」
「鈍感であるなら――」
悠李が言いかける。鈴音が悠李を見ると、彼がフッと笑って言った。
「遠回しじゃなく、直球で行くべきだと思う」
「そんな勇気、あるわけないじゃない……」
「そうしてる間に、箒とかに持ってかれるよ？後悔したくないなら、今言わなきゃ」
それでも、彼女には勇気が出ないのだろうか？
悠李は疑心暗鬼に思った。
案の定、鈴音には無理らしい。悠李はため息を突き、苦笑いをす

る。

「今度、対抗戦の後で告白しちゃいなよ」

「それが出来ないのに？」

「いや、君なら出来るさ」

何の根拠も無いが、自信が無ければ出来るものも出来ない。そう考えて、悠李は背中を押した。

「アンタ、本当にいい奴ね」

「そう言ってもらえれば嬉しい」

微笑む悠李。鈴音の怒りが収まったようなら、良しとしたい。彼はそう思った。

「それでさ、鈴音さん」

「鈴でいいわよ。アンタなら」

「鈴。洗濯機、回してるけど、着替えはちゃんとあるよね？」

「勿論。無ければアンタの服を借りるわよ」

貸してもいいが、彼女には大きすぎるだろう。丈は大きく、ズボンの裾を踏んでコケてしまう姿が想像出来た。

１８４ｃｍの巨体に合う服を見つけるだけでも精一杯だが、それ以上に、女子の服を見つけて来ること、特に下着を探すのが難しい。性別という点でも、サイズという点でもだ。

「でも、随分静かな洗濯機ね？幾らしたの？」

「５００ポンド。５万くらいかな？小型洗濯機なんだよ」

確かに、洗濯機のサイズ自体は小さい。しかも、ドラム式洗濯機だ。

「ランドリー、ちゃんとついてるのに」

「僕だけ特別なのさ」

「まあ、便利屋だからね」

この時だけ、悠李の職業が羨ましい。

学園に依頼される人間だから、それなりの対応をしたのだろう。

代表候補生のセシリアも、私物を持ち込んだ部屋だと悠李と鈴は聞いているが、これより豪華ならば、セシリアの財力をフルに使った部屋であるのだろう。

「よしっ！アンタから元気を貰ったことだし、お風呂でも入ってこよっと」

「ああ、大浴場は一番下だよ」

「判ったわ、ありがと」

洗面用具を持って、鈴が部屋を出る。確認したあと、ほっと悠李は胸を撫で下ろした。

「よ、よかった……。この寮が消し炭になるところだった……」

安堵感に包まれる。コートを脱ぎ、制服から、タンクトップの姿になる。

「ら、ランチア？鈴はいるか？」

ドアを開ける音。鈍感大王の一夏が入って来た。

「一夏」
「なんだよ」
「首吊って死ね」
「お前も言うか！？」

箒にも、先程の事で何か言われたらしい。
当たり前だろう。女性の胸を馬鹿にするなど言語道断であるし、セクハラでもある。

「悠……じゃなかった。ランチア？夕飯を食べに行くぞ」
「箒、ちょっと待ってて」

ランチアに再び戻り、一夏を隣の部屋の椅子に縛り付け、二人は食堂に行った。

2

◆◇◆◇◆◇

対抗戦当日。食堂のデザート半年フリーパスの期待を背負った一夏。だが、それ以上に、鈴のプレッシャーが一夏を圧倒していた。

朝の食堂からおかしな重圧。一夏にだけ、的確にかけてきた。

そして、会場の第2アリーナ。観客は大勢いたし、無論ランチアと箒、セシリアもピットにいた。

「一夏さん、ランチアさんの期待に応えて勝ってくださいね」
「あ、ああ」
「あっちからのプレッシャーがパネェっす」

向こう側のピットからの重圧。まるで殺しに行くかの様な気負いだ。

「い、行ってくる……」

勿論、いつまでもピットに篭るわけにはいかない。勢い良く打ち出され、大空へと舞い上がる。

「……待ってたわよ、一夏」

いざ目の前にすると、やはりとてつもないプレッシャー。それだけで負けてしまいそうだ。

「今許しを請うなら、痛め付けるレヴェルを下げてやってもいいわよ」
「雀の涙程だろうが。いらねえよ」
「シールドを貫く程の強い衝撃を与えれば、本体の方にもダメージが行く。それでアンタの記憶を取り戻させてあげるわ」
凄んだ声。本気さが伝わって来る
ここで負けたくない、その気持ちを再確認した一夏は、鈴を見据えた。
「いくぞ……。最初から本気だ」
「当たり前じゃない」
試合開始の合図。同時に一夏が雪片を突き出し、突進する。
ランチアの「スティンガー」を見様見真似でやったのだ。
「オラァッ！！」
「な、何っ！？」
完全に出足を挫かれた。しかし、ギリギリで、鈴のＩＳの非固定（アンロック・ユニット）武装が一夏の足を止めた。
「なんちゃって」
非固定武装の装甲がスライドし、見えない何かに襲われる。一夏がそれを確認出来ずに吹っ飛んだ。
「この甲龍（シェンロン）、舐めて貰っちゃ困るわ！！」

そのまま見えない何かに翻弄される。ピットでは、セシリアの解説が入った。

「あれは衝撃砲。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃――それ自体を砲弾化して撃ち出す、ブルーティアーズと同じ、第三世代型兵器ですわ」

次元斬と似た様なモノか、と解釈する。ランチアは壁に寄り掛かる。

「空気に色を塗らないと、避けられないか」

「スラスターの揺らぎを見れば、避けられるんでない？」

「最悪なことに、あの兵器には死角が無いようです」

「まさに、四面楚歌か」

アイツにはいい教育になる、と思うランチア。モニターを見て呟いた。

「パニック状態になれば、それこそ冷静に行動できなくなる。あの状況で、どこまで気を保てるか……」

アイツにはいい教育になる、と思うランチア。モニターを見て呟いた。

ランチアならば、エアトリックで鈴の後ろを取って攻撃するだろう。しかし、一夏は人間だ。いきなり魔力を使いこなすなど、出来はしない。

「ったく、無駄に敵を作るから、そうなるんだよ……」

笑いながら言う。全然説得力が無い。

苦戦し続ける一夏。突破口を探し出そうとする引き換えに、エネルギーを削られていく。

「……ならっ！！こうだ！！」

アンロック・ユニットを上手く誘導し、一機を破壊する。そのままスティンガーをもう一発放った。

一撃で、大半のゲージを持っていく。使用した一夏でさえ威力に驚愕する。

「くっ……」

「やられっぱなしは、性に合わないんだよぉっ！！」

燃え上がる二人の闘魂。

「――何か、来た」

――それを邪魔するかのように、二人の間に、煙が立ち上がった。

3

咄嗟の悠李の反応。アリーナのシールドを突き破り、衝撃がほとばしる。

「何事だ」

「ＩＳだと思います」

千冬が落ち着いて悠李に状況を聞く。悠李も冷静に事を返した。

「織斑！！鳳！！戦闘中止だ！！」

インカムに向かって指示。彼らに聞こえてはいるようだが、煙が立ち上がっている為、相手を視認出来ない。

「ストラトス。緊急任務だ。いいな？」

「判ってます。アイツを壊せば良いんでしょう？」

ニヤリと笑いながら、悠李は返した。肩を軽く回すと、手から両刃の長剣を取り出した。

「天上天下なら、余裕です。でも、ちょっといいですか？」

「何だ？」

「アイツらがどこまでやるのか、見てみようじゃないですか」

楽観視しすぎている。千冬が冷静を装おうと、コーヒーを注ぐが、砂糖ではなく塩を入れていたので、かなり動揺していることが解る。

「やっぱり、僕が出た方がいいで――」

悠李が言いかけた時、箒が部屋を飛び出した。悠李はそれに気付くと、彼女を追う。

「ストラトス！！」

「箒は守ります。責任は取りますから」

千冬のストップが掛かるが、振り切った。箒が走って管制塔に向かうが、悠李に易々と追い付かれた。

「勝手に飛び出すんじゃない」

「黙って行かせてくれ」

「行くなら僕に声を掛けろ。君に何かあったら、一夏にどの面下げていきゃいい？」

行くこと自体を否定してはいないようだ。つまり、悠李が箒を守る、と言っている。

「死なせる訳にはいかないんだ」

管制塔にちょうど着く。先にいた、シールドなどの緊急調整を行っていた上級生のインカムをひったくり、叫ぶ。

「一夏ッ！！男ならッ！！そんなもの、勝って当然だろうッ！！」

無茶苦茶だ。だが、それだけ、彼に期待しているのだろう。

出所不明のＩＳのカメラがこちらを向いた。銃口を向け、こちらに撃ち込もうとしている。

「っ……。面倒をかけるっ！！」

ガラスを叩き割り、ＩＳのビームを天上天下無双剣で弾き返した。

「一夏、鈴！今だ！！」

声に応えるように、一夏の雪片弐型がＩＳを斬り付け、鈴の衝撃砲がそれを地面に叩き付けた。

「なんなのよ、アイツは……」

「おい……。自己再生だと！！」

鈴と一夏の通信が聞こえる。ＩＳの状況を伝えているのだろう。

「チィッ！！悪魔が取り憑いてんのかよ！！」

管制塔から飛び降りる悠李。それを狙ったのか、ＩＳもいきなり飛び上がった。

「Ｃｕｔ　ｏｆｆ！！（斬り落としてやる！！）」

兜割りですれ違い、片腕を斬り落とす。同時に、ＩＳを踏み台にし、瞬時にエレクトロヘヴィに持ち替え、空中で掻き鳴らした。

ギターから、電撃と、雷を帯びた蝙蝠が飛び出して来る。それを顔面に当て、視界を殺した。

「これでも……喰らいなっ！！」

最後の止めに、左手でデスイービルを構えた。持った手が光り輝

くと同時、トリガーを引き抜いた。

紫色のマズルフラッシュ。着弾し、炎が上がる。

「さあ……。出てこい、悪魔！！」

叫び声に応えるかのように、ＩＳの装甲から、黒装束の、骸骨の仮面をした悪魔が、大きな鎌を持って、悠李に襲い掛かった。

「ヘル＝バンガード？ハッ、上等！！」

斬り上げた鎌の刃を蹴り付け、飛び上がる。管制塔の高さまで、また戻った。

「ら、ランチア！？それに、あれはなんだ？！」

「一夏！！目の前のＩＳに集中しなさい！！」

悠李の戦いに気を取られるが、鈴の声で我に戻った。ビームを撃たれると同時、１３０Ｒで一夏はそれを避けた。

「一夏、エネルギー残量はどれくらい？」

「７００ちょいだ！お前は？」

「私は６００強はあるわ」

ギリギリの戦い。気を抜けば、やられてしまう。

「やるっきゃねえ！！」

雪片でビームを逸らしながら近付く。セシリア戦でも見せた、「ウェポンマジック」という技だ。

「こっちにゃ、ランチアの為にも負けらんねえんだよ！！」

上で必死に未知の生物と戦っている悠李に、このＩＳまで乱入させては、余計に彼に負担が掛かる。それを考えての行動だった。

◆◇◆◇◆◇

「管制塔ッ！！総員待避しろ！！」

ヘル＝バンガードの攻撃を避けながら、悠李が指示する。上級生が慌てて逃げ出すも、箒はその場で悠李を見続けた。

「悠李ッ！お前の力を見せろッ！！」

「あいよォッ！！」

ヘル＝バンガードが眼を光らせて消える。そして、悠李の足元から、地獄の門番が、鎌を斬り上げながら上昇した。

「Ｇｕｎｓ！！（ガンズ！！）」

足元に魔力の足場を作り出し、それを蹴り付け――エアハイクで上昇した。最上位までに到達したバンガードをまた踏み付け、高みを目指す。

「Ｆｕｃｋ　ｏｆｆ！！（くたばれ！！）」

正面に、また死神のゲートが表れ、悠李の首を刈り取ろうとする。それを避けつつ、零距離で先程のチャージショットを放ち、自らの回りに幻影剣６本で円陣を作った。

２回目の突進。エアハイクでまたもや避けると、幻影剣をバンガ

ードの回りに展開し、一気に射出した。

烈風幻影剣という、ガンスリンガースタイルで使用する、幻影剣の技だ。一気に射出するから、威力が上がる。

「Ｈｅｙ，ｗｈａｔ‐ｓ　ｕｐ？（オイ、どうした？）」

バンガードへの挑発。悠李は余裕を見せ付ける。

地獄の門番がそれに怯み、悠李から距離を取るが、どんなレンジでも、悠李の攻撃は当たる。

管制塔に入り、箒の横で、闇魔刀を出し、次元斬を放つ。

悪魔から吹き出す血。管制塔の壁を汚し、朱に染める。

悠李が天上天下に持ち替え、腰だめに構え、ブーメランの様に剣を投げ付けた。

またもや連続攻撃。バンガードを剣が斬り刻んでいる間、悠李はまた空中に飛び出し、闇魔刀で追撃する。

バンガードを踏み台にしながら、華麗な４連斬。空中連撃と、ラウンドトリップという技のコンビネーション。

息を付かせる間もなく、ひたすら攻撃を当てていく。

「Ｅｎｊｏｙ　ｎｏｗ！！（楽しもうぜ！！）」

闇魔刀を腰に、そして、見えない速さで、抜刀二連撃。創龍から教わった、空中連斬という技だ。

抜刀を主体とする創龍の技。それと、抜き身の刀メインで戦う悠

李。二つの技を合わせ、強力な剣技に変えた。

「逝っちまえ！！」

壁にバンガードを叩き付けた。そのまま、背後に魔力の足場を作って蹴り出し、前に進んだ。

天上天下を突き刺し、串刺しにしたまま、下のＩＳに投げた。命中し、ＩＳの体勢が崩れる。

「これで終わっただ……ろ？」

しかし、ＩＳの加速は止まらない。手に持ったライフルから、図太いビームが放たれる。

完全に油断していた。悠李は身体を空中で反らし、ビームを避けたが、すぐに二発目が待っていた。

ちょうど管制塔の真ん前にいるところを狙い撃ちされた。悠李の腹部をビームが貫き、彼が管制塔の壁に叩き付けられた。そして、怨みを晴らさんとばかりに、ヘル＝バンガードがヘル＝ゲートを開き、悠李の肩から腰までを深く斬り付ける。

床と壁に悠李の血。彼の足元には血溜まりが出来、それが今、更に広がろうとしている。

ヘル＝バンガードは追撃を止めない。転がり落ちた天上天下無双剣を、突進しながら悠李の腹部に突き刺した。

顔が凍り付く箒。今目の前で起こっている惨劇に、成す術も無い。

悠李の眼は完全に閉じている。苦しみに悶えながら。

ヘル＝バンガードが悠李を地面に倒し、鎌でまた斬り付ける。残忍な悪魔の本性。目の当たりにした箒は、顔を青くする。

「ゆ、悠李っ！！」

必死の力で悠李の名を呼ぶ。届いているか、聴こえているかは判らない。

門番がすかさず標的を箒に変える。そこで漂っていたＩＳも、ライフルを構え、箒を狙った。

絶体絶命。生き残る望みが無い。

足が竦む。腕は動かない。最早、声すらも出ない。

もう終わりだ。マズルと鎌が、交叉する。

両者が一斉に動き出す。眼を閉じることすら、箒には出来なかった。

「4

剣が吹き飛び、天井にぶつかる寸前。

箒に向かって来る攻撃が、死んでいた筈である悠李によって、止められた。

片手で鎌を止め、もう片手で魔力を張り、ビームを吸収する。

「ゆ、悠李……？」

「死なせねェよ。僕がここにいる限り、誰一人も」

傷は完全に塞がっている。落ちてきた天上天下無双剣を拾うと、バンガードを斬り飛ばした。

「ちょっと、寝てたがね……。僕がこんなモノで、死ぬとでも？」

悠李が完全に復活した。ＩＳのメインカメラを銃撃で破壊する。

「僕をここまで追い詰めたのは、お前らが初めてだよ」

悠李の身体に、紫電が走る。次第にそれが速くなっていき、悠李を完全に包み込んだ。

「その度胸、気に入った。ならば、僕も、全力で応えないとな」

ドレッドノートの時と同じ、エコーが掛かる。雷が更に強くなり、光の繭の中から、人とは掛け離れた――悪魔の姿が見えた。

「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ?」

異常に強化された左手。眼光は鋭く、全身が刺で覆われた様な外見。左手で天上天下を持ち、横にゆっくりと剣を振った。

ヘル＝バンガードが、鎌ごと真っ二つになり、半身ずつが別れる。

僅か2秒の出来事。何の造作もないように、地獄の門番を屠ってしまった。

「お……お前、悠李なのか……?」

「ああ。正真正銘の、神威悠李の真の姿さ」

突然の出来事が重なり過ぎて、声が暫く出なかった箒が、その口を開いた。

そこにいるのは、悠李である。魔人の姿の、神威悠李。

「ストラトス、篠ノ乃!!無事……か……」

上の衝撃音に、慌てて千冬達が駆け込んできたが、その光景に言葉を失った。

「ら、ランチアさん……?」

「いかにも、僕がランチア――いや、神威悠李さ」

暫く敵のＩＳが動かなかったが、セシリア達が入って来た途端、次弾を撃とうとする。

「Ｃａｎ　ｙｏｕ　ｗａｉｔ　ａ　ｗｈｉｌｅ?（少しの間も待て

ないのか？）」

逆るビームを、自らの身で受け止めた。勿論、傷は付けられたが、一瞬でそれを再生してみせた。

「Ｏｋ……．Ｃ'ｍｏｎ．Ｃｒａｓｈ　ｙｏｕ．（いいぜ、来な。ブッ壊してやる。）」

千冬達がその現象に驚き、動きを止めた中、悠李がゆっくりと言い、エアトリックでＩＳに急接近し、蹴った。

たった蹴り一発のみで、機体が吹っ飛び、内部パーツが砕かれた。悠李はそれだけでは止まらず、魔力の足場を蹴り出す――スカイスターで距離を詰め、天上天下で、空中の四連斬「エリアルレイブ」で追撃した。

四つに細切れにされ、それが地面に落ちていく。

下にいる一夏達が、悠李を確認する。本物の悪魔の姿。だが、不思議と安堵感が心に湧く。

「ふう……」

頭を後ろに振り、悪魔の姿から、人間へと戻る。

「神威……。良くやった……」

千冬が血で朱に染まった管制塔から言う。その言葉を聞いて、急に悠李は気絶した。

「ランチアっ!?待ってろ、今行く!!」

地上へと急降下していく悠李。一夏がそれに気付き、スラスターを吹かして、親友を受け止めた。

「ランチア……」

悠李の顔を覗き込む一夏。生気がまだあると、にこりと笑った。

＞＞一夏っ!!ストラトスは無事なのか!?＜＜

「大丈夫だ、気絶してるだけだよ」

取り乱す千冬を、穏やかに抑える一夏。

悠李を抱え、ピットに戻ると、来ていた救護班に悠李を渡し、自らの武装を解除した。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　７　悪魔の引き金（前書き）

再びこんにちは。

前回、悠李の魔人化が出て来ましたが、その絵をあげるのを忘れていました。

下のＵＲＬから見れますので、興味がある方は見てやってください。

ｈｔｔｐ：／／ｍ．ｍｂｕｐ．ｎｅｔ／ｄ／１６５６７２．ｊｐｇ

Ｍｉｓｓｉｏｎ　７　悪魔の引き金

◆◇◆◇◆◇

「……ん？」

見知らぬベッドに、見知らぬ天井。服はコートと、破れた制服。

起き上がり、回りを見渡す。どうやら、自分は病院にいるらしい。

「やっと起きたか、神威」

馴染みのある声。黒スーツの千冬が、悠李に声をかけた。

「千冬さん？ここは？」

「病院だ」

頭を押さえ、記憶を呼び戻す。

――確か、悪魔になって、気絶したんだっけ……。

「頭が痛むのか？」

「いや、思い出していただけ」「そうか」

握り締めていた右手を開く。血で汚れており、鉄の臭いがした。

「よくやってくれた。本当に」
「ありがとうございます」

千冬が誉めるイメージなど、浮かびもしなかった為、少し笑みが悠李の顔に浮かんだ。

「診断では、内部の損傷が無いとのことだ」
「まあ……。半人半魔の長所ですね」
「完全に、あの姿は悪魔だったぞ」

千冬にもそう言われるが、自分でも良く分からない。あの時、自分の身に、何が起こったのかが、理解できなかった。

「箒も外傷ゼロだ。制服に血が付いているがな」
「後で謝らないと」

薄く笑う悠李。千冬が溜息を付くも、軽く笑った。

「何か飲みたい物はあるか？」
「へ？」
「食べ物でもいいぞ」

物珍しい眼で千冬を見た。「どうかしたか？」と言わんばかりの顔を彼女がする。

「キャラじゃないですね」
「まあな……」
「取り敢えず、お茶を貰えますか」
「判った」

千冬が病室のドアを開ける。外には、一夏らが待機していた。

「よっ、元気か、悠李？」

「一夏。聞いたの？」

「ああ。全部聞いたぜ。この人に」

後ろから、水色の長い髪を携えた女性が出て来る。悠李にとって、とても身近な人だった。

「悠李、お久しぶりです。大丈夫ですか？」

「キリエさん、久しぶり。仕事は？」

「創龍に任せてきました」

ゆっくりと悠李に近付く、キリエと呼ばれた女性。千冬が見た、「Ｂｌａｃｋ　Ｃｈｅｒｒｙ」の一人がする。

「なので、オフです」

「へえ……。ま、親父には良いかもしれんね」

「そうですね。あっちの音姫さんが大変ですが」

「でも、音姫さんは喜ぶでしょ？」

「それをイジる創龍が想像付きますよね？」

「まあね」

ベッドの横の椅子に座り、悠李と店の会話をする。完全に一夏達を置いてきぼりにした。

「さて……。一夏さんに、箒さん、セシリアさん、鈴音さん」

「はい？」

「ありがとうございました。この子の親友であってくれて。特に、一夏さんがいなければ、この子の首は逝っていましたから」

大体状況を聞いたらしい。
それから予想出来ることを想像したら、背筋がゾッとする。

「コイツは、死なせませんよ。俺の親友ですからね」
「生意気言うねぇ」
「うるせえ」

笑い合いながら話す一夏と悠李。キリエが微笑ましく思い、悠李達を見た。

「箒さんからも、お話は聞きましたよ。自らの引き金を引いた様ですね」
「引き金……？」

悠李が首を傾げた。それを知りたいのは悠李だけではなく、一夏や箒達も聞く様子だ。

「創龍から、聞かされていないのですか？貴方には、クラウスの血が流れているのです。更に言えば、貴方はクラウスと同じ存在……」
「……へっ？」

間抜けた声。あまりの真実に、気が抜けた。

「貴方はバーミンガムで拾われた、それは聞きましたよね？」
「うん。それが？」
「拾われた場所が、教会だったのです。それも、クラウスとスパーダを崇める教会……」

クラウスとスパーダ、魔界の侵攻から人間界を救った、伝説の魔

剣士の兄弟。
魔帝に最も信頼された悪魔。人間の愛を知り、魔帝に背き、その剣で魔帝を討ち滅ぼした。

「僕は、御祖父様のコピー？」

ゆっくりと頷くキリエ。悠李は自分の手を見つめた。

――この手も、御祖父様の……？

困惑するしかない。それを受け入れるのは、あまりにも難しい。

「創龍が今２８ですから、およそ１３年前となると、１５ですね。貴方がまだ、３つか２つの頃に、拾ってきたようです」
「捨て子……？」
「いえ……。教会の狂信者達が、創龍の血を元に、貴方を創ったのです……」

2

◆◇◆◇◆◇

時は13年前。黒いコートを着た、長髪の男が、雨の中に傘も差さずにいた。

「ようこそ、教会へ……」

「随分ときったねェ教会だね。臭くて鼻が曲がっちまうぜ」

悪態を付きながら、教会の出入口で、教徒と話す。教会の中がうっすらと見えた。血で床は汚れ、一番奥には巨大な石像が見えた。

「血生臭ェな。俺も、このアートの絵の具になっちまうのかね？」

「いや？貴方は丁重にお持て成し致しますよ……」

フードを被った教徒が、にやりと笑う。

そして、隠していたナイフで男の腹部を刺した。

「はァ……。あのよ、効かねェの、判ってやってンのかよ？」

「貴方の血が欲しかったのですよ……」

ナイフを引き抜き、そのまま後ろに投げる。ちょうど石像の前に落ちた。

「変わりモンだね、アンタも」

間髪入れず、男が改造したデザートイーグルを撃ち、教徒の頭を吹っ飛ばした。首から血が吹き出し、アートの一部になってしまっ

た。

「ったく、くだらねェ――」

その場から立ち去ろうとする。しかし、目の前に、まばゆい光が発せられ、男の興味をそそった。

歩きながら光に近付く。その光が消えると、裸の男の子供が現れた。

「オイオイ、何だよ、こりゃ」

身体を見る限り、2・3くらいか。男はその子を抱き抱える。

「……親父？」

つい口から出てしまった言葉。その子と、実父との感じや力が、非常に似ているのだ。

「そ、創龍……様……」

「ん……？誰だ？」

「こちら……です……」

創龍と呼ばれた男が、身を声がした方に動かす。初老の、心優しそうな男性が、多数の切り傷で苦しそうにしていた。

どうやら、先程の教徒にやられたらしい。男性は腹を抱えて話す。

「貴方は、クラウス様のご子息の創龍様でしょう……？」

「じいさん、無理すんな。今助けてやる」

先程殺した男の服を引き裂く。自らのコートから出したウィスキ

ーボトルの中身で消毒し、服をガーゼや包帯の様に、傷口に当てた。

「あ……ありがとうございます……」

「礼には及ばねェ。それより、あのガキはなんだよ？」

「あれは……。あの男が作り出した、クラウス様の複製です……」

「素体も、何も判らずに、か」

幼い子供。創龍の眼に、それが映る。

この、まだ年端も行かないこの子供が、そのような産まれ方をするとは、なんと残酷で悲しきことだろうか。

先程の男の死骸を見る。見れば見るほど、それに対する怒りと、子供への悲しみが込み上げてきた。

「あの男は、クラウス様に心酔し、自らクラウス様を蘇らせようと致しました……。そして、クラウス様の肉片と、貴方の血とを組み合わせ、あの子供を作り出したのです……」

「親父の肉？そんなモン、どこに……」

クラウスは何年か前に死んでいる。埋葬されたのか、燃やされたのかは、息子の創龍にも判らなかった。

人の親の血肉を使う。それさえ、創龍を怒らせるのに十分であったし、同時に、そこまでするのに理解できない、とまで思わせた。

「ここの墓地に、クラウス様は眠っております……」

「初耳だぜ」

「てっきり、知っているのかと思っておりましたが……」

誰が埋めたのか、検討はある。多分、クラウスの弟であり、創龍の伯父である、スパーダであろう。

「……。俺の親父で、創られたのであれば」

子供の所に行き、コートを脱いで、その子を包む。そして、その子を抱き抱えた。

「俺が、コイツを守って、立派な子に育て上げてやる。俺の様な血に塗れた奴にはしたくないが、コイツがそれを望むなら、やむを得ねェさ」

「創龍様……」

「こいつァ、俺の子だ。親父がいない今、俺が責任を取るしかあるめェよ」

教会を出ていく創龍。雨に打たれ、便利屋へと戻っていく。

「名前も決めねェとな……。悠か長い時を経て、大きな李の木のように、育ってほしい……。悠李、だ」

一瞬の閃き。しかし、重みがある名前だ。

ゆっくりと、人間臭い男に育ってほしい。自分とは違い、より人間の様に。

「悠李、よろしくな」

悠李の頬を撫で、微笑む１５の若者。随分と若い父親だ。

不釣り合いかもしれない。しかし、血族である以上、責任は果たす。

その瞬間から、創龍の背中が、父親の背中になった。

3

◆◇◆◇◆◇

「実の母親も、父親もなく、只一人の血族が創龍。貴方を守るため、創龍は引き取ったのです」
「初めて聞いた……」
悠李の眼が丸くなる。キリエは優しく微笑み、悠李の手を握った。
「いきなり受け入れるのは、キツいかもしれません……」
「うん。まさか、親父がそんなに若かったなんて」
「あらっ？」
悠李以外がずっこけた。ちょうど、ペットボトルの緑茶を持って来た千冬が入ってくると、ずっこけた現場を見て、首を傾げた。
「注目すべきトコはそっちじゃないだろぉっ！！」
「一夏、何が？」
……お世話様です、レイソンさん」
「は、はい……。どうも……」
緑茶を投げ、それをキャッチする悠李。キャップを開け、茶を飲む。
「キリエさん。僕がどうやって産まれたのか、何者なのかを知っても――」

真剣な目付き。悠李がキャップを閉め、ゆっくりと口を開いた。

「僕は、神威創龍の息子。神威悠李であることに、変わりはないよ。僕は僕だ」

「そうですね。流石は、創龍の息子」

予想していた様に、キリエが返した。悠李がまたもやキョトンとなる。

続けて、キリエが口を開いた。悪魔の力について、話そうとしているらしい。

「貴方が、魔人に変身する時、身体はある引き金を引きます。それを、創龍はこう呼んでいます」

デビルトリガー

――悪魔の引き金　……と。

悠李の顔付きが更に真剣になった。一夏らも、キリエの話を聞き入る。

「貴方の悪魔の血は覚醒しましたね？それによって、貴方は魔人に変身出来るのです」

「覚醒が、引き金、と」

「表現するならば、ですが」

ニコニコと笑顔を絶やさないキリエ。悠李と違い、楽観視している。

「魔人になれば、あなたの人並み外れた身体能力が更に向上し、大

抵の攻撃では死ななくなります」

先日のあれが実証済みだ。身を持って体感もしている。

あの恐るべき再生能力。特筆すべきは、ビームを喰らい、「仰け反らなかった」ことだろう。

「しかし、あなたのことですから、過信はしないでしょう」

「ああ。力を信じすぎれば、その分力に呑まれるからね」

「それでいいのです。気持ちとしては」

悠李の手を摩りはじめた。悠李が恥ずかしそうにするのを見て、一夏達が笑う。

「私が、可愛い弟子に言えることは一つ。デビルトリガーを使いこなせ。これだけです」

どんな状況でも、どんな場所でも。

使いこなせれば、とてつもない力となるだろう。

「キリエさん……」

「それと……。これは、選別です」

腰元から、二丁のM1911A1が出て来た。水色と、黒の、改造された銃。

「ガバメント……？」

「千冬さん、よくモデルをご存知で。これは、『鏡花水月』。クラウスが使っていた銃です」

悠李が試しに一丁持ってみる。
とてつもなく軽い。羽のように、軽量だ。
「これ、キリエさんが使っていた奴じゃないか！？」
「私より、あなたの方が相応しいと思いましたので。それに、私は新しい１９１１を手に入れましたし」
ふふふ、と笑うキリエ。悠李は鏡花水月をくるくると回し、腰に差した。
続いて、ホルスターが渡される。最後に、美しい装飾の槍を渡された。
「これも？」
「私には、ボルヴェルクがあります。『マグナカルタ』――昔使っていた槍です。愛弟子の為と思えば、槍の一本なぞ、安いモノ。それに、元々貴方に渡すつもりでいましたから」
槍を握り締めた。キリエの想いが、親友達の気持ちが、身に染みて伝わって来る。
「キリエさん」
「何でしょう？」
「よく、税関に止められなかったね」
再び一夏達がずっこけた。しかし、今回だけ、キリエは平然と返した。
しかし、その内容も生々しいものであった。

「税関なんぞ、幾らでも騙せます」
「さらっと凄いことをおっしゃいましたわ！！」

セシリアの、スターライトＭｋＩＩの射速並のツッコミ。ここの所、彼女のツッコミのキレがいい。

悠李はベッドから立ち、コートを着直した。そして、腰にホルスターを付け、鏡花水月を装備してみせる。

「なかなか、サマになってるじゃない」
「そうか？」

鈴の感想。少し疑問系にしてみるが、自分でも気にいっているらしい。

「では、神威。学園に戻るか」
「そうします。色々心配かけてすいませんでした」

千冬に頭を下げる悠李。千冬は首を横に振り、悠李の頭をぽんっと叩いた。

「こちらこそ、色々と気負わせて済まなかった。今回ばかりは、こちらの責任だ」

そう言った時、椅子から離れたキリエが、千冬に近付き、眼を優しく見た。終始笑顔のキリエに、千冬が吊られてしまう。

「千冬さん。この子を、よろしく」
「こちらこそ、悠李君によろしく言いたいところです」
「ふふっ、そうですか。手塩かけて、鍛えた甲斐がありました。で

は、またいつの日か」

ゆっくりと去るキリエ。物腰は柔らかに、悠季よりも掴み所のなさそうな女性だ。

「ところで、千冬さん？」

「なんだ」

「僕、幾らくらい寝てたの？」

疑問に思ったコト。千冬は真顔に戻り、教えてやった。

「2日だ」

「4

◆◇◆◇◆◇

「くぅ～っ！！久しぶりの自室だぁ～！！」

寮に戻り、背伸びをしながら自室に入る悠李。鈴の荷物はもうない。どうやら、部屋を移動したようである。

箒と一夏も別々の部屋になったようだ。一夏が部屋を離れるだけだったが。

「やっぱ、一人は気楽でいいなぁ」

ゴロリとベッドに寝転ぶ悠李。その時、ちょうど箒が部屋に入ってきた。

「悠李。少しいいか？」

「いいよー」

寝転がりながら、返事をする悠李。それを見て、少し笑う箒がいた。

彼女はベッドの近くまで歩み寄り、悠李の目の前に立つ。

「どうした――わっぷ」

いきなり抱き締められた。彼女は、そんなことをするキャラじゃないと、悠李は思っていたのだが。

「心配した……。でも、よかった……」

「オイオイ、そこまでヤワじゃないんだぜ、僕は」
「判っている。でも……」

　箒の頭を撫でながら宥める。どうやら、泣いているらしい。
いつから女泣かせになってしまったのだろう。悠李はそんなことを考えていた。

「一夏に見られたら、どうすんの」
「どうもしない。お前は、大切な親友だから。いや、もしかしたら、それ以上かもしれない」
「それ以上……。ふふっ」

　少し笑みながら、箒を抱き返した。頭を撫で続け、まるで妹の様に扱いながら。

「あまり僕をからかうなよ。君は、一夏がいるだろ」
「私の中で、一夏とお前の存在があるから、凄く困っているのだ。一夏は大切な幼なじみで、長く時を共にして来た。お前は大切な親友であり、何度も救われた」
「惚れっぽいんじゃなく？」
「そうかもしれん」

　箒を優しく離す。彼女がそれを感じ、悠李を離すと、彼がゆっくりと立ち上がった。

「でも、決めるのはまだ時期早々。悩んで、悩んで。それでも、僕がいいと言うのなら」

　悠李がドアに近付いた。そして、満面の笑みで答えた。

「『Ｂｌａｃｋ　Ｃｈｅｒｒｙ』に来な。僕はいつでも、便利屋にいる」

便利屋の連絡先と、住所のデータが入ったマイクロＳＤを投げ渡した。そのまま悠李は外に出て、横を見る。

「やーい、女泣かせー」

「うるっさい。セシリアと一夏まで、しかも千冬さんまで。この野次馬どもめ」

鈴達が盗み聞きしていた。ニヤニヤと悠李を見ながら、イジくり始めた。

「悠李さん……。貴方、女性に興味が無いんですの？」

「どーしてそーなる」

「はっ！！もしや、あんたも一夏を！？渡さないわよ、一夏は！！」

「いえ、一夏さんは私が……」

「あー……。ちょっといいか」

一夏が口を開き、皆がそちらを見る。

その口から発せられたのは、まさに一夏らしい、と思わせるものであった。

「俺がどうした？」

皆がひっくり返った。鈴に至っては、地面に亀裂まで入れている。

「こ、この鈍感……」

「へ？」
「お前……。流石だわ……」
悠李のツッコミ。腹を抱えて笑いながら。
「まあ……。なんだ。取り敢えず、一見落着……なのかな？」
「そうだな……。後は、お前がデビルトリガーを使いこなすまでか」
悪魔の力。人を助けるべき力。自覚して力を振るう。
「どうかしたか？」
ちょっとしてから、箒が６６６から出て来る。顔なじみの面子がいたが、特に何も気にしなかった。
「なんでもないよ」
悠李の一言。そうか、といつもの済まし顔で、戻っていくかと思ったが。
「退院祝いに、パーティでもやるか」
箒から言うのも珍しい。悠李は笑顔で言った。
「いいね。今日は、僕が奢ったる」
気前のいい悠李。皆が笑いながら、食堂に向かった。
――その翌日、皆が酒で酔い潰れたのは、秘密である。

Mission 8 共鳴

◆◇◆◇◆◇

旅客機内。眠りこけた少女に、黒コートの、少し長い髪をした男が声をかける。

この男が創龍。悠李の父親だ。

「……ロット！」

「シャルロット！！着いたぞ」

フランスから、日本の成田空港へと飛んだのだ。

創龍にとっては第二の故郷。そして、シャルロットと呼ばれた、ブロンドの少女は、初の日本。

「ん……。おじさん、ここどこ？」

「成田だ。もう着いたって言ってンだろ」

シャルロットの頭をぽんぽんと叩き、眼を覚まさせる。既に乗客の半分が降りていた。

「ここから電車だぞ。魔の成田線だ」

「いやいや、スカイアクセスで羽田まで行くんじゃないの？」

「成田線は心が洗われるぞ」

成田線と言っても、我孫子支線の方だ。成田を出ると、単線が続き、田畑や林などの緑と眼を合わせることになる。

「じゃあ、成田線がいい」
「決まりだ」
創龍がシャルロットの手を引き、出口へと向かう。
「お嬢ちゃんも、ＩＳ学園の生徒さんかい？」
銀髪の、右眼に眼帯をした少女に声をかけた。少女はドイツ語で、創龍に返した。
「Ｓｉｅ，　ａｂｅｒ　ｗｅｒ？（貴様、何者だ？）」
創龍があくびをしながら答えた。
「Ｉｓｔ　ｅｉｎ　Ｈａｎｄｗｅｒｋｅｒ？（便利屋だが？）」
彼は多数の言語を話せる。英語に、イタリア語、フランス、ドイツ語、スペイン語等。勿論、日本語は第二の母国語だ。
「Ｉｃｈ　ｔｕｎ？Ｓｃｈｕｌｅ　ｉｎ　ｄｅｎ　ＩＳ，　ｉｃｈ　ｇｅｈｅｎ？（どうだい？一緒にＩＳ学園、行かねェか？）」
「．．．　Ｚｏｇｅｒｎ．　Ｎｅｈｍｅｎ　Ｓｉｅ　ｅｉｎｅ　Ｆａｈｒｔ　ｖｏｎ　Ｎａｒｉｔａ　Ｓｋｙ　ｚｕｇｒｅｉｆｅｎ．（遠慮しておく。スカイアクセスで行くからな）」
「Ｈａｕｐｔｖｅｒｓａｍｍｌｕｎｇ．　Ｊａ，　ｄａｓ　ｗａｒ　ｕｎｈｏｆｌｉｃｈ．（そうかい。そりゃ失礼した）」
機内で飛び交うドイツ語。不思議な風景。シャルロットが首を傾げた。

「行くぜシャルロット。時間がねェ」
「え？」
「成田線は1時間に大体2本しかない。ローカル線だ」
「それはマズいね……。って、普通にスカイアクセス乗ればいいのに」
「時間に一々身体を縛られてちゃ、楽しいモンも楽しめねェさ」
大の大人が言っていい言葉なのだろうか。シャルロットが不思議に思った。

「悠李、元気かな？」
「あいつァ、元気が取り柄だからな」
なんの根拠も無いことを言った。二度目のあくびをしながら、創龍がまた口を開く。

「第二ターミナルから電車出てるから、さっさと乗っちまうぜ」
彼がＩＣカードを手渡した。これで切符を買う手間が省ける。
少し強引に手を引かれ、駅に行くシャルロット。少女はそれを見、なにか勘違いしたのか、創龍に蹴りを食らわせようとした。
後ろからの不意打ち。しかし創龍はそれを視認せず、脚を掴んで、逆さまにぶら下げた。

「っ！！そいつと私を離せ！！」
「おい、日本語が話せンなら最初からそう言えよ」
シャルロットと少女を離す。シャルロットはキョトンと少女を見

た。

「勘違いしてない？」

「？」

少女の頭に浮かぶ、多数のクエスチョンマーク。シャルロットは説明する。

「この人、ボクの護衛だよ？それに、幼なじみの父親だから、安心出来るし」

「……。すまなかった」

単純な勘違い。創龍は少しだけショックを受けた。

――俺、そんなに悪人顔してるか？　深々と頭を下げる少女。創龍は彼女の頭の下に手を添え、軽く掴んで立たせた。

一寸ともブレない腕。恐るべき腕力だ。

「お嬢ちゃんも早くした方がいいぜ？時間は限られてるからな」

「ああ……」

少女は足早に機内から降りる。創龍達も降り、ダッシュで駅に向かった。

2

◆◇◆◇◆◇

そのまま上野に出た創龍達は、少しだけアメ横で寄り道していた。

「ここが上野？」

「そうだぜ。ほれ、甘栗」

近くの出店で買ってきた甘栗をシャルロットに渡す。ほかほかと温かい。

対する創龍は、肉まんを二、三個ほど食べている。

「おじさん、食べるね」

「日本に来たら、まず食うことだろ。焼きそば、タコ焼き、焼き鳥、お好み焼き。日本酒とか焼酎もいいな」

ダメ人間の発言だ。シャルロットが呆れて笑った。

「箸も買ってやったぞ。お前は箸は上手く使えないだろ？」

「うん。悠李に教えてもらうからいいけど」

「ホント、悠李好きだな。親としては嬉しいが」

肉まんの二個目を口に放り込みながら言った。シャルロットが頬を染める。

単なる恋愛感情だろうか、それとも。

「ま、女だってバレない程度にイチャつけや」
「お、おじさん！！」
「実際、お前がしたいコトだろ」
軽く笑いながらからかう。顔を真っ赤にしたシャルロットが創龍を睨むが、怖くもなんともない。
「それで睨んでるのか？」
「む……」
「全然怖くねェよ」
三個目を一口でいった創龍。十秒位してそれを飲み込み、立ち上がる。
「お、そうだ」
しかし、何かを思い出したようで、創龍はシャルロットに袋を手渡す。
「制服着とけ。あと、アミュアミュレットは悠季に渡してくれや」
「うん」
元気な返事。甘栗の袋を丸め、近くの更衣室で着替え、また電車の旅を再開した。
◆◇◆◇◆◇
場所は変わり、ＩＳ学園寮・６６６号室。

「何か来た？」

いつものトレーニングを終えシャワーを浴びた後、身に覚えのある感覚を感じ取った悠李。だが、危険とは全く掛け離れた感覚である。

制服を着、ドアを開け、朝食を取りに食堂へと向かう。ちょうど隣から箒も出て来た。

「おはよう」

挨拶を交わし、二人揃って食堂へと向かう。途中で一夏とも合流し、感覚の話をした。

「なんか、身に覚えのある感覚なんだよね」

「シックスセンス的な奴か？」

「いや。この感覚……。あ、親父か」

思い出した。道理で創龍の魔力が感じ取れる訳だ。

更に、創龍が来た理由も思い出す。仕事で日本に来るとか言っていた。しかも、ＩＳ学園に。

「お前の父親は、どんな人なんだ？」

「むっちゃくちゃガタイが良くて、性格が破天荒。しかも、クッソ強い」

「なんか面白そうな親父さんだな」

笑いながら一夏が言う。それを聞いた悠李が、とんでもない、と言った。

「アイツの所為で苦労することが多いんだよね。しかも、尻拭いは大抵僕がしなきゃいけないし」
「いいじゃないか。親がいるだけで」
一夏の言葉が気になった。彼には、親がいないのだろうか？
「俺、気付いた時から、千冬姉しかいなかったからさ」
「お前の方が苦労してるじゃないか」
「つか、色々俺ら苦労してるよな」
満場一致。三人しかいないが。
目的地の食堂で席を取り、いつもの様に食券を取る。一夏が座ると同時、どこからともなく鈴とセシリアが吸い寄せられるように現れた。
「おはよう一夏！」
「おはようございます一夏さん！」
「お、おはよう……」
朝から元気な奴らだ、と朝から１００ｋｍを軽く走っている悠李が言う。お前が言っても説得力がないと箒に突っ込まれた。
「なあ悠李……」
「バカ、他の奴がいる時はランチアだっての」
「あ、悪い。忘れてた」　未だ全体的に悠李の名前はバレてはいない。対抗戦の時は、『あれは別人だ』で何とかごまかせた。
「ランチア、回避技ってまだあるのか？」
「テーブルホッパーってのと、後は完成型のミラージュだね。てか

一夏、ミラージュとウェポンマジック勘違いしてるでしょ」
「ウェポンマジック？」
「武器使って反らすヤツ」
かなり重宝する回避技だ。使い方によっては、相手に返すことも出来る。
「あの、空中ジャンプは？」
「エアハイクは魔力扱いになっちゃう。魔力無いからね、君達には」
「なるほど」
色々と思い出そうとする悠李。そこに、トリックスタースタイルの一つが使えるのを思い出した。
悠李と創龍は、『スタイル』と呼んでいる、戦闘の型の様な物がある。
変幻自在に動き回る『トリックスター』。
華麗な近接のコンビネーション『ソードマスター』。
蝿さえも寄せつけない『ガンスリンガー』。
鉄壁の防御術『ロイヤルガード』。
魔剣士の魂の技を扱う『ダークスレイヤー』。
大きく分けて五つ。また、時の流れを緩やかにしたり、分身を作り出したりするスタイルもある。

「フリッパーっていう技なんだけどね」
「ピンボールとかについてるあれか？」
「そう。回避技じゃないんだけど、空中で受け身を取る」

吹っ飛ばされた時には有利であるが、果して吹っ飛ぶことがあるだろうか。
体勢をすぐに立て直すということは、次に決めている行動も頭に入っているということでもある。ように思わせることも可能だ。

「御望みとあらば、体術とかもやりますが、どうしますかィ、一夏の旦那？」
「いやいやァ、ランチアのオヤビン、無理言いなさんな。アンタの体術は人間離れしてそうで覚えられそうにないでさァ」

そして変な話し方の掛け合い。クスクスと周りが笑う。
それを狙っていた悠李と一夏が、『計画通り！！』と言わんばかりにニヤリと口角を吊り上げた。
口調をまた変える二人。息の合ったコンビネーションで、笑いの渦を広げていく。

「いーちかさーァン？剣のほーウは、どーうしますカー？」
「おーウ、ランチアサーン。スティンガーだけで十分ネー」
「他にも！！ハイタイム、ヘルムブレイカー、プロップなどをおまけで付けてこの価格！！」
「あらま奥さん！これは安いわねー。タダですってよ！？これは覚えるしか無いわ！！」
「お電話でのご注文、お待ちしておりまーす！！」
「フリーぃダイヤル０１２０、よんよん、いちの……」
「やめんか馬鹿者」

片言外国人から、ジャパネットの高田社長とその奥さんまで再現した。ちなみに奥さんは鈴が真似した。

次第にノっていく内、食堂の笑いが止まらず、最終的に笑いを堪えた千冬によって強制終了させられた。

「おはようございます社長」
「誰が社長か。全く。それよりストラトス」
「はい？」
「転入生が来る。仕事だ」

はいよ、悠李はと手を付けていなかった朝食のパンケーキにかぶりつきながら言う。

「教室まで案内してやれ。それとな……」
「ふぁい？」

口に頬張りながら、悠李が気の抜けた声を言った。
牛乳で流し込み、千冬に向き直る。

「お前の親父さんが学園内に来るそうだ」
「それは知ってますよ。親父から連絡がありました。粗方、護衛の依頼でもされたんでしょ」
「まあな。わかっているじゃないか。取り敢えずそういうことだ。お前は今日遅れても構わん」
「俺は？」

クラス代表の一夏が問う。代表なのだから、当然何かあると思ったようだった。

「ない。ネタでも考えてろ。絶対にお前は遅刻するなよ」
「あいあいさー」
「……ストラトス。あまりこいつを改造するんじゃない」

敬礼しながら自分に返す一夏を見て、千冬はランチアを睨みながら言った。すまんね、と、一枚の皿を土台として作られたパンケーキ・タワーを、ゆっくりと崩しながら、ランチアは言った。

3

◆◇◆◇◆◇

「ふ……はぁ……」

あくびをして、校門前で待つ悠李。父親の創龍はまだ来ない。千冬からの情報によれば、転入生が二人来るらしい。その内一人がシャルル・デュノア、もう一人がラウラ・ボーデヴィッヒ。

「ボーデヴィッヒって、ドイツっぽいなぁ。……やっぱり。しかもドイツの代表候補生」

手渡された資料を見ながら呟く。顔写真を見ると、眼帯をした少女。

「ビッグボスか、この子」

ある私設武力組織のトップの名前を口に出した。顔も何もかも違うが、眼帯だけは同じ所だ。

続いて、シャルル・デュノアの資料を見ようとしたその時。

大排気量バイクのエキゾースト音が高鳴る。そして、そのバイクがジャンプし、悠李の目の前に着地した。

資料が吹き飛ぶが、動じずにバイクを見る。二人乗りで来た創龍と、もう一人。

フルフェイスヘルメットを被っているので、顔が解らない。

「よう、悠李」
「普通に来い、バカ親父。それより、そのバイク、どうしたの？」
「何年か昔、ダチの家に停めてたンだよ。それで、カギ挿して、こいつ乗せてきた。なあ、シャルル？」
「ああ、シャルルさん？よろし……」
「随分余所余所しいね。久しぶりの再会なのに」

ヘルメットを取り、髪を直した。
悠李がその顔を見て驚いた。本当に何年ぶりだろうか。

「しゃ、シャルロット！？」
「久しぶり、悠李！！」

思い切り悠李に抱き着くシャルロット。しかも、男装で。

「ひ、久しぶり……、シャルロ――」
「シャルル、だよ？ランチアくん」
「え、なんで男装？」
「そいつァ、色々あるから、聞くな」

シャルロットは離れない。創龍がハッ、と笑った。

「おい。もう一人来たぞ。ドイツの嬢ちゃんが」

ラウラ・ボーデヴィッヒと思われる人物が来た。そして、抱き着かれている所を見られた。

「ラウラ・ボーデヴィッヒさん？」
「ああ。貴様が、案内人のランチア・ストラトスか？」

「うん。ようこそ、ＩＳ学園へ」
「貴様、公衆の面前で、しかも男と抱き合いおって、恥と思わんのか」

シャルロットがそれに気付き、すぐに離れた。悠李がシャルロットの頭をぽんと叩き、ラウラによろしくと言った。

「お疲れ様です、護衛どの」
「ン？ああ、何もしてねェが」
「親父、この子に何かした？」

悠李が創龍に問い詰める。いんや、と彼は返した。

「この方はな、成田で私の過ちを優しく許して下さった方なのだぞ。しかも、私の蹴りを見向きもせずに止められた」

創龍のコトを、眼をキラキラと輝かせながら説明し始めた。ヒーローか何か、勘違いしているのではないだろうか。

はぁ、と溜息をついて、創龍をジト目で見た。

「このロリコン」
「どこがだ。俺は何もしてねェだろ」
「音姫さんに言い付けてやる」
「めんどくせェからやめろ」

エキゾーストから聞こえるノイズが、更に大きくなる。ラウラはそのバイクにも眼を輝かせ、創龍に聞いた。

「このバイクは日本製でしょうか！？」

「お？お嬢ちゃん、バイク興味あるのか？いいねいいね。こいつは、スズキのハヤブサだ。ＧＳＸ１３００Ｒっていうモデルだ」

ドゥン、とアクセルレバーを回し、吹かす。悠李は呆れ、シャルロット達を連れていく。

「父さん、悪いけど、これから授業なんだ」
「そうか。じゃ、俺は職員室らへんでダベってるから、なんかあったら呼んでくれや」
「か・え・れ！！」

◆◇◆◇◆◇

「シャルル・デュノアです」

教室に着き、自己紹介が始まった。シャルルの紹介が始まった後、クラスの女子の黄色い声が上がる。

「３人目の男子よっ！！」
「ブロンドの貴公子だわ！！」

チッ、と悠李が舌打ちをした。僕の時はそんなの言ってくれなかったじゃないか、と少しいじけた。

「ボーデヴィッヒ。次だぞ」
「了解しました、教官」

千冬の声にラウラが返す。教官と言われた千冬が、はぁ、と息を

吐いた。

「ここはドイツの軍でも無い。そして、私はもう教官でもない。先生と呼べ」

「了解しました」

いつまでも固い雰囲気。悠李は肩肘を付き、ラウラを見る。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

名前だけか。あまりのシンプルさに、教室の空気が冷め、久しぶりの山田真耶先生がオドオドし始めた。

「それだけ？」

「ああ」

「では、席は二人ともストラトスの隣でいいな」

「構いません」

「むしろ心から喜んで」

シャルルに一人コケる悠李。千冬が少し戸惑った。

そして、席に来る途中、ラウラが一夏の目の前まで移動する。

ぼーっとした眼でラウラを見る一夏。何かあるのか、と彼は思っていた矢先。

平手打ち。彼の右頬に、思い切り、だ。

頬に綺麗な椛の後。電光石火のビンタが炸裂した時、悠李は思わず笑ってしまった。

「な、何すんだ！！」
「貴様があの人の弟であるものか。私は認めん」
「あー、さいですか。そういうことですか」

この手の挑発や文句はセシリアの時でもう慣れた一夏。軽く流して相手にしないようにした。

ラウラの行動に面白がり、悠李はどこから取り出したか解らないピコピコハンマーをラウラに投げ渡す。
視認したラウラがそれをキャッチし、一夏の頭をぽこっと叩いた。

「いでっ」
「ふん」

済ました顔で自席に移動する。そして、悠李にも、今度はハイキックを入れる。

椅子に座った状態で、顔を逸らし、蹴りを鼻先スレスレで避けた。
カウンターに、膝裏に指先で突きを入れる。

大した攻撃ではないが、それでもラウラの膝裏には指先大の痣が出来た。

軽くラウラが笑うと、大人しく席に座り、キリッと顔を引き締め、悠李にサムズアップをした。

「仲良くやろう、息子どの」
「なんだアンタ」

悠李のツッコミ。どうやら、この子は所謂『厨二病患者』らしい。軍人だから、創龍の強さに憧れたのかもあるかもしれないが、それ以外にも何かおかしい。

ハァ、と溜息を付く。しかし、呆れさせる間も与えず、千冬が声をかけた。

「これにてＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて、第二グラウンドへ集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

解散指令。悠李は椅子から立ち上がり、シャルルを見た。

「ランチア？どうしたの？」

「いや……。お前、これから女子に追い掛けられるから、気をつけないとな、って」

「なら、早く行こう」

ランチアとシャルル。二人でアリーナの更衣室へと向かおうとした時。

「ちょっと待て、ランチア。俺を置いてくな」

「ああ、悪いね。大丈夫？」

「つか、お前のピコハンが余計だったわ」

一夏がランチアの肩に顔を乗せながら睨んでくる。ランチアが笑顔を絶やさずに、一夏の頭をぽんぽんと叩いた。

「あー、そこが痛い」

「どんだけ力入れたんだ、ボーデさんは」

「ははは、多分５００ｋｇはあるんじゃね？

おっと、悪いなデュノア。俺は織斑一夏。コイツの親友だ。一夏で

いいぞ」

ランチアの首を腕で締めながら、シャルルに自己紹介。しかしランチアは顎でツボを突き、痛覚を刺激した。

「よろしく。じゃ、ボクもシャルルでいいよ。ね、ランチア？」

「なんで僕に振った？」

「何となく」

幼なじみのダル絡みのようだが、ランチアは嫌な顔を一つもしなかった。

廊下に出れば、ランチアの言った通り、大勢の女子に絡まれた。ランチアは二人を抱き抱え、階段を全部飛び越えて、アリーナへと向かった。

4

◆◇◆◇◆◇

更衣室。今回はＩＳスーツに着替えるための場。

悠李達三人は着いてからもしばらく話していた。

「お前はＩＳスーツなんて適当でいいだろ？ってか、ハイネックのヤツ着ときゃいいじゃん」

「それで誤魔化せるかな？」

「しょうがねえよ、ねえモンはねえんだから」

悠李が制服を脱ぐ。下からはハイネックインナーとカーゴパンツが出て来た。

黒と紫のコートをまた着て、シャルルを見る。ずっと眼を反らしていたらしい。

「……ん？シャルル？なんで眼を反らしてんだ？」

シャルルの行為を不思議に思った一夏が聞いた。悠李はシャルルに苦笑いをしながら言った。

「そういうの、この子はあまり慣れてないんだよ」

「ああ、なるほど。育ちがいい、ってやつか。ならしゃあない。俺はあっちで着替えるわ」

悠李の助言で、シャルルが助かった。一夏がロッカーの列を一個

挟み、ＩＳスーツに着替え始めた。

「シャルル？大丈夫？」

「ごめん、耐性ないみたい……」

「タダのカーゴパンツで、ねぇ……？」

ははは、と笑いながらシャルルに言った。

また恥ずかしそうに悠李を見る。悠李は頭を優しく叩きながら、シャルルを見た。

「シャルル、スーツ着込んでるなら、早く脱いじゃいなよ」

「な、なんで解るの！？」

「首元」

スーツは首の少し下まで覆っている。なるほど、道理でわかったわけだ。シャルルは納得し、制服を脱いだ。

「……それは、バレるな」

「え、ええっ！？」

「胸。ほんの少し、形が……」

創龍に教わったサラシで押さえ付けているはずだが、それでもラインは怪しい。

悠李がコートから薄い板を出し、シャルロットに渡した。

シャルロットがそれを応用し、胸に詰めた。

「これでごまかせない？」

胸筋の様な形。大丈夫だと悠李は判断する。

「ランチア、もう大丈夫か？
シャルル、お前胸筋すげえな……」

一夏がスーツの姿でこちらを見てくる。
悠李は二人を見て、こんなにピチピチなスーツは着たくないと思った。モロに身体が締め付けられていそうで、動きにくそうだ。

「じゃあ、行くぞ」
「うん。シャルル、行こ」

シャルルの手を引く悠李。その途端、シャルルの顔が赤くなった。

「シャルル、ここだと勘違いされるからやめろよ」
「あ、うん……」
「こういう同人誌が非公認で描かれてたりして」
「ランチアが言うと冗談じゃ無いように思えるな」

少し背筋をゾッとさせた一夏がランチアに言った。
この学園には、ＢＬカップリングを考える女子がいる。腐女子と言われる奴である。

その彼女達の脳内で、自分達がどんな風になっているのか、考えてみようとも思わなくなるほどだ。

「やっべ、時間ねぇよ！一夏、シャルル！！急ぐぞ！！」

ロレックスをチラっと見たときに気付いた。一限に遅刻してしまう。

ランチアが一気に走り出す。その後ろに二人が続いた。

◆◇◆◇◆◇

「ギリギリ、２０秒前だ」

千冬の出席簿を避けられた三人。セーフ、と一斉に言った。

「ストラトス。スーツは？」

「織斑先生……。そんなことも聞いていないし、持ってもいないです」

「……あ。それはすまなかった」

スーツの話をした時、ランチアはいなかったのだ。それはしょうがないだろう。

「仕方ない。男子用のも無いしな。ま、お前のＩＳは特殊だから、スーツも要らんだろう。好きな格好でいいぞ」

「ありがとうミリィ！！」

「誰が足付きのオペレーターか」

ランチアの頭に、精度が上がった出席簿アタックが当たる。しかし、今日は指二本で避けられた。

「危ない危ない」

ニヤリと笑って出席簿を離す。その時に、後ろから何か叩かれた衝撃が走った。

「そうそう、危ないよな」

ガスマスクを被り、コートの上にフードを被った男。一発で悠李に創龍と見抜かれてしまったが、気にしない。

「あー、今日だけ特別に手伝いをして頂く、霞（がす）　麻宿（ますく）先生だ」

「よろしくな、ガキんちょども」

そのまんまかよ、と悠李が突っ込んだ。しかも、創龍はボコーダーを使って声を変声しながら話している。

「霞先生、山田先生は？」

「真耶やんは……。ちょうど、シャルルの上だ」

言うのが遅い。シャルルの上に山田先生が落ちてきた。

ＩＳ装備のまま、シャルルに落ちたが、幸い二人とも怪我はなかった。山田先生の方には、メンタルで少し傷が付いたが。

「んむっ！？」

山田先生の胸に顔が埋まり、窒息しかけるシャルル。それを知らせようと背中を叩こうとしたが、先生の胸を掴んでしまう。

彼女が悲鳴を上げたとき、やれやれとランチアが先生を立たせた。

「あ、ありがとう、ストラトスくん」

ＩＳ自体重いのに、軽々と片手で持ち上げるのはどうかしている、と周りは思った。

「山田先生と模擬戦闘してもらおう。相手は……、オルコット、鳳！」

「なんで私が……」
「そうよ、それに、なんでこいつなんかと」
ニヤリとガスマスクの下で創龍が笑った。そのまま二人に近付き、耳打ちする。
「いいのか？お前らが勝ったら、あの坊主にいいとこ見せられるぜ。やったら、無条件で俺から坊主の生写真もやるよ」
ボコーダーで話しているため、違和感はあるが、それでも一夏を指す言葉があれば、彼女達を燃えさせるエネルギーになる。
思惑通り、鈴とセシリアの瞳が、身体が、魂が燃え上がった。
「ケケッ、扱いやすい嬢ちゃんたちだ」
「お前、後で音姫さんに言い付けてやるからな、バカ親父」
ガスマスクの吸気口に爪楊枝を突っ込みながら悠李が言った。創龍は、ふんっ、と息を吐き、それを排出する。
「オリムー、こいつどうにかしていいかい？」
「やってみろ馬鹿野郎」
「はあ……」
――戦闘中だというのに、この馬鹿親子は。
千冬が頭を抱え、溜息を付いた。一応、ガスマスクは創龍だと知っている。
ヒュコー、ヒュコー、という呼吸の音。それすらもボコーダーで変えているため、生徒にはバカウケだ。

「ちょうどいい。デュノア、山田先生のＩＳの解説をしてみろ」
「はい。先生が搭乗なさっている『ラファール・リヴァイヴ』は、第二世代型と言われるもので、射撃特化したデュノア社製ＩＳです」
「よろしいデュノア君。俺が平常点１０点あげよう」
「霞先生、少し黙っててください」

余計な茶々を創龍が入れて来るのに対し、千冬は悠李と一緒に創龍に釘を刺した。
創龍は、ちぇっ、とつまらなさそうにいい、何故かその場で左手の人差し指一本で逆立ちし始めた。

「おおっ！！先生凄いっ！！」
「あらよっ、とな」

そのまま空中に飛び上がり、くるくると身を回転させて、着地した。

「そろそろ終わんじゃねェか？アイツらの動きは協調性も何もねェし」

空を見上げ、戦闘の様子を把握した。個々のＩＳが強力なだけに、上手く使わなければ、協力が台なしになってしまう。

山田先生は、ライフルで二人を一点に纏めるよう誘導しながら撃っている。案の定、その罠にハマっている鈴とセシリアだが、それに気付かない。

「そこまでいったら、後はチェックメイトだ」

創龍と悠李がハモった。思惑通り、一点に集中した時に、グレネードを投擲され、大被害を被った。
二人のシールドエネルギーがゼロになり、結果、一夏に格好悪い一面を見せるハメになった。

「山田先生は元代表候補生だ。これで私達教師の実力が解っただろう。これからは先生方を敬うように」

空から降りてきた山田先生がニコニコと笑顔で生徒を見た。今のので教師としての自信が付いたようだ。

「先生!!ランチアくんと山田先生の模擬戦は!?」
「いいですねー。やってみましょうか」

悠李が「はぁ?」と言うが、上機嫌の山田先生は快く了承した。

悠李に千冬と創龍が近付き、警告した。

「大人しく負けてくれ。勝つなら殺すなよ」
「ば、馬鹿かアンタら!!それは権力の濫用だぞ!?それに殺しゃしないっての!!」
「ストラトスくん、行きますよ~」

早々と空中に舞い上がる山田先生。嫌々ながら、ドレッドノートを発動し、悠李も空中に飛び上がった。

5

◆◇◆◇◆◇

「山田先生」
「はい」
「僕が負けろと言われたんですが……」

ちゃっかりマグナカルタを手に持っている悠李が言う。下で行われた職権濫用。全て話し、山田先生が苦笑いする。

槍をくるくると回しながら、先生を見て悠李が言った。

「まあ、でも手を抜く気はあまりないんで」
「そうこなくちゃ。私も全力で行きますよ」

少しの会話の後、二人は戦闘を開始した。悠李が走って先生に近付くが、先生は冷静にライフルを撃ちながら距離を取る。マグナカルタでレーザー弾を霧散させながら、突っ込んでいく。彼のリーチに入った時、スティンガーで突っ込んでいく。真耶は飛び上がってそれを避け、射撃を行うが、後ろ手で闇魔刀を取り出して、ウェポンマジックで反らされてしまった。

幻影剣を真耶に射出しながら、エアトリックで目の前に移動する。咄嗟の行動に冷静な判断が出来ない。

幻影剣でシールドエネルギーを削られると同時、マグナカルタで、光速の連続突き――ミリオンスタブを行う悠李。

「Ｂｒｅａｋ　ｄｏｗｎ！！（砕け散れ！！）」

その言葉通り、エネルギーは砕け散って無くなり、真耶の敗北が決まった。

「せ、セコい……」

「鈴うるさい、勝ったんだからいいだろ」

サシで勝ってしまった悠李。だが、真耶は「人外だからしょうがない」と割り切った。

「まあ……。これが学園長が直々に指導をした者の実力だ」

「なるほど、ゴマカシ方も天下一品だな、千冬」

小さな声で創龍が釘を刺した。ギロリと悠李と千冬が創龍を睨むが、マスクの下はヘラヘラしている。

「では、授業に入る。１組８人でグループを作ってもらう。端数は麻宿先生の所に行け。グループリーダーは専用機持ちの奴らでいいな？」

授業内容は何なのかをすっ飛ばした千冬に悠李がコケた。

「悠李と一緒になれないよ……」

「バカ、シャルル。その名で今は呼ぶンじゃねェ」

「あ……。すいません、麻宿先生」

「そこは間違えねェのかよ」

創龍が軽く突っ込む。シャルルは肩を落としながらランチアを見るが、ランチアは気付かない。

「……あのお嬢ちゃんに狙われてたりしてな」

勘の強い創龍のコトである。迷いなく箒を指して言った。先程のようにワザとシャルロットを燃やそうとしたが、彼女は逆にネガティブ思考になってしまった。

「ランチア、私が入っていいか？」

「ん、いいけど」

ＩＳスーツ姿の箒には、どこか違和感がある。

「デュノアくん、よろしくねー」

「ガス先生、お願いします」

次第にそれぞれに集まっていく生徒達。一人浮くガスマスク。とてもおかしな光景だ。

頭が痛くなりそうな場面に、必死に気を保ちながらも、授業内容の説明をする千冬。

今回は学園のラファールと、日本製の第二世代ＩＳ「打鉄」を使って、フィッティングの体験をするようだ。

有無を言わさず、創龍がラファールをセシリア・シャルル・ラウラへ、打鉄を一夏・鈴・悠李、そして自分の所へと持って来た。

恐るべし神威家。軽々とＩＳを運ぶ人間など、この家族以外に誰が居ようか。

「じゃあ、フィッティングしてみよっか。よじ登ってフィッティングしてね。いざという時は、僕があそこまで持っていくから」

「お姫様抱っこでな」

「うるせえ、茶々入れんな」

ボコーダーの声が止まない。悠李が苛立たしく思った。

続いて、創龍が欠伸をしながらＩＳの説明をする。

「ま、打鉄は固ェが動きが鈍間、ってのが特徴らしいな。簡単に言えばティ〇レンだ」

「先生、私はジ〇かと思いました」

「ありゃスラスターいっぱいあるし、隠し腕もあるから全然違ェよ」

――何の話をしているのだ。千冬が、思い切り出席簿で創龍を殴りたくなる衝動を抑えつつ、出席簿を握り締めた。

「最初、箒からでいいや。登れる？」

「時間もないんでな、お前に手伝ってもらう」

「はいよ」

「頼む――って、きゃぁっ！！」

皮肉にも、創龍が言ったようなお姫様抱っこで連れていく。恥ずかしいのか、驚いたのか知らないが、可愛らしい悲鳴を上げた。

「……箒。なぜ首に腕を回す？」

「こ、ここ、怖いからだ！！こんないきなり飛び上がられると、誰でも怖い！！」

一っ跳びでＩＳのコクピットへ。悠李はそこで箒を下ろし、様子を見た。

横の創龍は、ＩＳを押して横に倒し、乗りやすい状況を作った。

「さっさとしちまいな。後が支える」

◆◇◆◇◆◇

「っはあ……」

そして、事が終わり更衣室へ。先程の様に一夏はロッカーを挟み着替え、悠李とシャルロットは制服だけを着る。

「それにしても」

「ん？」

「まさか、悠李がＩＳを使えるなんて……ねえ？」

「解ってて言ってんだろ……」

「いや、しかも専用機なんて」

「……ああ、教えて無かったっけ」

悠李が悪魔狩りになったのは５年前だ。シャルロットと別れたのは８年位前になる。

「僕さ、父さんの後継者なんだよ」

「あ……。成る程。じゃあ、あれはおじさん直伝なんだ」

昔、彼らは悪魔に襲われ、創龍に何度も助けて貰った記憶がある。それを見ているシャルロットはもちろんそれが解った。

「ああ、そうだ。ランチア、シャルル」

「なぁに？」

「屋上で昼飯食わねえか？」

「ランチア、一夏？学食あるよね？」
「外で食うのも格別だぞ」
気分を変えるのもいい、と思う。二人とも同意し、屋上へ向かった。

先客というか、元々それが目当ての箒、セシリア、鈴、そして何故かガスマスク。
その隣にラウラが何故か居た。

「麻宿大佐！！ドイツのレーションです、どうぞ」
「うむ、苦しゅうないぞ」

先程の授業で誤作動を起こしたＩＳを、瞬時にプログラミングして直し、倒れてきた機体を蹴り一発で立て直した創龍。ラウラからドイツ製の軍用携帯食を受け取りながら、フランスのそれを渡した。

「大佐、これはフランス軍のでありますか？」
「うむ。美味だぞっぅえ！！」

悠季が父に跳び蹴りを食らわせる。しかし創龍は頭しか動かない。マスクがポロリと外れ、素顔が見れるかと思いきや、その下にはダー○・ベイ○ーのマスクが出て来た。

「宇宙帝国軍……！？」
「ちげえよ、こいつはただのアホだ。なに餌付けてんだバカ」
「るせェな。因みに本当に俺は大佐だからな」
「どこの？」
「ウチの」

ダース・ベイダーの顔面を引っぺがした。それで最後だったよう

で、ちゃんと素顔が出て来た。
悠李と瓜二つの顔。創龍の方が釣り眼気味だ。

「ゆ、悠李が、二人……」
「いや、これ親父」
「ええっ！！この方が、悠李さんのお父様ですの！？」「あー……。バレちまったか。創龍だ、よろしく」

軽く手を上げて自己紹介する創龍。悠李は顔をしかめた。
そして、本日二度目の「帰れ」。何も無いなら事務所で仕事してろ、と付け加えた。

「ああ、後補足。シャルルと悠李は幼馴染みだ。だから、悠李の事を聞きてェならシャルルに聞くといい。
……お嬢ちゃん、この前のあれだろ？つか、なんで色紙？」

いつの間にか、鈴が創龍の目の前でサインを要求している。この前言っていた、英雄が目の前にいるのだ。何か記念品を貰いたい気持ちは解る。

しかし、悠李は「こいつのサインは価値無いな」、とか思っていた。いい加減男のサインだ、もちろん、サインもグチャグチャになるだろう。

「サイン下さい！！」
「……あいよ」

一緒に渡されたサインペンで、スラスラとサインを書く。悠李の予想が外れた。
とても丁寧かつ、サイズなどが考えられたサイン。

創龍の意外な一面に、悠李が口を大きく開いた。

「何だよ、そんなに俺がおかしいか？」

「意外過ぎる……」

サインを貰って喜ぶ鈴を脇目に、創龍が悠李に言った。悠李の口が一向に塞がらないので、シャルロットが悪戯半分に、創龍に貰った甘栗を放り入れた。

「ん？アメ横の甘栗？」

「そう、おじさんに買ってもらったんだ」

「つーか悠李、日本詳しくね？」

「親父が日本人の血も流れてるからね。時々、御祖母様の実家に行ったりするんだよ。キリエさんとかは来ないけど」

「因みに、それはどこ？」

「千葉の印西」

「田舎だな」

甘栗を咀嚼しながら答える悠李。印西は、木下・小林方面は、昔ながらの田畑と商店街が広がる長閑な町だ。

「成田線で来たんだ」

「スカイアクセス使えばいいのに」

どうせまた創龍だろう。彼の思考は簡単に読み取れた。

「ねえ！サイン貰ったし、そろそろ食べ始めない？」

「そうですわね。お腹も空いてきたこと――悠李さん？織斑先生ですか？」

鈴の一声で始まる昼食と同時、悠李の携帯が鳴った。セシリアの言う通り、千冬からであった。

「はい」

＞＞休憩中済まない。何やら、また悪魔が出たそうだ＜＜

悪魔の存在。悠李と創龍は感知していたものの、弱々しいモノであったため放置していた。

しかし、興味津々の創龍が、悠李の携帯をひったくり、千冬と話し始める。

「俺が行ってやンよ。場所は？」

＞＞神威さんですか？場所は第三アリーナ付近です。感じていらっしゃるなら判るでしょうが＜＜

「じゃ、こっから行きゃいいよな」

創龍がフェンスを飛び越えて空を飛ぶ。端から見れば自殺行為。

しかし、彼らは猫のようにどんな高さからでも着地出来るし、また飛ぶことも出来る。

「凄いですわ！人間の常識を無視しています！！」

「息子どの、あれは凄いな」

「いや、僕でも出来るし」

セシリアとラウラが驚くものの、それ以外は「悠李の父親だから」で理解できている。シャルロットに至っては、昔からそれを見ているため、慣れている。

「あいつはほっといて、ご飯食べよっか」

「そうだな。俺も腹減ったし」

呑気な男二人。それにシャルロットが悠李にくっつく。

何かと怪しい光景だが、幼馴染みの兄貴分なのだから、おかしくもない。

「そうそう、一夏。これ！」

待ってました、というように鈴がタッパを開けた。この前の騒動に発展した品。

そう、酢豚である。

「おっ、酢豚だ！！」

「そう！！朝早起きして作ったんだからね、味わって食べなさい！！」

悠李から渡された割り箸で摘み、ぱくりと一口。甘さと酸味がバランスよく、そして肉も柔らかく、そして引き締まっている。

「美味い！！」

「やった！！」

「あれの数パーは僕のおかげ～」

早朝、市場に行かされ、アグー豚を買いに行った悠李である。そして少しだけ下準備もした。

「あの……。私も、実は作って来ていまして」

「セシリアも？」

「はい。一夏さんに、イギリスにも美味しいモノがあると知って欲しかったのです」

「あれって、結局は品数少ないし、作る人間にも困るんだよね」
「はい。わたくしも昔、酷いシェフの料理には泣きそうになりましたが、ゴートン・ラムゼイ氏のものは、とても気に入りましたわ」

バスケットを開けながらセシリアが言う。中身はサンドイッチ。またもやひょいと摘む一夏。
タマゴサンドなのだが、少しだけ蜂蜜を入れているらしい。甘味がいいアクセントになっている。

「う、うめぇ……。お見それしました」
「ふふふ、お気に召されたようでなによりです」

香りもよし。少しだけ、パセリの匂いがした。
悠李も、ハムチーズを一枚取って、半分に割ってシャルロットに渡した。同時に口に入れ、味わうと、何か親近感が湧く味であった。

「これ、音姫さんの味付けじゃないか」
「うん、音姫お姉さんのだ」
「あ……。実は、『Ｂｌａｃｋ　Ｃｈｅｒｒｙ』さんに教えていただきまして」
「音姫さん、ご苦労様です」
「成る程、でも美味い」

一夏の手は二枚目を取っていた。悠李が微笑ましく思い、笑う。

「な、なあ。少し作りすぎてしまって、食べ切れないんだが、食べるか？」
「箒も？それはありがたい」

食べ物には容赦無い執着心を見せる一夏。箒が少し笑いながら、

弁当――というか、重箱の蓋を開けた。

「おっ、唐揚げだ」

「ああ。頑張ったんだ。どうだ？」

悠李が箸で唐揚げをひょいと食べた。程よい醤油の風味と塩加減。うん、と言って箒に伝えた。

「美味しいよ」

「本当か！よかった……」

「頑張ったねえ」

一夏も同様の意見。そして、悠李に食べさせられたシャルロットも同様だ。

「シャルル、箸は使えないのか？」

「わたくしも、あまり上手に使えませんので、おかしくはないですが」

「うん、練習してるんだけどね」

「その点、悠李は綺麗に使えるよな」

今の日本人にも見ない、綺麗な箸の持ち方。この中で誰よりも綺麗に箸を使えているのではなかろうか。

「僕ん家、日本食多いよ？」

「うん、悠李の家は、お箸がデフォルトだったよね。でも僕はスプーンで食べてたような」

「音姫さんは無理強いしなかったからね」

どさくさに紛れて鈴の酢豚まで食べる悠李だが、鈴は気にしなか

った。

「うん、アグー豚美味い」
「これ、いいお肉よね」
「１００ｇ１０００円したよ」
「高いわねー。それほどこだわりある豚なのね」

豚肉の話になっている。鈴と悠李の和気藹々な空気。
プロの料理人の会話だ。

「せ、世界が違うな……」
「うん。……ん？何か来たよ？」

一夏との言葉の最中、シャルロットが気付いた。屋上に、ハヤブサで壁を走ってくる創龍がそこにいた。

「あーらよっと」

壁走りまでは見たことが無い。悠李とシャルロット以外が絶句した。

「お、お疲れ様であります、大佐どの」
「おう」

片手に金色の大型拳銃、そしてもう片手には三段に詰まれたピザーラの箱。

「父さん、ありがと」
「いいってことよ、俺の奢りだ」

ピザの箱を開ける。マルゲリータやエビマヨ、照り焼きなどがあった。更に創龍はコートから飲み物と箱入りのポテトを出した。

「ほらよ、緑茶でも、紅茶でも、好きなモンを取りな」

「じゃ、コーヒーお願いします」

遠慮無くドリンクを取る悠李達。創龍自身は大きなビール缶を出し、呑み始めた。

「昼間から、お酒ですか……」

「まあな。俺も、コイツも、酔わないモンでね。普通に水分補給になってる」

箒が創龍を変な目で見始めた。まあ、当たり前の反応だ、と悠李は思った。

「さっさと冷めない内に食っちまおうぜ」

「そうだね――父さん」

「どうした？」

ピザを開ける悠李が、創龍の後ろに、悪魔の残りがいたのに気付いたが、既に創龍は知っていたらしい。ビールの空き缶を思い切り叩き付け、貫通させた。

一撃で地に平伏す悪魔。創龍の実力が諸に出た。

またもや絶句。今度はシャルロットまでもだ。明らかに、強いというレベルを超えている。

「なんでもない」
「そうか」

何事も無かったかの様にする二人。

この親子は、とてつもなく恐ろしい。

「6

◆◇◆◇◆◇

午後の授業も終わり、一夏の日常のＩＳ訓練をするべくアリーナへ移動する悠李達。
今回、悠李も自らの『ＤＴ』を扱いこなす為の練習をする予定であった。

アリーナに入り、フィールドに足を踏み込むと――

「Ｗｅｌｃｏｍｅ，ｔｈｉｓ　ａｒｅｎａ．（ようこそアリーナへ）」

創龍が既にいた。

「キリエ達から話は聞いてるぜ。ＤＴの修業だろ？」
「ああ。一夏達の邪魔にならないようにね」

一夏は既に白式を展開していた。指導者の箒、セシリア、鈴が創龍との会話を聞く。

「その前に、アップしようぜ」

愛剣・ヴェルギリウスを手に、切っ先を悠李に向けた。悠李も闇魔刀を出し、創龍に真剣で斬りかかる。

突っ込みも、振りも、やはり目に追えぬスピードである。しかし、易々とヴェルギリウスで闇魔刀を弾き、悠李を蹴り飛ばす。

その間、わずか0，0002秒。悠李がフリッパーで受け身を取りながら、鏡花水月を乱射した。しかし、それをヴェルギリウスで弾き、悠李に弾丸を返す。
闇魔刀で真っ二つにしながら、スカイスターで創龍との距離を詰めるが、創龍の反応は悠李を既に超え、悠李の目の前まで移動し、ヴェルギリウスで一凪する。

「うわっ！？」
「まだまだ甘ェな、坊や」

流石の悠李でも避けられなかった。腹から血が出ている。

「す、すげえ……。あれが、魔剣士か……」

目の前の出来事がリアルだと再確認すると、背筋がゾッとする。
そうは言っても、既に鳥肌が立っている。恐怖心なのか、それとも。

「おい、アップでこれかァ？」

反応の速さ、攻撃の重さ。どれをとっても創龍が上だ。
悠李は闇魔刀と天上天下で二刀流に変えた。

「ソードっ！！」

流れに沿い、ソードマスターへとスタイルチェンジ。
そのままスティンガーで突っ込み、創龍に避けられるのを悟りながら、保険として後ろ回し蹴りを付けた。

それをもスレスレで躱し、片手で愛用のカスタム・デザートイー

グル――花鳥風月の金色、花鳥を、痙攣の様な速さで撃った。歯で弾丸を噛み取り、他を闇魔刀で弾く。

ビデオの倍速コマ送りの様な戦い。二人以外の時の流れが遅く感じるほどだ。

「Ｗｈｅｗ，ｃｏｏｌ！！（フー、クール！！）」

「呑気に言ってる暇があるのかっ！？」

後ろ手の闇魔刀で斬り払う。それもサイドロールで転がられ、避けられた。

「Ｒｏｃｋ－ｏｎ！！」

立ち上がりを狙っていたらしい。またもやスティンガーで創龍に襲い掛かる。

それは、正に電光石火。しかし、それをも無傷で受け止めてしまう創龍がいた。

少し腰溜めに構え、左手を突き出し、一瞬だけ魔力を張り、ジャストタイミングでガードしたのだ。

悠李の腕が弾かれ、仰け反った。

箒には、信じられなかった。悠李の剣が通用しないという、目の前の現実を、信じたくなかった。あれだけ自分を圧倒した剣が、父親に傷一つ付けられていない。

「ジャストブロック！？あれで！？」

「ハッ、これでお前は負けだ。俺に攻撃した瞬間で負け――」

不意打ちで蹴りを繰り出す悠李。それに反応し、深く踏み込みながら、ジャストでカウンターを決める創龍がいた。

腹辺りに、掌底を喰らい、アリーナの壁まで吹き飛ぶ悠李。叩き付けられ、壁までも壊してしまう。

倒れる瞬間、創龍がドロップキックで追い討ちした。酷い父親だ、ここまで容赦が無いとは。

「アップ終了だ。立ちな」
「嘘だろう!?悠李が負けた!?」
「箒、負けたわ!!」
「信じらんねえ……」

驚愕の光景である。一方的な創龍の勝利。悠李は地に手を着き、上半身を捻り、脚を回転させながら跳ね起きた。

「痛たた……」
「あれ喰らって立つなんてな。大したモンだぜ」

ははははっと創龍の笑い声が響いた。悠李が腹を摩りながら言う。

「やっぱり、敵わないな」
「動きはなかなか良いぜ?後はパワーくらいか」
「そう?」
「ああ。じゃ、ここから本題だ」

ニヤッと笑う創龍。少し不気味に感じながらも、悠李が言った。

「デビルトリガーってさ……。引き方が判らないんだけど」
「念じろ。勝手に引ける」

言われた通りにしてみた。悠李の上に雷が落ち、周りに魔力の衝撃波が生まれた。
対抗戦の時に見た、悠李の魔人の姿。創龍は初見だが、なかなか気に入ったようだ。

「親父そのまんまだ」
「へ？」

クラウスと同じ姿。創龍は見て笑った。

「適当に動いてみな」

試しにまず走ってみる。脚の回転が異常に速い。1時間もあれば日本を一周出来そうだ。

「速っ！？」
「適当に剣もやってみな」

振りが更に速い。パワーも乗り、天上天下無双剣自体には紫電が纏わり付いていた。

スティンガーもやってみる。魔力で創られた、螺旋状のドリルが、剣と共に突かれる。

思考を巡らせる内、闇魔刀との二刀流で、両剣に魔力を流す。腰溜めで魔力を溜め、剣がより一層光ると同時、X状に二刀を振った。

巨大なXの魔力の斬撃波。最大の賭け――マキシマムベットとでも名付けようか。

続いて、闇魔刀を逆手に持ち、高速で演武の様なことをしてみせる。隙が無く、連続で繋がる、終わりを締める技――ショウダウン。

「坊やと一緒か……。ククッ、面白ェ」

遠い血縁関係に、ネロという少年がいる。ネロも悪魔狩りで、悠李の今の二つと同じ技を使っているのだ。

ついでに、天上天下での剣の舞。袈裟斬り、斬り上げ、大車輪斬り――延々に続くダンス。

剣を魔力に一気に流しながら、地面に叩き付けながら、流し巨大な衝撃波として打ち出す「ドライブ」と言う技を三連発、そして、斬り上げ――ハイタイムで打ち上げた後、自らも飛び上がり、グレイブティガーという剣を急降下しながら突き刺す技を見せた。

地面に突き刺さった剣を中心とし、独楽のように回る悠李。ダンスマカブルから、クレイジーダンスという、とても華麗なコンボである。

「……使いこなせてんじゃねェか。来て損したぜ」

息子の成長を喜びながらも、少し軽口を叩いた創龍。悠李が首を後ろに軽く振り、戻ると意識すると、元の姿に一瞬で戻った。

「なんか、出来ちゃってる」

「ああ。流石、俺の息子だ」

今度は素直に褒めた。悠李に近付きながら、創龍は笑う。

「そうだな……。頑張った奴にゃ、御褒美をやらねェとな」

物がぶれるような音。それと同時、創龍が、巨大な銃器を持っていた。

「ほれ。使わねェし、やるよ」

ずしりと来る重さ。よく見てみれば、レールガンである。こんな物、どうやって扱えというのか、と周りが思った。

「ありがと、父さん」

しかし、当の本人はご機嫌である。連射は効かないかもしれないが、それよりも一発の威力を取れば、連射など出来無くともお釣りが来る。

「俺も使ったことはねェが、科学ってのはあんまり趣味でも無いんでね」

軽々と片手で持つ悠李。担ぎ、創龍を見た。

「本当、ありがとね。色々為になったよ」

「そうかい。そりゃよかった。じゃ、俺は帰る」

ガスマスクを着けて、アリーナから出ていく創龍。片手を上げ、合図などでもしながら。

その手と、悠李の腕とが光り始め、光線で繋いだ。切っても切れ

ぬ、親子の印。
やはり、悠李は息子だ。正真正銘の。

彼の芯も、剣も強くなったのも分かる。創龍は、破天荒だが、いい父親だ。

共鳴。気持ちが振動している。悠李自身、創龍の息子にあることに、誇りを持っていた事を再確認した。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　９　守護者と決意

◆◇◆◇◆◇

「ふぅ……」

悠李は先に自室に戻ろうとしていた。レールガンをちゃんと仕舞い、寮へと向かう。

腹の傷は塞がってはいるが、制服は斬れている。後で直すか、買わなければ。

この学園に来て、およそ2ヶ月経つ。いくら、金を使ったのだろうか？

毎日の食費、机の修理費、休みの日に出掛けた電車賃、その先で使った金。ざっと１０万は超えているだろう。

「次は、ディズニーかな？」

しかし、金はまだある。学園側からの依頼報酬一件の解決につき、何千万も貰っているのだ。しかも、千冬から、アタッシュケースでの手渡しで。

学園が隠蔽したい事があるのも分かる。しかし、一件でこんなに大金を積む客など、悠李は見たことが無かった。

「口座使えばよかったかな？」

そろそろアタッシュケースを見飽きた所だ。それに、一々心臓に

悪い。銀行か、郵便貯金の口座を作ってしまおうか。それとも、国際口座の方を使ってしまおうか。

そんなことを考えながら歩いている内に、６６６号室へと着いていた。今更であるが、６６６という数字は、キリスト教などで縁起が悪いとされており、敬遠されている。『アンチ・クライスト』とも見られてしまう。

悠李は宗教に興味など無いし、また無宗教である為、気にもしないが。

がちゃり。誰もいなかった筈の部屋に、ドアを開ける音が響いた。悠李の荷物が積み込まれる前から、この部屋は広くて豪華であった。それも、高級ホテルの一室の様に。

１ヶ月程前まで鈴が使っていたベットの横に、見知らぬバッグと、トランクなどが綺麗に置いてある。

――ラウラか、シャルロットと相部屋か。

「ま、いいか。別にそこまで困る訳じゃない」

そういえば、シャワーを浴びる音がしている。既に先に着ていたのか。

「あ、そういや、石鹸切れてたっけ」

余談だが、悠李は身体を洗うとき、牛乳石鹸という固形石鹸を使っている。肌触りがよく、匂いも良い。また、かなり汚れが落ちる。

「ボディソープの方がいいのかな？でも、あれ以外は嫌だし」

リーズナブルである石鹸。それに比べ、学園備え付けのは高いだけで、悠李にしっくりこない。
シャンプーもただ高いだけ。普通に市販のしっくりきた安い物を使っている悠李。安いから好きなのではない、好きな物が安いだけなのだ。

「ま、これ使ってもらおっか」

固形石鹸を取り出し、シャワールームのドアをノックした。
しかし、ちゃんと返答が返ってこない。

「ごめん、石鹸切れてたから、新しいの持ってきたんだけど……」
「悠李？」
「なんだ、シャルロットか」

声で解った。シャルロットとの相部屋だ。遠慮なくドアを開けるが、それがマズかった。

女性の裸。湯煙であまりよく見えないが、綺麗だ、ということは解った。

「ゆ、悠李！！」
「はい、石鹸」

箱をひょいと投げ渡し、ドアを閉めた。『全く興味ないよ』と言わんばかりに、自然にだ。
これがデリカシーのない奴か。箒にも言われたことを再確認し、反省した。

「まあ、やっちまったことはしゃあないよね」

しかし、すぐ開き直った。
収縮していたレールガンを出し、ベッドに置いてカチャカチャと弄り始めた。

自分の魔力を打ち出す様に改造・イメージし、ベランダのサッシを開けて、外に撃った。まばゆい光が空を駆け抜け、機械音が谺する。

「へえ……」

なるほど。大体使い勝手は解った。

片手でぐるぐると回しながら、レールガンを弄ぶ。

確かに重いが、命などと較べれば軽い。殺される前に殺る。それがモットーだ。

「……悠李？」

シャワーから出て、ジャージに着替えたシャルロットが、新しい”オモチャ”に気付きながら、悠李に近付いた。
レールガンだと判るが、人が生身で使うような兵器ではない。

「ああ、シャルロット」

魔力で収縮し、吸収した。そうだ、そういえば創龍もそんなことをやっていたな、と彼女は思い出した。

「シャルロット……。言い忘れてたけど、久しぶり。逢いたかった

よ」
「悠李……」
「大きくなったね、身体も」
「悠李には負けるよ……」

１８４ｃｍの長身は、シャルロットを覆い隠す程である。その差３０ｃｍ。顔二個は余裕である。

「そんでさ」
「なに？」
「なんで、偽名で来たの？親父は突っ込むな、って言ってたけどさ。知らないことを知らないままにしておきたくないから。まして、幼馴染みだから、余計に知らなきゃダメな気もするし」

幼馴染みだから。シャルロットの心に、その言葉が残る。
身内以外では、一番親密――いや、もう家族なのである。シャルロットも、悠李も、そういう認識でいた。
シャルロット自体は、悠李に『恋愛感情』を持っているのだが。

「……８年前、私のお母さんが、亡くなったとき、今の父親の部下が来たよね」
「ああ、僕がブッ飛ばされちゃった時だ」

引き取りに来た時、悪知恵を働かせ、創龍も、音姫も、キリエもいなかった時を狙ったのだ。

2

◆◇◆◇◆◇

時は、８年前に遡る。

わずか7歳のシャルロットと悠李。そして、創龍の知り合いの男――「バーテンダー」のランディと呼ばれている、ひ弱そうな男がいた。

シャルロットは母親を亡くした。それも、その一年前にだ。病死らしい。１９であった創龍は、シャルロットの為に、母親の遺体を、自らの父が眠る墓地に埋葬したのだ。

創龍も、キリエも、そして、創龍の友人である『朝倉音姫』もいない。友人というか、彼女が絶賛片想い中で、創龍に引っ付いてきただけなのだが。

三人とも『Ｂｌａｃｋ　Ｃｈｅｒｒｙ』のキッチンにおり、ランディが子供達の為に、自慢のノンアルコールカクテルを作っていたのだ。

「ほら、出来たぞ」

「わあ、ありがとおじさん!!シャルロット、飲もうよ」

「うん……」

悲しみは癒えない。時間が経てば忘れる、そんなことがあるわけがない。大切な母親を亡くした悲しみは、深い傷痕を心に付けた。

それでも、悠李は優しく接してくれる。母親から貰った、シャルロットのペンダントが揺れ、悠李の笑みに応えたように思えた。

「マセてるな」
「ませ？」
「大人びてる、ってことだ。お前、将来いい男になりそうだ。いや、もう充分いい男か？」
「ありがと」

からかわれているのかどうかは判らないが、取り敢えず礼だけ言う悠李。
「シャルロットは強いしな」
「強い？」
「心が強い」

「僕も、シャルロットは心が強いと思うよ」
「悠李、ありがとう……」
「僕だったら、立ち直れないよ。でもシャルロットは、僕とお話ししてくれるから」

悠李の言葉は、いつも自分を元気付けてくれた。少しずつ、元気をくれる。ランディは、やはり創龍の子だな、と思っていた。

「お〝お〝いランディ！！店開け……。おっ、創龍のガキとお嬢ちゃんか」
「おじちゃん、何の様？」
「いや、ランディに店にいろ、って言おうとしたんだが……。お前らもくるか？」
「お前がこいつらに何かしようとするって思ったからだ」
「なんもしねェよ、逆にお菓子でもくれてやる」

「だって！！シャルロット、行こっ！！」
「うんっ」

悠李がシャルロットの手を引いていく。教育上宜しくないかもしれないが、まあいいだろう、とランディは思った。

全ての入口の鍵を閉める。事務所のもあれば、普通の住宅の玄関もある。鍵っ子の二人だ、忘れてはいない。

◆◇◆◇◆◇

「そうかぁ……、お嬢ちゃんはお袋が死んじまったのかぁ……っく、いけねぇ、涙が……」

ランディのバーでは、シャルロットの話を聞いた浮浪者達が涙を流しながらシャルロットを慰めた。
「ランディ……！！この子たちに、コーラを……！！今日は奢ってやる……」
「おい」

こんなしんみりした客は初めてだ。いつも荒れ狂っていて、困っているのだが、静かで落ち着いた雰囲気は、なんだか違和感があって逆に嫌だ。

「おじちゃん、どっか悪いの？」
「いや……。それよりも、創龍のセガレ、お前が、お嬢ちゃんを守ってー―」
「ここか」

乱暴にバーのドアを開ける。皆が一斉にそちらを向いた。

黒スーツの女性が何人かいた。胸元には、デュノア社の社員証か何かがあった。

悠李は嫌な予感がした。女達はシャルロットに向けて、気を放っているからだ。

「なんだ、お前ら」

「この子を引き取りに来た。この子は、社長の娘だ」

「ええっ!?でも、母親は、普通の……」

悠李はシャルロットの前に出て、手を広げて守ろうとする。

「なんのつもりだ、ガキ」

「貴女たちの眼は、怪しい……」

「悠李が言うなら、そうなんだろうな。早く帰んな。鬼が来る前にな」

鬼とは、創龍の事だろう。

子鬼は一歩も退かない。創龍の息子だ、とランディは関心した。

「邪魔だ、失せろ」

「いやだ。シャルロットは、僕が守っ――」

言いかけた途端、悠李が拳で殴られた。軽く吹っ飛び、浮浪者の腕に止められた。

「悠李っ!っあうっ!!」

「シャル!!」

「てんめえ、ガキになんてことを!!」

「見過ごせんな……」

店中の客達と、ランディが女を睨んだ。

「痛いっ！！放してぇっ！！悠李いっ！！」

髪を引っ張られながら連れていかれるシャルロットが眼に入る。

悠李がキレた。完全に。

切れた唇から流れる血を無視し、女に飛び掛かり、顔面を殴った。

「シャルロットをはなせっ！！お前なんかに、シャルロットを奪われて溜まるかっ！！」

「このクソガキ……！！」

外で待っていた仲間にシャルロットを投げ渡した。仲間がダッシュで逃げ、入口の近くにいた客がそれを追う。

「シャルロット！！」

待機させていたヘリで颯爽と逃げる。中の女性は思いっ切り悠李を蹴り飛ばした。口から吐き出る胃液。涙を流しながらも、悠李は刃向かうことをやめない。

「シャルロットを返せぇ！！」

「死ね、クソガキ！！」

正気か。悠李に拳銃を向けた女。しかし、悠李は奥せず、女性に掴み掛かった。

「あなたは！！シャルロットをっ！！」
「親元に帰すのはおかしいか！？クソガキ、頭がおかしいな！！」
「あなたの眼は汚いから、信用出来ない！！よくもっ！！よくもシャルロットに、あんな乱暴にして、おかしいとか言えるな！？」
「親孝行をするのは当然だろうっ！？アイツはいい『モルモット』に――」
「ふざけるなぁ！！帰せっ！！幸せがないなら、シャルロットを帰せよ！！」

女の言葉を遮り、顔面に頭突きを食らわせた。女がのけ反るが、悠李は追い撃ちをかけようとする。

「シャルロットぉっ！！シャルロットぉっ！！」
「小賢し――」

女が遂に引き金に指をかけたその瞬間、女の銃が叩き落とされ、女の頭が撃ち抜かれた。

「私の愛弟子を……。悠李、大丈夫ですか？」
「キリエさん！！シャルロットが！！」

助けに来たのはキリエ。悠李の様子を見て、錯乱していると判ると、悠李を抱きしめ、落ち着かせた。

「大丈夫……。シャルロットが、どうしたのですか？」
「シャルロットが……さらわれた……」

涙は止まらない。キリエは女性の死体からデュノア社の社員証を取ると、創龍に連絡しようとした。

「シャルロットを、守れなかった……」
「悠李……」
「僕はっ！！”だいじなもの”を、守れなかったっ！！」
「坊主……」

客も、キリエも、悠李の気持ちが判れば判る程辛い。悠李の顔は涙でぐしゃぐしゃになっていたし、蹴られた跡もあった。
それでも立ち向かう悠李。この子の芯は、凄く強い。

守る為の力を与えたい。”だいじなもの”を守る力が。

「悠李……」
「キリエさん！！どうして僕は守れなかったのっ！？父さんは守ってくれたっ！！僕はシャルロットを守りたかった！！」
「……悠李。貴方の心は、判りました」

シャルロットも大事だ。だが、それよりも、悠李の望みに応えてやりたい。

創龍と眼差しが似ていた。魂も、何もかも。守りたいという気持ちは、むしろ創龍以上かもしれない。

「力を入れるということは、力を自覚し、溺れないようにすることです。判りましたか」
「僕は、だいじなものを守る力以外、要らない……」

固い決意。気持ちが強い。
キリエは、悠李を鍛える事を決めた。この子の為に。意志を守る為に。

3（前書き）

今更ですが、このまま書き続けていいのか判らなくなってきました。

3

◆◇◆◇◆◇

「その後、シャルロットはどうなったの？」
「うん、デュノア社のテストパイロットになったんだ。適正ランクがＡってわかった途端にね。デュノア社の経営が困難になっている時に、それが出たから、まさに助け舟だ、開発が出来る、ってあっちは思っただろうね」

悠李のベッドの前で続く立ち話。でも、と彼女は言葉を濁し、俯いた。悠李がシャルロットの顔を覗き込む。
形見のペンダントが、キラリと光った。

「でも、あそこにボクの場所はなかった。道具みたいに扱われ、継母には暴力を振られ、父親は会ってさえくれない。愛人の子供だというのにね」

悠李の話との繋がってはいる。しかし、悠李が聞いている本題はまだだ。何故、偽名を使うのか。
そして、新たな疑問。何故そこから出てこれたのか。

「でも、ある日。ＩＳを動かせる男性、一夏が現れたとき、父から指令が降りたんだ。所謂スパイ活動をしろ、とね。もちろん、ボクは嫌だった。テストパイロットならともかく、なにか罪を犯した訳でも無い人達を、自分達の会社の利益となりそうだからスパイしろ、なんて、あまりにも酷いから」
「うん」

悠李が相槌を打つ。

「でも、その時に、一夏だけじゃなく、悠李もニュースに出てたよね。『ランチア・ストラトス、世界で二人目の男のＩＳ適正者』って。それも聞かされたボクは、二つ返事で了承したんだ。勿論、スパイ活動をする気はなくだよ。ボクは、悠李に会いたかったし、あんな所にはいたくなかった」

自分に会いたい、なんて嬉しいことだろう。悠李の気持ちが高まった。

「それに幸運が重なって、出発予定日の１日前。おじさんが僕を連れ出してくれたんだ」

「えっ？」

「空港まで移動する最中に気づいたんだ。運転手がおじさんだった。情報屋って人が、ウチの情報をキャッチしたらしいんだ」

情報屋。悠李も聞いたことがある。名前を、エンツォ・フェリーニョというらしい。会ったことが無いので、顔も性格も知らない。

「どこにも出させて貰えなかった。外に出たのはこれが初めてだった。その時に、おじさんが変装して、空港まで連れていってくれたんだ。会社の方の通信手段も、全部情報屋とおじさんが潰したらしいんだ。だから、今は自由の身なんだ。けど、偽名を使うのは、あっちに感づかれないように、だって」

「偽名はあっちも知っていないの？」

「うん。何も。追って連絡する、とは言っていたけど、今は通信機器が無いから」

「男装は？」

「一夏に接近しやすいように、だって。でも今は身を隠すためだね」

裏手を取ったようだ。なるほど、と悠李は感心した。

「この事を知っているのは、学園で、僕だけ？」

「うん、おじさんが話してなければ」

「親父は、そういう所は賢いから大丈夫だよ。いきなり初対面の奴を信用しないし、この学園もね。僕が親父と電話するときに、千冬さんのことを話すけど、千冬さんの事は信用してるから」

「なんで？」

「親父と千冬さんは、電話で何回か話してるから。つい最近のことだけどね。後は、今日も仕事で話してるらしいし、二人とも『こいつは信じられる』ってさ」

「その仕事の話は、ボクの正体も？」

「親父は転校生のお守りとしか話してないから、必要以上に話さなかったと思う。仮に話していたとしても、千冬さんは口が堅い」

二人とも、信頼出来る『仲間』であるからこそ、疑わない。

創龍に至っては、父親でもあるからだ。

「そっか」

「うん。バレても、学園機密は漏れないだろうしね。学園が言うには、政府とかの役人でさえ、学園の中の事は知らないらしい」

生徒側の方は安全・安心。同時に、自由を少しだけ奪われるが、命と自由を引き換えにするなら、誰でも自由を渡すだろう。

それに、奪われた自由を忘れてしまう程、楽しい仲間も出来る。

苦は感じられない。

「でも、何かあっても、君は僕が守るよ。最初から最後まで、絶対

に」

悠李の透き通ったスカイブルーの瞳の内を、シャルロットは覗き込んだ。その瞳の様にクリアで思いであると彼女が思うと、嬉しくなってくる。

悠李は意識せずに、シャルロットをオトしてしまった様だ。いや、元々オチているのだが、更に深く浸からせた。

「悠李、信じてるよ」
「ありがとう」

優しい微笑み。シャルロットの『悠李にデレデレハート』に、ずぎゅうんという銃声と共に、弾が撃ち込まれてしまった。
シャルロットのべた惚れ度は右肩上がりになっていく。平面のＸ－Ｙグラフで表すと、綺麗に原点Ｏの角度を二等分する一次関数だ。

「悠李っ♪」
「うぉいっ、いきなりだとびっくりするから」

抱き着いてくるシャルロット。この子はスキンシップも激しくなったな、と悠李は思った。
シャルロットの胸元のペンダントがごりごりと当たった。彼女自身もその感触を感じた。

その時、シャルロットは、創龍から、悠李に渡してくれ、と頼まれていたアミュレットの存在を思い出した。
シャルロットは、ごめんね、と言って、制服が入っていた袋の中から、琥珀のアミュレットを取り出し、悠李に差し出した。

「おじさんが渡してくれって」
「親父が？」

このアミュレットは、創龍がいつも着けていた物だ。アミュレットは魔除けの他、厄除けなどにも使われている。

「親父のね……」

アミュレットを受け取り、首にかける。琥珀から伝わる、暖かい”なにか”が、悠李の心を包み込む気がした。

「ありがとう」
「うん、どういたしまして」

礼を言う悠李に、シャルロットが笑顔で答えた。
今日で何回目だろうか。そして、何日ぶりの笑顔なのだろう。

「シャルロット」
「なあに？」
「おかえり」

自分の元へ戻ってきたというのに、その言葉を言うのを忘れていた。家ではないが、家族の元だというのは変わらない。

「ただいまっ」

あまりの嬉しさに、ほろりとしてしまった。少しの嬉し涙に、悠李がまた優しく笑い、シャルロットの頭を撫でた。

「ありがとう。優しいのは変わらないね」
「そうかな？」
「うん。いつも優しかったよ」

満開の笑み。可愛く思った悠李が、少しだけ顔を赤くする。

「なんか、安心して、お腹空いちゃった」
「あ、ああ！！食堂行こうか」

無意識に手を差し出す悠李。シャルロットがニコニコしながら、その手を握った。

――食堂で、レールガンの件を千冬に怒られたことは、また後のお話。

「4

◆◇◆◇◆◇

食堂での食事が終わった後、悠李は千冬の部屋に、シャルロットと一緒に出向いていた。

シャルロットはジャージだと、女だとすぐにバレてしまうため、悠李の服を借りたが、ダボダボで何度かコケてしまっていた。

「織斑先生、失礼します」

ノックし、断ってから千冬の部屋に入る。少し散らかっている。とても千冬の性格からして考えられない。

「どうした、ストラトス。デュノア。……ああ、今は神威でいいか」

「はい。実は、シャルルについてなんですが」

「デュノアが？なにかあるのか？」

シャルルの事を、シャルロット本人が全て説明し、千冬に話した。千冬がうんうん、と頷きながらも、別状困ったことではない、というような顔をしている。

「大丈夫だ、デュノア。この学園には、お前の同意がない限り、外部からの手出しは全く持って許されん」

「え？」

千冬は学園手帳を開き、該当する校則の一つを読み上げた。

「特記事項第二十一。本学園における生徒は、その在学中において

ありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は許可されない」

「す、すげえよＩＳ学園……」

「教師は生徒を守るためにいるものだ。この学園は、それを一つの団体として、徹底的に強化したと思っていい。デュノアの安全や、お前の父からの介入、もっと幅を広げると、フランス政府の介入は、この学園へは出来ない」

妙な所で役に立つ校則。シャルロットの人権的安全は守られる。身の安全は、悠李も千冬もいるから大丈夫だろう。

「代表候補も降ろされん。この学園が指示しない以上はな」

「つまり……。ここにいられるということですか？」

「ああ。それを、お前が望んでいるのならな」

拒否しない筈がない。悠李の傍にもいられる。隠れ蓑が無くなろうとも、この学園が、悠李が、守ってくれる。

「しかし、すぐに女、ということをバラすのは、生徒が混乱するだろうな……。１ヶ月後にでも、それをするか」

「はい」

「厄介事を持ち込んでばかりで、すいません」

悠李が謝った。今回だけでなく、創龍が壊したアリーナの壁、悠李が壊した机、ヴァンガードで全損した管制塔など、学園側には多大な損害を与えている。

「今回の件、悪魔の件は仕様が無い。だが、貴様等が抑えれば、あんなに損壊せずに済んだ物もあるだろう、愚か者め。破壊アリーナの壁は、貴様の報酬から引いておくからな」

「構いません。寧ろ、あの報酬は多過ぎるので、頼みます。一々アタッシュケースは止めてください」
「教育よりも多く貰っているのに、減らせと？嫌味か？
それに、貴様は命を護っているのだ。イレギュラーな存在からな。命の見返りとして、金というのは、あまり私も気に食わんが、受け取っておけ」

それが困るんだよ、と悠李が軽口を叩く。便利屋の普段の収入より、何倍も多い。

「仕送るかな……」
「『Ｂｌａｃｋ　Ｃｈｅｒｒｙ』はお金持ちでしょ？あんな広い家も、家電も、家具も買えてるんだもん」
「そうなんだよねえ……」

でも、と悠李は言い、仕送ることにした。１／５でも送れば喜ぶだろう。

「今度また、悠李の家に行きたいな～」
「いつでもおいで。スラムだから、来るときは声をかけてね」

話が終わり、千冬が散らかった部屋を見回している時に、悠李はシャルロットと話す。

「神威。一つ依頼していいか？」
「はい？」
「この部屋の掃除をしてくれ」

悠李とシャルロットは、暫くこの部屋から出れなかった。

◆◇◆◇◆◇

「よかった。ここにいられるなんて」

自室に戻ったシャルロット達が、それぞれのベッドに腰掛け、話した。

「うん。君の近くにいられて、君を護れるのが、僕は嬉しい」

「えへへっ、悠李は、ボクのナイト様だね」

あの日から、シャルロットを守りたいが為に己を鍛えた。その力は、今シャルロットだけでなく、一夏も、箒も、鈴も、セシリアも、大事な仲間を護れる程に大きくなった。

自己満足であるかもしれない。しかし、己を見失うほど、力に固執する意味も、気持ちも無い。

「でも、無理はしないでね？ボクにも出来ることがあったら、きっと力になるから」

「ありがとう」

その言葉に、自然と笑みが零れる二人。シャルロットは悠李の隣に移動し、肩に寄り掛かる。

「それと、いつでも甘えさせてね」

悠李は何も言わず、優しくシャルロットの頭を撫でた。今までのことを、「良く耐えたね。よく戻って来てくれたね。」と讃え、喜ぶように。

「一緒に寝ようか？」
「いいの？」
「うん」

いっぱい甘えさせてあげたかった。今日から、それをしてあげよう、悠李はそう考えた。

時刻ももう、1時を回っている。そろそろ寝ないと、明日が大変だ。

横向きの悠李の顔の前に、シャルロットがいる。

「おやすみ、シャルロット」
「おやすみ」

大胆に悠李の右頬にキス。そのまま、悠李の胸元に顔を埋め、すやすやと彼女は眠りに落ちた。

「大胆なのか、なんなのか判らん……」

顔を赤くしながらも、シャルロットを優しく抱きしめながら、悠李も意識を闇に落としていった。

「4（後書き）

～その日の食堂～

「あれ。セシリア、悠李は？」
「あら、一夏さん。デュノアさんとさっき一緒に食べてましたわよ？」
「声をかけようと部屋に行ったが、既に居なかった」
「アイツって、そんな趣味があったのねー。ヤバいわね」
「……ゆ、ゆゆ、悠李に限って、そんなことはない！！」
「なぁに顔真っ赤にして叫んでんだ、箒。鈴、アイツら幼馴染みだぞ」
「だからこそ、疑惑があるんじゃない。私達を更にヤバい感じにしたものよ！」
「俺達がどうした？」
「……」

Ｍｉｓｓｉｏｎ１０　だいじなもの

◆◇◆◇◆◇

翌朝。ベッドには悠李の体温が残っているが、本人はいない。

「ふみゅ……っ？あれ、悠李？」

「今、何時……？」

シャルロットが眠たげな目を擦りながら、目覚まし時計を見る。今は６時半。少しばかり早起きだ。

「あ、起こしちゃった？」

シャワールームから聞こえる悠李の声。彼はタンクトップと制服のスラックスを着、シャワールームから出て来た。

「おはよう。いつも５時頃からトレーニングしてるんだ。今日はボーデヴィッヒさんがいたよ」

「へえ……」

「顔洗っておいで」

シャルロットを立たせ、背中を押しながら、流しへ誘導する。タオルを渡すと、悠李は制服の上を着に戻った。もうコートは暑いので着ていない。制服を腕まくりし、動きやすくした。

「おはよう悠李」

冷たい水で目が覚めたシャルロットが、悠李に挨拶をした。

「制服に着替えたら、食堂行こうか」
「うん」

シャルロットの着替え待ち。彼女の男装服を渡すが、それだけでは済まない。女の子の着替えだ、予想は付くだろう。
悠李はシャルロットに背中を向け、着替え終わるのを待った。

そして、隣の箒と一夏を誘い、食堂へ。箒も、一夏を連れて、剣道場で毎朝鍛練しているらしい。女版宮本武蔵でも目指しているのだろうか。
「おはよう一夏、篠ノ乃さん」
「おはようシャルル」
「あ、ああ……」

――悠李が、ホ〇？

昨日の鈴の話を未だに忘れられないらしい。悠李は何か嫌な気を感じ、箒に言う。

「ねえ、箒。もしかして、僕×シャルルとか考えてない？」
「な、なにを馬鹿な！！」
「僕はノーマルだよ」

話の意味が判らないシャルルが、一夏に聞こうとするが、お前は判らないほうが良い、と制されてしまった。

◆◇◆◇◆◇

今日は土曜日であった。休みではないが、午前で授業が終わっていた。

いつも通り、アリーナの使用許可を取り、箒、セシリア、鈴と一夏、ランチア、そして今日からはシャルルがそれに混ざることになった。

「ランチア。一夏は、どこまで出来るようになったの？」

「セシリアのおかげで、グリッドターンと、瞬時加速（イグニッション・ブースト）は出来る様になった。後は、僕のエスケープ・アーツを少し」

「回避技？」

試しに、一夏にシャルルの銃撃を避けてもらおうと、ランチアが思って言った。

シャルルの専用機・ラファール・リヴァイブ　カスタムＩＩのアサルトライフル――ヴェントを連射してみた。このラファールは、プリセットを幾つか外し、拡張領域を倍にしてあるため、様々な武器が使える。

ランチアのエスケープ・アーツのみで銃弾を避けようとしたが、少し無理があったようで、何発か当たった。

「なかなかだね。後は、射撃武器の特性を理解できれば、相当強くなれるよ」

「エスケープ・アーツはまだ未熟なんだよなぁ……。つか、なんでセシリアに勝てたんだろ」

「根性じゃない？」

代表決定戦の時だ。確かにあの時は勝った。しかし、それからは、冷静な思考のセシリアに勝てず、負けが続いていた。

「スランプとかもありますから、長く考えていけばよろしいのでは？」
「まあ、な」
セシリアの言うことを素直に受け止める一夏。焦る必要は無いのだ。
「実際に銃を使った方がわかりやすいかな？ボクのヴェントを貸すから」
はい、と一夏に手渡した。他のＩＳの武器は、その武器の所有者とＩＳが認証することによって使える。
久しぶりの射撃だ。一夏はハンドガードに左手を添え、腰の辺りで構える。よく見る軍団スタイルだ。しかし。
「一夏、Ｍ９と同じ位置でいいんだよ」
「え？」
どちらの方が正しい、とは無いが、そちらの方が狙いやすいだろう。
「センサー・リンクは出来てる？」
「いっくら探しても、無いんだよな、これ。エピオンかっつうの」
「エピオン？」
「一夏、Ｗネタは止めようか」
射撃補助の為にセンサー・リンクがあるのだが、ガチガチの格闘機体の白式には無かった。シャルルが言うには、普通は格闘機にも

あるらしい。
「まあ、反動の逃がし方も知って――」
虚空を狙いながら言う一夏。その脇から、アリーナがざわつき始めた。
「ちょっと、あれ！ドイツの第3世代型ＩＳじゃない？」
「まだ本国でのトライアル段階だって聞いたけど……」
話題の種は、すぐに判った。
空中に浮かぶ、黒いＩＳ。それを駆るは、銀髪の独眼。
「ボーデヴィッヒさん？」
その通り、機体の操縦者はラウラだ。ラウラは一夏にプライベート・チャネルを開き、話し始めた。
＞＞貴様も専用機持ちか……。ちょうどいい、私と戦え＜＜
＞＞嫌だね。戦う理由もメリットも俺には無い。そんな自分勝手な奴に付き合って堪るかよ＜＜
口数が多い一夏に、ラウラがイラついた。
＞＞減らず口を叩くな。貴様が教官の弟であるなど、私は認めん。
……そうだな。嫌でも戦わせてやろう＜＜
そう通信すると、右肩のレールキャノンを、一夏目掛けて発射するラウラ。それを、雪片弐型で上空に反らす一夏を見て、ラウラが眼を見張った。

「何やってんだか……」
「何故ソイツと一緒にいるのだ、息子どの！！」
「僕が誰といようと勝手だろう？」

一夏の脇で、ランチアが呆れた様に言った。それが耳に入ったラウラが、ランチアに言うが、軽く返された。

ランチアにオープン・チャネルで話し掛けようとするが、ランチアからは応答がない。回線も無いのである。
無論、ＩＳを持っていないのだから、当然だ。

「ええい、まどろっこしい。息子どの、貴方は私と同じ存在だろう。何故、力無き者と群れたがる？」
「力が何か、自覚しているのか？」
「力は全てだ。力がなくては、何も出来やしない。自分を守ることすらな」

後半は正論だが、力が全てではないとランチアが思った。力に溺れる者の典型的な例だ。

「力が全て？下らんね。確かに僕には力がある。だけど、その力を全てと思ったことはないね」
「力なきものは、力ある者の枷になるだけだ。そいつが強ければ、教官も、二連覇が……」
「モンド・クロッソか？」

当事者の千冬はいないが、二連覇の可能性を摘み取ったように言われた一夏に、ランチアが聞いた。

「なにがあった？」

「ああ。その決勝戦で、誘拐されてな……。千冬姉が、決勝を棄権して助けてくれたんだよ」
「へえ。いい話じゃないか。弟想いの姉で」
「そもそも、貴様がいなければ――」
「その辺にしておけ。付け上がるな、クソガキ」

ランチアがラウラを睨みつけた。まだキレてはいないが、それでも癪に障った。

「モンド・クロッソ二連覇？ハッ、いくらそこで勝とうが、大事なモノを守れなきゃ、意味がない。千冬さんは、唯一の肉親の一夏を助けた。つまり、彼女の中には、人の命の方が、モンド・クロッソ連覇より価値がある」
「な、なにを――」
「力をただ追い求めた先には、何があると思う？何の意味もなく、ただやたらと力を求めた者の末路は判るか？」

見てきたからこそ、言わなければならない。ランチアは冷ややかな眼で言った。

「孤独な死だ。自ら身を滅ぼしてのな」
「っ……」
「クソガキにはまだ早過ぎるんだよ、力を求めよう、なんざな」
「黙れ……っ！」
「図星か？その怒りを、僕にぶつけるか？」
「いくら息子どのでも、それ以上は……殺すっ……！」
「やってみな」

ラウラからの殺気。しかし、ランチアはピクリともしない。ただ、ゆっくりと口を開いただけだ。

逆にラウラをキレさせてしまった。右腕のプラズマ手刀でランチアに斬り掛かるが、頭一つ分の大きさだけ避けられ、空を捉えた。

ランチアがその腕を左手で掴み、右腕をラウラの腋に入れると、地面を思い切り蹴りながら一本背負いを決めた。

「その程度で、力を云々言ってるのか？」

「ぐっ……！」

「甘いね」

左手を離し、ラウラをそのままにする。立ち上がるラウラが、ランチアを睨みつけた。

「貴様っ……」

「おい、そこっ！何をしている！ＩＳで生身の人間を襲うなど言語道断だ！クラスと名を言えっ！！」

反撃に出ようとした時に、タイミングよくアリーナを管理していた教師に止められた。

2

◆◇◆◇◆◇

咎を喰らったのはラウラのみであった。しかし、教師の説教の最中に、ラウラは無視してどこかに行ってしまった。

去り際に、ランチアを睨み付けたが、ハッ、と鼻で笑われた。

「君、大丈夫だったかい？よく背負いなんかかけられたね」
「まあ、あんな大きな振りなら、避けるのは容易いですし。地面もしっかりしてるから、強く打ち込めますよ」
「そうか。取り敢えず、怪我が無くて良かった」
「もういいっすか？」
「ああ」

大したことなどしていない、と言わんばかりの態度で、アリーナの管理室から出た。外で待っていたシャルルと一夏が、悠李にハイタッチする。

「やるな、悠李！！」
「見ていて爽快だったよ」

楽勝だ、と悠李が言って、度や顔をした。

「どやっていいよ、あれだけやれば」
「ははっ。でもあれくらいなら、一夏でも出来るでしょ？」
「俺ならシャッフルを使うよ」

更衣室へと歩きながら話す三人。悠李は制服だが。

「でも、ガキって、ボクたちと同い年でしょ？」

「うん。僕、１６だから」

「あ……。忘れてた。悠李、ボクたちの一個上だよ」

「え？誕生日いつだよ？」

「父さんに拾われた日だよね？１２月の７日。今年で１７だ」

因みに一夏とシャルルはまだ１５だ。つまり、悠李が１年早い。

「１歳差でガキか。随分マセてるよな」

「はは……」

更衣室に着き、悠李はそのドアの前で二人を待つ。シャルルはスーツの上から制服を着るため、そう時間はかからないが、一夏は一々スーツを脱ぐため、相当遅い。

「一夏？先行っててい？」

「ああ」

シャルルが出て来た。悠李は一夏に聞いて、二人で先に寮に戻った。

部屋で手を洗ってから、食堂へ行く。既に箒、鈴、セシリアが居たため、そこに相席させて貰った。

「ランチアってさ」

「なに？」

「お昼も、すごい量を食べますわね……」

食券をこれでもかと言うくらい買い占めている。今日はバーガー系を２０枚ほどだ。

「私達より動いてないのに、よくそんなに入りますわね。しかも、太らず……」

「基礎代謝って知ってる？運動してると自然に上がって、食べても太らなくなるんだよ」

セシリアに、代謝を話すランチア。そこに、ランチアを探していたらしく、真耶が声をかけてきた。

「ストラトス君、今いいですか？」

「はい」

「大浴場が使えるようになりました。時間は結構後なんですが、織斑君と、デュノア君と一緒に入って下さい」

「悠李と……お風呂……」

「デュノア君？」

「やった！！風呂入れるのか！！やったぜ！！」

「山田先生、この二人はもう流していいです」

「あ、はぁ……」

箒が上手い具合に言った。ランチアは拳を握り、風呂に入れる幸せを噛み締めた。

「山田先生、あざっす！お礼にこのフィッシュバーガーを！」

「あ、ありがとう……。私が決めた訳じゃないんだけど……」

困り果てる真耶を、更に困らせるランチア。箒がすこんと手刀でランチアを止めた。

「気狂いか、お前は」

「すいません」

どことなく、箒が千冬に似てきた感じがした。

◆◇◆◇◆◇

「ランチア・ストラトス……」

ラウラが自室で、その名を呟く。激しい憎悪と怒りを持って。

「『力が全て』ではないだと？力の無い者こそ、死ぬだけだ」

真耶を負かした強さ。教師に力が無いだけだ。

「弱者はこの世界にはいらん、強者こそ、この世に必要だ。私と同じ存在なのを判って……」

だからこそ腹が立つ。生きていて、これ程苛立ちを感じるのは初めてだ。

「そこまで堕ちていくのなら……、私が粛清――いや、殺す」

眼には殺意。力強く握り締められた拳。

――しかし、彼女自身が死に近付くことなど、この時は誰も知らなかった。

3

◆◇◆◇◆◇

月曜日から、ラウラが悠李を睨みつけて見るようになった。隣の席なので、諸に視線が直撃する。

「随分嫌われてるね……」

「しょうがない。でも、正しいことを言ったから」

その言葉が気に喰わない。掴み掛かろうかとも思ったが、止めた。

「ねえ、ランチア。放課後はどうする？」

「そろそろ一夏に、僕の剣技を教えたいんだけどなあ」

「あまり無理なのはヤメたほうがいいよ？あとさ、鈴さんとオルコットさんが模擬戦やるから、今日は篠ノ乃さんと四人でやることになったから」

ラウラがそれを聞いた途端、ちょうどいいと思った。

このイライラを、二人の模擬戦に介入し、ぶつけて発散しよう。うまくいけば、ランチアを釣れるかもしれない。

それまでの辛抱だ。ラウラは一人笑った。

しかし、ランチアは見逃さなかった。彼女を警戒すべく、彼はアリーナに先に足を運んだ。

◆◇◆◇◆◇

「なんでアンタがいんのよ」

甲龍を展開している鈴が、その横にいる悠李に言った。

鈴の前には、ブルー・ティアーズを展開したセシリアがいる。

「見物。模擬戦やるんでしょ？」

「いや。この前の模擬戦でズタボロにされちゃったから、どちらが上か、ハッキリさせたいのよ。俗にいう、ガチンコね」

「面白そうでもありますし」

微笑みながら言うセシリア。悠李も笑いながら二人に言った。

「怪我しない程度にね。あと、急な乱入者には気を付けるように」

乱入者という言葉に、鈴が引っ掛かった。

「悪魔とかかしら？ふん、こっちだってＩＳに乗ってんのよ？返り討ちにしてやるわ！！」

「ええ、では鈴さん、始めましょうか」

「そうね！行くわよ！！」

元気で結構、と悠李は呟く。鈴がそれを身で表すかのように、青竜刀を連結、双天牙月の形態にして、セシリアに突っ込んだ。

セシリアは臆することなく、スターライトｍｋ？を撃ち始めた。

悠李が、これなら大丈夫だ、と思い、アリーナのゲートをくぐり、外の自販機でお茶を買い、自販機に寄り掛かりながら、それを飲み始めた。

「あ、ストりゃんだ」
「どうも。布仏さんだよね？」

ダボダボの袖の制服を着た子が、他に二人の子と一緒に、悠李の近くに来た。

「ストラトスくん、誰か待ってるの？」
「うん。一夏、箒、シャルルを」
「ストりゃんってさー」

変な呼び名で呼ばれるが、気にしない。
「へんてこりんな技ばっかし使うよねー」
「ああ、回避とか？あれは自己流と、昔習った武術から作ったんだ」
「へぇー」
「どんな武術やってたの？」
「うーん、クラウス・アーツっていう、格闘技や剣術とかが混ざったモノなんだ。アーツには、大きく分けて四つの型があって、剣に特化、回避に特化、銃に特化、防御に特化っていう風になってる」
「なんだか、複雑だね」

お茶を飲みながら応答する悠李。長身が自販機の高さとマッチする。

「ストりゃんおっきー！」
「織斑くんは１７０くらいあるけど、ストラトスくんは余裕で超えちゃうよね。織斑先生を見下ろすくらいに」
「１８４ｃｍだよ。レッドブルで大きくなったようなモンさね」
「レッドブル好きなの？そういえばストりゃん、新聞部の先輩から貰ってたね～」

話し方がのほほんとしている布仏さん。よし、のほほんさんと呼ぼう、と悠李は決めた。

早速呼ぼうとした時、アリーナが急に騒がしくなる。悠李は布仏さん達に、用事があると告げ、中に入った。

予想通りだ。ラウラがセシリアと鈴の戦闘に割り込んでいる。

ちょうど鈴の衝撃砲「龍砲」がラウラに近付き、撃ち放つ瞬間。

龍砲はピクリとも動かなくなってしまった。

「なんだ、あれは……」

「釣られたか、ランチア・ストラトス！！」

ラウラに気付かれた。無理もない、ＩＳにはハイパーセンサーが搭載されている。リミッターがかかっている状態でも、３６０度、微細物まで見られるのだ。

「ら、ランチアさん！」

「コイツらを壊してから、相手をしてやろう。それまで待っていろ」

セシリアがＢＴ兵器を展開しているが、『展開中、ＢＴ操作に集中して動けない』弱点を的確に付いており、避けながらレールカノンを撃っている。

鈴に対しては、インファイトでプラズマ手刀を展開、必要以上に斬り付け、ワイヤーブレードに絡ませ、セシリアに投げ付けた。

その次までの行動が速い。レールカノンを乱射しながら、瞬時加

速で勢いづけ、プラズマ手刀で一閃した。

絶対防御が発動され、ＩＳが解除される二人。絶対防御は、操縦者の命は守るが、怪我や衝撃までは関与しない。

それを上手く使い、怪我まみれの状態にしたラウラは、悠李を見ながら言った。

「見ろ！これが力無きものの末路だ！」

「……遺言は、それだけかい？」

静かな怒りが悠李に見える。拳を強く握り、ラウラを睨んだ。

「それは、強さじゃない。オーバーキルが、力を持つものが、本当にやることか？」

「弱者が強者の一撃に耐え切れないのが悪い！！」

闇魔刀を無意識に取り出した。ドレッドノートを使用せず、ＩＳ武器を取り出した悠李に、ラウラが一瞬たじろいた。

「馬鹿は、痛い目を見ないと解らん様だ……」

ダッシュでラウラに突っ込んでいく。ラウラはレールカノンを撃ちつつ、ワイヤーブレードで悠李を狙う。

レールカノンをしゃがんでよけ、ワイヤーを中心として、螺旋状に身を動かす。

３本、４本とワイヤーブレードが増えていく。首筋に３本目が掠るが、ブレード部を掴み取り、引き千切った。

腹を狙う4本目に乗り、それに付いラウラに近付く。それでも冷静にレールカノンを連射する彼女だが、悠李は全てを飛んで避けた。

ラウラの真上に移動し、逆立ちの様な体勢になって、鏡花水月で弾丸の雨を降り注がせる。

「フン、そんな豆鉄砲！！」

プラズマ手刀で弾丸を弾く。悠李はそれを振り切った隙を突き、天上天下で兜割りを仕掛けた。

見事命中、ラウラのシールドを貫通する程の威力があった。衝撃で額から血が流れるが、ラウラは流れた血をぺろりと舐め取り、悠李を睨む。

「ほらな。やはり、力が全てだ」

「戦いだけしか考えないのか？力より大切なモノがあるだろう」

ギロリと鋭い眼光がラウラを襲う。またもやラウラがたじろいた。

「絆か？仲間か？そんなものにこだわるか？」

「『だいじなもの』は誰にもあるはずだ。それがあるからこそ、力を持つ意味を理解出来る。力は絶対的なモノじゃない。アンタはそれを判っていない」

それに、と悠李が続けた。

「アンタは、『だいじなもの』自体、力だと思っているだろう。強さと力は一緒じゃない。強さはどれだけ『だいじなもの』を信じら

れるかだ」
「フン……。戯れ事を！！」
ラウラが悠李を掴もうとするが、悠李は宙に舞い上がり、踵落としでシールドを破壊しようとした。
「そこまでだ」
寸前で、一瞬で間に入ってきた千冬に止められた。
悠李はエアハイクを使い、バク宙して、千冬の後ろに立つ。よく見れば、千冬は打鉄のブレードを生身で持っていた。
「教官！！」
「教師だと言っているだろう。熱くなるのは構わん。しかし、物事には限度というものがある」
「限度？それなら、あの二人のオーバーキルの時点で超えているでしょう？」
「あいつらも、ボーデヴィッヒと好戦的だった。それで負けた。絶対防御はオーバーキルではない」
納得し難い。やり方があまりにも汚いからだ。
「だが、悪意が合ったのは確かだ。そして、ストラトス。お前は意図的に発砲、そして真剣を使ったな？」
「……」
力無く頷く。加減はしたつもりだが、威力はラウラの額を見れば判る。

「学園内で銃を使うのは構わん。しかし、お前は殺す気で銃を撃っていただろう！！」
「……少し、ムキになりました」
怒りが殺意になっていた。感情で行動する。悠李の悪い癖だ。
「ボーデヴィッヒ！！兵器と判って、ストラトスを二度も攻撃した罪は重い！！」
「しかし……」
「口答えは許さん！！いいか、相手がストラトスだったから良かったものの、本来ならばお前は国際的に裁かれるのだぞ！！」
化け物に法が通じはしないとは思うが、それでも、教師であるから、言わなければならない。
「それでも、決着を付けたいのなら、学年別トーナメントでやれ。それなら、文句は言わん」
悠李とラウラの目が合う。火花が散るかの様な、熱い闘志と敵意。二人はそれを承諾し、ラウラはアリーナを去って行った。
「神威」
「力に溺れた、可哀相な奴だね、アイツ」
拳を握り、血を垂れ流す悠李。地面に、ぽたぽたと血の跡が出来ていた。
「そういう奴だからこそ、僕が救わなきゃいけないんだ……！！」
「自らが望んだ事だ。そこからあいつを引っ張り出せるか？」
「出してみせるさ。それが、僕のやるべき事なんだから……」

そう言って、悠季はセシリアと鈴を担ぎ、保健室へと連れていった。

4

◆◇◆◇◆◇

保健室。一夏が鈴とセシリアのことを聞き、ダッシュで保健室に入ってきたが、鈴とセシリアは、大きな怪我でも捻挫程度で済んでいた。湿布や絆創膏だらけだが、普通に二人は悠李と話している。

「一夏さん？」
「うわ、こんなん恥ずかしいじゃない！！」

怪我だらけの二人が、自分の体を見て焦った。

「ああ、良かった……。無事なんだな」
「うん。二人とも、捻挫程度で済んだんだよ」
「程度って、捻挫も痛いんですのよ？」
「ああ、ごめん」

セシリアがジト目で悠李を見、苦笑いをする悠李。
一夏がそれを見て、ホッとした。

「取り敢えず、二週間は安静にしてなさい、だって」
「ランチア～、怪我を治す魔法とかないの～？」
「魔法は使えないんだよね、僕。魔石ってのもあるんだけど、今は持ってないし」
「ランチア！」
「ん？」

無い物ねだりをしてもしょうがない。渋々二人は休む事を決めた。

「おまたせ、お茶買ってきたよ」

「ありがとうございます、シャルルさん」

ドアから、シャルルが紅茶と烏龍茶のペットボトルを持ってきて、悠李に渡す。悠李がキャップを開けてやり、保健室のコップに出してやり、二人に渡した。

「これだと学年別トーナメント、出れなさそうだね」

「意地でも出たい気持ちはありますが、仕方ありませんわね」

「私は出るわよ！！アイツに吠え面をかかせたいわ！！」

一対一でも無理だろう。龍砲の動きが止まってしまったら、遠距離からの攻撃は出来ない。近接を挑もうとしても、止められてしまうだろう。

「ＩＳを借りてでも――」

「織斑くんッ！！」

「デュノアくん！！」

「ストラトスくん！！」

鈴が言いかけたとき、タイミング良く、大勢の女子が保健室に突っ込んできた。扉が無残な姿になり、どこかへ吹っ飛ばされた。

「な、なんだなんだ！？」

「トーナメントのペア組んでよ！！」

一夏がその数に驚き、鈴はカットされたため不機嫌になる。トーナメントのペア？と疑問に思った悠李が聞いた。

「え、知らないの？更なる実戦経験を積むためとして、2対2のトーナメントになったんだよ。好きな相手とペアを組めるんだけど、組む相手がいなかった場合は抽選なんだって」
「なるほど……」
「それでね？織斑くんたちがよければ、一緒にペアになってほしくて」

なるほど、と納得した三人。それを聞いて更に不機嫌になる鈴、そして悔しそうな顔をしたセシリアが後ろにいた。
「ごめん、俺はシャルルと組むことにするよ」
「へ？」

いきなりの発言に、シャルルが間抜けた声を出す。悠李はふふっ、と笑った。

「なんだ。なら、しょうがないね」
「シャルル、ごめん」
「い、いや！別にいいんだけどさ……」
パワーバランスを考えたら、シャルルと悠李では強すぎるだろう。一夏とシャルルならちょうどいい。

「ストラトスくんは？」
「う～ん、シャルルが取られちゃったから、鈴かセシリアと組みたいんだけど、この状態じゃ無理だから、箒と組むよ」

悠李が後方支援になるが、まあいい。ラウラと戦えればなんだって構わない。

「う、埋まっちゃった……」

「そういうこと。ごめんね。じゃ、僕、それを言いに行くから、お先に失礼」

セシリア達に断って、寮に戻る悠李。シャルロットが少しだけ箒を羨んだ。

◆◇◆◇◆◇

「それで？ふっ！わざわざここまで……はぁっ！来たのか！」
「うん、まあね」

剣道場で、剣を振るい合いながら、悠李と箒が話す。今は二人以外誰もおらず、思い切り竹刀を振るっていた。

悠李は制服のまま、そして箒は胴着を来たままだ。

「箒さえよければ、組んで欲しいんだけど」
「それは構わん……せいっ！だが、やるからには優勝を狙うぞ？」
「別に構わないよ。『優勝すれば、一夏かシャルルか僕と付き合える』、って噂を聞いたからね。それも目当てでしょ」
「へっ？」
「スキあり」

ぽこっと箒の頭に竹刀が落ちた。箒は口をポカンと開けたまま、悠李を見た。

「噂だと……」
「うん。あら？もしかして、箒が発信源？」
「そういうことになるのか……？」
あらま、と悠李が言った。竹刀を置いて、箒に聞く。

「なに？一夏に告っちゃった、とか？」
「……一夏に、私が優勝したら、私と付き合えと言った」
「そいで？」
「あいつは買い物と勘違いしてた。呆れて声が出なかった」
「一夏らしいさね」

軽く笑う悠李とは対照的に、顔が暗くなる箒。悠李は箒の肩を叩き、励ましながら言った。

「優勝しちゃおっか。一夏とくっつけてあげるよ」
「……お前も、付き合えよ」
「え？何故に……」
「お前も、欲しいからだ」

かぁぁっ、と、箒の顔が赤くなる。面と向かって言うのは大胆過ぎるし、言い方も恥ずかしい。

「判った」
「ぜ、絶対だからな！！何と言おうと、絶対だぞ！！」

これをシャルロットが聞いていたら、今頃悠李はシャルロットにボコボコにされているだろう。

「……でも、まずは勝たないとね。ボーデヴィッヒには、特に」
「ああ……」

静かな闘志が燃え上がり、二人を更に熱くさせた。

5

◆◇◆◇◆◇

箒と悠李が寮に戻って来た時、６６６号室の中には、既にシャルルがいた。

６６６号室のドアを開ける悠李に、「おかえり」を言うシャルル。そのまま、制服の姿である。

「一夏は？」
「あそこ」

マッサージ椅子で極楽を味わっている彼を、もう何度見たことか。

「お、おかえり。あれ？箒も一緒か」
「一夏……。お前、何度その椅子に座れば気が済むんだ？」
「ずっと」

はあ、と呆れた。悠李は一夏にマッサージ椅子を止めるように告げ、やめさせた。

「この椅子ブッ壊しちまおうかな……」
「こら、それはやめなさい」
「えー」

シャルルに止められながらも、悠李は渋い顔をする。

「これあると、一夏は話聞かないんだよね……」

「生返事しかしてくれなかったし」
「気持ちいいもんは気持ちいいからな。無理だ」
「ジジくさいぞ」

悠李が一夏に突っ込む。だが、一夏はそれを気にしない。

「こりゃ、一夏はトーナメントでお仕置きだな」
「ボクがいるから、そうそう一夏はやらせないよ？」
「どうかな？僕がいるから、簡単に突破しちゃうよ？」
「マジでそう思えてきたぜ……」

一夏の身が危ない。鈴の時と同じような感じで言っているのだろう。しかし、悠李にとって、シールドに強大な衝撃をかけて、操縦者を攻撃するなど、容易いことだ。弱気な一夏にシャルルが少し幻滅した。

「はあ……。とにかく、負けないからね！」
「それはこっちの台詞さ。な、箒」
「うむ。少なくとも、この軟弱者には負けん」
「俺の扱い酷くね？」

三人の戦意が高まる中、一夏がぼやいた。

「じゃ、トーナメントに備えて、ご飯に行こう」
「うん。いっぱい食べとこっと」
「シャルルに箸も教えなきゃだしね」

Ｌｅｔ'ｓ食堂。悠李のこの一言で、四人は動いた。

◆◇◆◇◆◇

「一本ペンを持つように……そうそう。その下に、もう一本潜らせて……」
「こう？」
「そうそう」

シャルルの為に和食セットを頼み、箸を教える悠李。人差し指と親指で上の箸を動かし、中指で下の箸を支える。簡単な使い方だ。
「やっぱランチアって、教え方上手いな」
「そう？」
「シンプルで分かりやすいからな。教師にでもなれるのではないか？」
「教師ねぇ……。小学生くらいなら見てあげたいな。ちっちゃい子って、元気があって可愛いし」
「いい人過ぎだろ！」
「可愛いものは可愛いからねえ」

悠李の意外な一面。しかも、満面の笑みで答えている。
子供好きは別にいいが、もし一歩間違えば、ロリコン認定されるだろう。

「ランチア、お魚ってどうほぐすの？」
「この色のラインに、頭の方からお箸を入れて、左右に開きながら尻尾まで動かすの」
「こう？」
「うん、上手上手」

シャルルも箸に慣れてきたようだ。悠李はそれを見て大丈夫だと判断し、自分の食事を取り始めた。

「蕎麦？」
「うん。なんか食べたくなった」
「本能の赴くままに行動しているな」
「いや、ごはんは別に関係ないんじゃ」

箒に悠李とシャルルがツッコんだ。ボケなのか、真面目なのかはわからない。

麺を啜りながら、皆と談笑する。この空気が、彼等は一番好きだ。

皆の笑顔が大好きだ。この笑顔が、悠李にとって、大きな力になる。もちろん、ラウラの言う力とは違う。

雑談中に、箒がランチアに言葉をかけた。

「ランチア、食事後でいいから、少し付き合ってくれないか？」
「いいよ。なにすんの？」
「なに、少し見て貰いたいものがあるだけだ」
「剣とか？」
「よく判ったな？実家から、真剣をな。実戦での剣を、お前から教わりたくて」
「なるほど。おっけー。じゃ、剣持って、外に来てよ。千冬さんから、外出許可取っておくからさ」

悠李だけにある特別権限だ。悠李は自由に外出可能だが、箒はそれが通用しない。だから、悠李が箒の外出許可を取るのだ。悠李も一緒なら、大丈夫だろう。

「じゃ、俺はマッサージ椅子にずっと座ってるかな」
「一夏、あれそろそろへたってきてるから、壊れたら弁償してね」

「げ。わ、わかった。壊さないようにするよ」

普通は壊さないもんだ、と突っ込む悠李。そんな下らない事を話しながら、楽しく食事を済ませた。

◆◇◆◇◆◇

場所は変わって、アリーナ。特別に照明を着けてもらい、悠李は闇魔刀を地に刺し、それに寄り掛かっていた。

「待たせたな」

「ん？いや、全然」

箒が、美しい装飾をした刀を持ち、アリーナに入ってくる。闇魔刀を地面から抜くと、悠李は箒に近付いた。

「綺麗な鞘だねえ」

「ああ。緋宵（あけよい）という刀だ。江戸時代から伝わる名刀でな」

「へえ。抜いていい？」

「いいぞ」

闇魔刀を渡しつつ、緋宵を受け取る。鯉口を切り、素早く抜刀した。

剣の軌道が衝撃波となり、地を走る。そのままアリーナの壁にぶつかり、切り傷を付けた。

「いつ見ても、お前の抜きは速いな」

「3、4回しかここで抜いたこと無いけどね。それにしても、すご

いな、この剣。業物だよ」
「まあな。私が抜いたことは無いが……」
「持ってみなって」

抜き身で渡す。ずしりと伝わる重量は、箒の身体にしっくりくる。

「確かに。……悠李、お前のこの剣は？」
「闇魔刀（やまと）っていう剣だよ。父さんの叔父のスパーダって人が使っていたんだ。それのコピー品を、父さんがどっかからわかんないけど調達してきて、僕にくれた」
「複製品？」
「うん。詳しくは知らないけど。
闇魔刀は魔剣だよ。ていうか、僕と父さんが使ってる剣は全部魔剣。
闇魔刀は、『闇を切り裂き食らいつくす』、『人と魔を分かつ』、『意志を持つ』剣って言われてる」

闇を切り裂く。その言葉を確かめたく、箒は闇魔刀を抜き、空に空振りした。

刃がなぞった所だけ白くなり、光が箒を照らす。

「これが魔剣……」
「まあ、そんなとこさね」

横で見ていた悠李が言った。闇魔刀を振るために預かった緋宵に、片手で逆手で持っている。
「持ったときから、不思議な力を感じていたが、これほどとは……」
「剣自体はね。お伽話（ファンタジー）みたいだけど、魔力を持っているから。使用者自体の魔力に応じて、更に強くなるのさ」

でも、と言葉を濁す悠李。箒がそれを聞き漏らさなかった。

「魔力も、何も、全てって訳じゃないんだよ。いくら強い武器があっても、どんなに強い力を持つ奴がいても、強者でも偉くも何とも無い。確かに、力が無ければ守りたいものは守れない。だけど、僕は、力より大切なモノがあるって信じてる」

「……ボーデヴィッヒか。もしや、惚れたか？」

「違うさ。ただ、僕は、力に溺れ、飲み込まれる奴をごまんと見てきたから、アイツには、そうなって欲しくないだけさ。アイツ限定じゃない、箒にも、皆にも」

どこまでも、芯が強く、優しい男。箒はそう思った。

「私もな、昔は、力が全てだと思っていた。一夏と離れて、姉さんがあんなことになって……。物事の急な変化に苛立ちを感じ、それを振り払いたいが故、剣を振り続けていた」

自分の周りがいきなり変わる。幼い彼女には、気持ちの整理が付かなかった。ストレスで追い込まれそうになっても、それを剣で解消する箒は強いと悠李が感じた。

「同時に、自分の非力さを怨んだ。自分に力があれば、姉さんとも、一夏とも離れずに済んだ、つまりは力が全てだとな。しかし、改めてそれは違うとわかった。一夏やお前に会ったことでも変わったし、同時に、自分を見つめ直すことでもな」

「ボーデヴィッヒと自分を重ね合わせて、心配してるのか。優しいな、箒は」

いや、と箒は首を振った。お前の方が優しい、と、悠李に言った。

「悠李。私がボーデヴィッヒに抱く気持ちは、同じだと思う。だから、勝つぞ。その為に、私に剣を教えてくれ」
「今から？」
「ああ。今日は簡単な技でいい。西洋剣でも、刀でもいい。勝って、ボーデヴィッヒを救ってやるんだ」
真っ直ぐな眼差し。気持ちは同じ。なら、教えない訳が無い。
「解った。教える。絶対、勝とう」
微笑みながら、手を差し出す。団結の誓い。手を握り合い、二人は勝つことを誓った。

「6

◆◇◆◇◆◇

剣の稽古を終え、部屋に戻ると、一夏だけがいて、シャルロットはいなかった。

「一夏、シャルルは？」

「お？あいつなら風呂に行ったぞ～。俺はもう入ったから、既に睡眠準備状態」

「あ……。そう」

ちょうど悠李も風呂に入ろうとしていた。しかし、シャルロットが先に入っているとなると、何かしらマズい。

「いいか……。僕も風呂入ってくる」

「おう、ゆっくりしてこいよ」

◆◇◆◇◆◇

そして、大浴場。

脱衣所にシャルロットの服が無かった。悠李が不思議に思いながらも、中にはいるかもしれないと細心の注意を払い、腰にタオルを巻いて浴場に入った。

完全に無人で合った。悠李は腰布を取り、シャワーの方へ行き、身体を洗い始めた。

「迷っちゃったよ……。はあ、誰もいな――」

その時、ちょうどシャルロットが戸を開けて入って来た。完全にタイミングの違いである。
ヤバい、と悠李は気付き、隠れようとしたが、隠れられる物など何も無い。すぐに悠李はシャルロットに見つかった。

「悠李！！」
「先に入ったんじゃ無かったのか、シャルロット！」
「い、いや、迷っちゃって……」
「しゃあないよな、それは……」

タオルで身体を隠し、何故か悠李に近付くシャルロット。冷静に腰にタオルを巻いて、隠した。

「ゆ、悠李？こうなっちゃったのも、何かの縁だし、というか、日頃からお世話になってるから、お礼に背中、流させて」
「え、いいよ別に」
「いや、流したいの！」
「は、はぁ……」

困惑する悠李。何かおかしい。シャルロットは、悠李愛用の牛乳石鹸を、スポンジと背中に着け、優しく洗い始めた。

「どう？き、気持ちいい？」
「うん。なんか、久しぶりだよね。子供の時以来だよね」
「それも、ちょうど別れた時だよね。私達、おじさんの腰くらいの身長しか無かった頃だよ」

過去を懐かしむ二人。良い思い出もあれば、悲しい思い出もあった。

「悠李の背中も、こんなにおっきくなって……。たくましくなったよね」
「シャルロットも、綺麗になったよ。おばさまにすごく似ている」
「あ……。ありがとう」
母親に似ている。彼女にとって、これほど嬉しい褒め言葉は無かった。
「悠李も、おじさんに似たよ」
「ああ……。シャルロット、僕は、御祖父様のコピーだから、親父が僕に似てるんだ」
「悠李……。それって、どういう意味かな？」
気になったシャルロットが、それを聞いた。
「僕は、バーミンガムの教会で、御祖父様の肉と、親父の血で創られた、御祖父様のコピーなんだ。だから、親父はある意味、僕の息子なの。
ま、僕は僕だから、それに変わりはないし」
「うん……。そうだよね。悠李は悠李だもの」
――私の、大好きな。
その言葉は、聞こえはしたが、敢えて反応はしなかった。
「悠李。私は――」
「そういえば、シャルロット。一人称、変えなくていいと思うよ。あ、ボクから私に変えなくてもいい、ってことね」

話し辛いだろう、と思って言ったことだった。シャルロットは、
「じゃあ、『ボク』で」と統一した。

「ボク、本当は悠李とペアになりたかった。一夏も構わないんだけど、出来れば……」
「でもさ、一夏とシャルロットって、あまり接点無いでしょ？友達としての仲を深めるなら、一夏の方がいいよ」
「それでも……」
「シャルロット？学園で、僕としか仲良く出来ないんじゃ、せっかく鳥かごから出たのに、楽しみが楽しめてないんだよ？判ってくれるかな？」

優しく言う悠李。本音を言うなら、悠李も彼女と組みたかった。
しかし、シャルロットを思ってこそだ。

「うん……。なら、悠李。今度、何かある時は、必ずボクと組んで」
「いいよ」

心の中で、シャルロットを甘えん坊と思った。

背中の泡を流し、身体を全部洗ってから、湯舟につかる二人。もちろん、身体を洗うときは、少し離れた。

しかし、湯舟では、背中合わせでくっついている。シャルロットの希望でこのような体勢になっているのだ。

「はあ～。やっぱり、お風呂って落ち着くね」
「うん。リフレッシュには最適だよ」

後ろを向きながら、悠李が言った。シャルロットの顔が、すぐそこにあった。

「悠李……」
「なんだい？」
「やっぱり、横並びで……」
「なんでもいいよ」

悠李は壁に寄り掛かり、シャルロットを手招きする。タオルを湯舟に沈めるのはマナー違反の為、隠すものはないが、悠李は別に見もしない。

足を組みながら、隠すところを隠す二人。シャルロットは手で胸も隠す。

「大胆な子にもなったよね」
「うっ……」

悠李がサラっと言った。シャルロットの頬が赤に染まった。

「背中流してくれたり、ほっぺにキスしたり、もう凄い大胆だね」
「結構気にしてるんだ……。悠李のえっち」
「それ、そっくり君に返すよ。シャルロットのえっち」
「ボ
、ボクはえっちじゃないよっ！！」
「冗談だよ」

ふふふ、と微笑む悠李。それを見たシャルロットも、落ち着きを戻し、笑いはじめた。

「悠李……♪」

悠李の肩に頭を乗せる。ん、と悠李は聞いた。

「呼んだだけだよっ」

気持ちが弾む。このバスタイムを、悠李とシャルロットはゆっくりと過ごした。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１１　ＤＲＩＮＫ　ＩＴ　ＤＯＷＮ（前書き）

※”グレー・スケール”を”グレイ・スケイル”と変えてみました。
こちらの方がカッコイイと思いましたので。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１１　ＤＲＩＮＫ　ＩＴ　ＤＯＷＮ

◆◇◆◇◆◇

「首元がお留守だよ」
「ちっ……」

トーナメント一日前のアリーナ。悠李は、打鉄装備の箒と一緒に剣を交えていた。

「ちぇすとぉっ！！」
「甘いっ」

悠李から教わったハイタイムで斬り込むが、悠李はバックムーンで、剣の軌道と同じように避けた。

「攻撃の気配をなるべく消さなきゃ。それと、避けるときはもっとコンパクトに」
「お前のそれは大味だが……」
「僕はここからも動けるし」

にこりと笑う悠李。ここまで易々と避けられるのも悔しい。

続いて箒は、ブレードで、悠李と同じ四連撃―左斬り払いから始まり、右斬り下ろしで終わる――を繰り出した。キレはいいものの、悠李には見切られてしまっている。しかし、大抵の人間ならば、避けられることはまずないだろう。

「それに、意外と無駄が無いんだよ？速度も速いから、射撃はまず当たらない。槍とかも当てるのは難しいだろうね」

「なるほど」

入念に考えられた技だから、勘違いするのはしょうがない。箒はそう自得した。

「そういえば、明日からだね。トーナメント」

「ああ。しかし、この状態で勝てるのか？」

「僕は、箒とは息合ってると思うし、箒も、僕の剣の飲み込みが速いから、イケるよ。やる前に自信無くしちゃダメだよ？」

「ああ。少し聞いてみただけだ」

自信満々という笑みをする箒。これなら、大丈夫だろう。

「明日、頑張ろう」

「ああ」

拳を突き合わせる二人。

――どこからでも、かかってこい。

◆◇◆◇◆◇

トーナメント当日。周りはＩＳスーツだらけのアリーナに、一人だけ制服で浮いている悠李は、気にもせずに、トーナメント表を見ていた。

「１回戦目……」

「あ、悠李」

自分と箒の名前を探しているところに、シャルロットが話し掛けてきた。

「やったね。一回戦目、ボク達とだよ」
「初っ端からか……。いいウォームアップになりそうだ」
むっ、と頬を膨らませるシャルロット。悠李はニヤリと笑いながらシャルロットを見た。
「負けないからね！！」
「二回戦目のボーデヴィッヒを救う為に、勝たせてもらうよ」
やる前からハイテンションである。対してローテンションの一夏は、溜め息を付きながら、適当に歩いていく。
「はぁ……、箒とランチアと一回戦目……、って本人登場？」
「一夏！！」
「ヤバいヤバい、箒なら互角かもしれないけれども、ランチアには勝てねぇよ……」
「互角？甘いな。クラウス・アーツを学んだ私は、今のお前など虫けら同然。
ＩＳの性能が、戦力の絶対的差ではないことを教えてやる」
「……俺、死ぬんじゃねえ？」
どこかで聞いたことがあるような名言を聞きながら、一夏は頭を抱えた。

◆◇◆◇◆◇

一回戦。悠李達の前に戦ったラウラは、圧倒的勝利であった。学校の打鉄ということも気にせず、ボコボコにしていた。

「箒？行くよ」
「ああ」
打鉄を展開する箒。悠李はドレッドノートを発動し、魔力の鎧を見に付けた。
競技場へ出る。ちょうどシャルロット達も出て来た。
「さて……。箒、開始直後のスティンガーはやめよう」
「ああ……。多分、一夏が打ってくるからな。カウンターに専念する」
「うん。
一夏。悪いけど、ダシになってもらうよ」
ニヤリと笑う悠李。策がありそうな言葉を発して。
「一回戦、始めっ！！」
ブザーが鳴り響くと同時、予想通り一夏が、”悠李に”スティンガーで突進してきた。
――なるほど、僕と一夏をやらせて、箒を外から撃つ訳か。
独自で推理。しかし、悠李はスティンガーを空中に跳んで避けると、箒に一夏への攻撃を任せた。
そこを狙う様に、シャルルが箒に銃撃するが、悠李は木刀を上から投げ付け、ヴェントにぶつけて、銃口を一夏に反らした。
追撃に、シャルルに急降下しながら蹴りを当てようとするが、悠李に反応するシャルルは、ショットガン”レイン・オブ・サタディ

”に瞬時に持ち替え、容赦無くぶっ放す。

「それくらい読めたよ。インファイトなら勝てない。アウトなら、勝機はある！！」

「へえ……」

拡散する弾丸。しかし、至近距離で喰らうもダメージを無視し、シャルルを蹴り飛ばした。

のけ反ってもいいくらいの高威力。だが、ドレッドノートは全ての攻撃から身を守る。衝撃も何もかもだ。

呆気なく懐に入られるシャルル。悠李はシャルルの手を掴み、一夏の方へぶん投げた。

一夏は箒の相手をしているため、そちらへ気をやる余裕すらない。箒の剣が止み、チャンスとばかりに雪片弐型で斬り付けると同時、右からシャルルが飛んできた。

サイドステップで一夏の横を取り、バットの様に振り切る。二人はまたもや吹っ飛んだ。

必死にスラスターを吹かして制動を掛ける。今のでリヴァイヴ＝カスタムのシールドエネルギーは2／3が削られてしまった。

「臨機応変……。敵だけど、流石だ」

称賛を送るシャルル。そこに、一夏が案を出す。

「シャルル。俺が悠李に突っ込んで、零落白夜でキメる。その内に、外から箒のシールドを削るのはどうだ？」

「悠李に近接で勝てる？」
「勝てる気はしねえ……。けど、やってみなくちゃわからねぇ。エスケープ・アーツを使って、やってみる」

瞬時加速で悠李に近付く一夏。その案に乗り、アサルトカノン《ガルム》で箒を狙うシャルル。

箒は銃口を見て、ジクザグに移動する。それに、ヴェントで追撃するシャルルは、これで勝てると思い”込んだ”。

「ランチア、俺が相手だ！！」

瞬時加速で近付いた一夏に、マグナカルタで振り払う悠李。しかし、シャッフルで避けられ、一撃を当てられる。

振り切った隙を突かれた。零落白夜でやられれば、即負けと見なされるだろう。

しょうがない、と思い、出したくなかった天上天下無双剣を出し、木刀と二刀流で一夏に挑む。

「本気でいってやろう」

前に木刀を振り払う。一夏がテーブルホッパーで避けるが、悠李は移動した直後の硬直を見逃さなかった。テーブルホッパーにまだ慣れていない、一夏のクセだ。その隙を突き、天上天下でスティンガーを放つ。

一夏のとは比べものにならないスピード、そして威力。反応は出

来たが、あまりの速さに避けられず、吹き飛ぶ。

悠李は走って一夏に追い付き、頭を掴んで、地面に叩き付けた。バウンドさせ、一夏が落ちて来ると同時、マグナカルタで宙に斬り上げる。

体勢が持ち直せない。攻撃と攻撃の間が短く、反撃の芽を摘み取られてしまう。

空中に飛び上がりながら、一夏に、剣を使わず、蹴りで追撃する。一夏が上にいる為、蹴り上げる形になる。

また一段階上昇。エアハイクを使い、今度は一夏と同じ高さに上がる。マグナカルタを出し、一夏に一撃。

それだけではまだ終わらない。一夏を踏み、その場に留まりながら一撃、また一夏を踏み、一撃。

エネミーステップと、エリアルスラッシュのコンビネーション。踏みながら攻撃し、また、一夏を落とさず、何発も何発も槍でシールドを削っていく。

下では、打鉄のブレードを上手く使い、ジクザグに動きながら、ウェポンマジックで攻撃を防ぐ箒がいた。弾切れを誘発させる戦法、と悠李は読んだ。

案の定、弾切れになり、リロード中のシャルル。それを狙い、瞬時加速で箒が自分の間合いに持って行く。

しかし、ニヤリと笑うシャルル。箒がそれに気付かないまま、突

っ込んでいく。

笑みに気付き、シャルルと箒の前に一夏を投げ付ける。レイン・オブ・サタディも脅威だし、まさかの隠し玉があるかもしれない。大胆の攻撃は前に打つため、シャルルの前に投げたのだ。

シャルルが出したのは隠し玉の方であった。装備していた盾を突き刺し、内装されていたパイルバンカー”灰色の鱗殻（グレイ・スケイル）”を――一夏に放つ。

「あわわわっ！？い、い、一夏っ！？」

「いっでぇぇぇぇっ！！」

見事に一夏の腹部に突き刺さった。一夏のシールドがこれで０になり、一夏が脱落するが、勢いで二発目を撃ってしまった。

このパイルバンカーは、リボルバー機構。連射が効くから、余計に質が悪い同士討ちとなってしまった。

動揺しているシャルルに、悠李はレールガンを取り出し、魔力を込め、力をチャージし始めた。

約３秒でフルチャージ。照準の真ん中に、目標。

「Ｓｗｅｅｔ　ｄｒｅａｍｓ！！（おネンネしてな！！）」

汚い言葉を吐きながら、シャルルを仕留めた。

2

◆◇◆◇◆◇

「ド派手でしたね……」
「ああ。篠ノ之とストラトスの作戦は見事だ。デュノアの方も中々だったが、相手が悪かったな」
「織斑君、大丈夫ですかね？」
「あれだけ叫べているんだ、大丈夫だろう」

アリーナのモニタールームで、試合を見ていた真耶と千冬が言った。箒の動き、悠李の頭のキレ、どれをとっても素晴らしいの一言に尽きる。

「あの戦い方は、奴にしか出来んだろうな。ましてや、二段飛びなど、誰が出来るものか」
「あれって、どういう原理なんでしょう？」
「魔力の足場を作り、それを蹴りつけ飛び上がる、らしい。」「スラスターより小回りが利く移動方ですね。それより、お伽話のような力を使うんですねえ」
「ああ。あれをＩＳの操作と勘違いするのも、仕方ないな……」

勘違い入学であることを思い出した真耶がそれに頷いた。
しかし、辞退は出来た筈だが、何故入ったのだろう。

「あいつの父親が叩き入れたんだ。この前、麻宿先生が来ただろう？」
「はい」
「あれが、父親なんだ。神威　創龍」

「え、ええっ!?それはまた、凄い人を……」
「知っているのか、山田君」
「はい。織斑先生が赴任していたドイツでも、有名だった筈ですよ？”成功しかしない便利屋”って言われてます」
「なるほど……」

――成功……か。
悠李はそれを目の前で見て育ったのだろう。
「神威くんって、名字で『あれっ?』って思いましたが、やっぱりそうだったんですね」
「あいつの機密は、なんなんだろうな……」

知られているのは創龍だが、悠李もその内バレるのでは無いだろうか?千冬はそう考えた。

「裏稼業の悪魔狩りは、誰にも知られたくない筈だがな、この学園は」

ガードが甘いのやらなんなのやら。悠李の情報が流出したら、大パッシングされるだろう。
「二手三手考えているのか、ここは?」

先読みしないと、お話にならない、と考えている千冬であった。

◆◇◆◇◆◇

「お疲れ。シャルル引っ張ってくれて、ありがとう」
「いや、大体はお前が戦っていたから、私は何もしていないに等しい」

アリーナの中の待合室で、箒と悠李は勝利を喜んでいた。

このコンビが今、一番優勝に近い。

「いやいや、箒のホームランがなかったら、もっと長引いてたよ。それに、弾切れさせてくれたしさ」

「そう、か？」

「うん」

ニコリと笑い、箒を称賛した。少し照れ臭くなり、箒の頬がほんのりと赤くなる。

通路を歩くと、救護班に担架で運ばれる一夏と、それを心配そうに見るシャルルが通って行った。悠李はシャルルに声をかけ、近付く。

「どうしたの？」

「グレイ・スケイルが効き過ぎちゃったみたい……。ずっとお腹痛いって言って、顔も青くなっちゃって、倒れたんだ」

「大丈夫か、あいつ……」

「大丈夫だ。一夏はそんなヤワな奴では無いからな」

箒が自信満々に言う。一番心配しているのも彼女なのだが。

「でも、二発は酷いんじゃないかな？」

「あれは悠李の所為だよね？あそこに投げ込まなかったら……」

「私があなっていた訳か」

「いや、威力はあるけど、あそこまではならないと思うんだ」

なにそれこわい、と悠李は呟いた。何か外部から弄られたか、もしくはシャルロットの勢いか。無論、後者であるだろうとは思うが。

担架が見えなくなると同時、入れ替わりで、ラウラが一人で来た。嫌な顔をする悠李に、ラウラが近付いて来る。

「矛盾しかしていないな、貴様は。力が総てではない、そうほざいたのは、どこの誰だ？」
「うるせェな。いい加減にしねェと、ここでブッ飛ばすぞ？ベッドの上でヒィヒィ喚いてな、クソガキ。
ま、どちらにせよ、後でママが恋しくなるように痛め付けてやるよ」
「私に、親はいない」
「ああ、そうかい。力を求め続ける余りに、縁でも切られたか？次第に周りに見離され、お前は一人で寂しく野垂れ死ぬ。その程度のクズが。何が軍人だクソッタレ」
「悠李、いくらなんでも言い過ぎだよ！！」
「……私には、肉親など、最初からいない」
「あっそ。だから？力で家族を創ろうと？めでてェ話だね、そりゃ。自分で自分の首を締めているだけさね」

普段の悠李からは考えられないような罵言。シャルロットが流石に止めようとしたが、彼は止めなかった。

「……家族がいなかろうが、力だけに固執するのは間違ってンだよ。お前の大好きな、僕の親父なら、そう言うね」
「ランチア・ストラトス。貴様は、私が屍にしてくれるわ」

険悪なムード。どちらからともなく、離れていく。シャルロットと箒は悠李に着いていく。

「悠李。酷過ぎるよ」
「ランチアだよ、シャルル。口喧嘩ぐらいならいいだろう。決着は試合でつける。そこで助け出す」
「ランチア」

箒が悠李を見ずに呼ぶ。ランチアもそれに答え、見ずに言った。

「なに？」
「叩き潰せ」
「あいよ」

恐ろしいのか、粗暴なのか。

只一つ、このコンビは、誰でも判ることがあった。

――異常に、相性が良すぎる。

3

◆◇◆◇◆◇

トーナメント表を見た限りでは、二回戦目は、悠李が望んだラウラとの対戦であった。相方は二組の知らない子。元々は、クラス代表だったらしい。鈴がその地をを奪ったのだから、可愛そうな子だな、と感じた。

二回戦は5分後。最初から、ラウラと当たることになる組み合わせである。

ピットに、箒と共に向かう。闇魔刀、天上天下無双剣、マグナカルタ、そしてエレクトロヘヴィ。魔具だけで圧倒は出来るだろうが、圧倒するだけではつまらない。

しかし、箒から「叩き潰せ」との命だ。

――それならば、手数で潰せば良い。

エレクトロヘヴィは案外、威力が然程高くない。勿論、人体に当たれば重傷か死傷だが。それでも、ＩＳの上からなら大丈夫だろう。

「悠李、出るぞ」

「あいよ。少し待って」

ちゃんとドレッドノートを展開する。魔力の消費はそれなりに激しい。しかし、無尽蔵であるのと変わらない悠李には何の問題も無い。

箒が先に飛び、悠李が後から駆け、跳ぶ。一種のファンサービスだ。空中で縦に二回転、左に三回転、着地と同時に、闇魔刀を構えてキメポーズ。観客からは驚きの声が上がった。

「気が済んだか？」

「ああ。充分だ」

「それは良かった。墓標となるこの場所で、未練もなく死ねるな」

「Ｇｏ　ｂｌｏｗ　ｙｏｕｒｓｅｌｆ．（×××××してな。）お前の妄想にはウンザリだ。今すぐ眼を醒まさせてやるよ」

「……下賤な」

教育上マズいスラングだ。審判の教師が慌てて競技を始めた。

案の定、悠李はラウラに突っ込んでいく。闇魔刀の鞘を握り、疾風居合という、変則的な技でラウラを斬った。

進路上の次元と、目の前を斬り刻む技。誰もが、初見である。見切られることは、まず無いだろう。

「ＡＩＣが……効かないだと……」

アクティブ・イナーシャ・キャンセラー。ＩＳの動作、実弾兵器を、ラウラの専用機・シュヴァルツェア・レーゲンの一定範囲内において、完全制止させる。制止させる物体に集中していないとダメだが、それでも、悠李は止められなかった。

「貴様ッ！！やはりＩＳ適合者ではないな！！」

「フッ、御名答！！」

天上天下でハイタイムを繰り出し、打ち上げる。エアハイクで追

い、闇魔刀で、無数の斬撃を浴びせる”黒蘭”を放った。

「がぁっ……！！」

苦しむ声。それを無視し、エレクトロヘヴィに持ち変え、”エアスラッシュ”を繰り出した。ギターが鎌に変型、ラウラを斬り付ける。一夏と同じ様に、落とさずに攻撃し続ける空中殺法。

エアスラッシュとエネミーステップの間に、瞬時にデスイービルの一射を入れてくるのだから、余計に酷い。シールドエネルギーなど、そろそろに0になりそうだ。

箒は、軽く元クラス代表をいなし、その様を見ていた。開始1分半。完全な出来レースかと思われるかもしれない。しかし、これは真剣勝負なのである。

「貴様ァァァ！！」

「そんなに地が恋しいか？なら――」

攻撃を止め、思い切り下に叩き付けた。

「地面と熱いキスを交わしな！！」

地面に出来るはクレーター。ベーゼどころか、セックスになっている。

悠李はゆっくりと地に足を付け、ラウラを見下ろす。

「く、ぐぅっ……」

「こんなモンじゃないだろう？もっとこいよ」

悠李を睨みつけるラウラ。恐怖がその視線に含まれていた。

怖い。憎い。それらの感情を押し殺そうとする、自分の弱さが腹立たしい。

片目の眼帯を外す。金色に輝く瞳。擬似ハイパーセンサーとしての働きを持つ。ＩＳの適合率を上昇させるためにされたナノマシン移植手術。

それに失敗したがために、オッドアイになってしまった。

振り切り、立ち上がり、レールカノンで煙を上げ、それに隠れながら、手刀で斬りかかる。一か八かの戦法。倒すなら、これしかない。

「くたばれ、化け物！！」

手応えがあった。はずであったが。

ドンピシャで、魔力を張ってガードされた。ロイヤルガードが一つ、〝ジャストブロック〟。

「まだまだ……っ！！」

一発で諦めない。何発も、何発も、斬撃を浴びせる。しかし、悠李の反応速度に敵うことが出来ない。ジャストブロックが成功し続ける。

「恐怖を振り切り、立ち向かう……」

「なにを……！？」

「それが、力だ。それが強さ――則ち、心の一つ、〝勇気〟だ」

防ぎながら喋る悠李に、ラウラが気付いた。

「そして、恐怖に怯えた自分を許す――”優しさ”、自分を叱る”厳しさ”。気付いてくれたなら、それでいい。僕は、君を救えた」

「……息子どの！！」

ラウラの顔に、自然と笑みが浮かぶ。解放されたような笑みが。

「息子どの。もう、綺麗事だとは思わんさ。だから……。もう、決着を着けよう」

「ＯＫ……。全開で相手してやる！！」

一旦、間合いを取るラウラ。迸る手刀のプラズマ。片手の魔力。

「ハァァァァッ！！」

先に動くはラウラ。ガードされても構わない。この一撃に、総てを賭ける。

「Ｃａｔｃｈ　ｔｈｉｓ，Ｌａｕｌａ！！（これでも喰らいな、ラウラ！！）」

動きに合わせ、この前の創龍と同じ様に、カウンターを決める。溜めた力を放出（リリース）する。ロイヤルガードが一つ、”ジャストリリース”。二つは対となり、合わさることによって、本領を発揮する。

壁に吹き飛ぶラウラ。ＩＳの損害が大だ。

――負けた……。心地好く、負けた……。

過去の自責をするも、この戦いに悔いはない。ラウラはゆっくりと闇に意識を落とした。

――その程度か、貴様は……。

しかし、ラウラを休ませることを、ＩＳが許さない。

――貴様は、力を求めているのだろう！あの男の言いなりになって、どうする！！

――うるさい……。力の意味が分かった以上、今は……。

――その程度の者だったか。ならば見せてやろう、より強き、〝力〟を！！

――……そして、貴様を食ろうてやろう。

4

勝利を確信した悠李が、背中を向け、ピットへ戻ろうとした時、背後から悪寒を感じた。

振り向くと、ラウラが黒い何かに包み込まれ――いや、呑み込まれ、巨大な女性の像を作り出す。

「千冬さん……？」

それは酷似していた。左手にブレードが形成され、悠李に素速く振り被る。

闇魔刀を出し、一太刀を受け止めた。

重い一撃。耐えるのが少しだけ辛かった。

「ランチア！！」

「箒！今すぐ千冬さんを呼べ！！観客は皆退避しろ！！」

外部からの客も来ている、このトーナメント。何か怪我でもあれば、この学園が叩かれる。

しかし、悠李はそれ以前に、彼らが邪魔だった。犠牲を出したくはないし、何かの邪魔を入れられたくない。

「貴様、後ろから止めたな……。何者だ！！」

掠れた声で黒のモノが言う。それがラウラのものではないと言うことはすぐに分かった。

「殺気丸出しの攻撃なんざすぐ判るさ。それより、お前はなんだ？」
「私は――力の具現化。ヤツの欲望を表し、そして敵えたモノだ。そして、私がやることは、貴様を殺すことだ」
「……その割にゃ、掃き溜めの臭いがしやがる」

ギロリと悠李が睨んだ。間違いない、コイツは悪魔だ。

二太刀目が来た。ドレッドノートを解き、天上天下で打ち返す。クローンの千冬は大きく弾かれ、隙が出来た。

悠李が見逃すはずがない。ハイタイムジャンプをし、闇魔刀に持ち替え、空中連斬で吹き飛ばす。それをエアトリックで追い、すぱんと腹部辺りを一閃した。

「ラウラッ!!そんなモンに呑み込まれるな!!そんなちっぽけなモン、自分で飲み干せ!!」

斬られた目からラウラが出て来る。目が閉じられ、ぐったりとしながら。

「And thereforeto be unnecessary!!（余計なことをしやがって!!）」
「それが、お前の本質か」

黒い物体が英語で話し掛ける。悠李は変わらず日本語で返した。

「This takes the puss，but would have been even more powerful!（その小娘を取り込み、我は更に強大になるはずだったのに!!）」

「Ｈａ，ｗｈａｔ　ｙｏｕ　ｓａｙ?Ｔｈｅ　ｈｏｗｌ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｌｏｓｅｒ　ｏｎｌｙ　ｈｅａｒ．（何か言ったか?負け犬がほざいてるのしか聞こえないが）」

「Ｆｕｃｋ!!Ｋｉｌｌ　ｙｏｕ　ｎｏｗ!!（クソッタレ、殺してやる!!）」

「Ｃｏｍｅ　ａｎｄ　ｇｅｔ　ｍｅ．Ａｎｄ　ｉｆ　ｙｏｕ　ｃａｎ．（やってみな?出来るもんならな）」

実体化した怨念、悪魔。虎のような姿をし、悠李に襲い掛かる。

鋭い牙を闇魔刀で反らし、天上天下無双剣を腹に突き刺し、前に、後ろにと地面に叩き付けはじめた。

黒い虎から出る血。制服でドレッドノートをしていたため、白が朱になっていく。

「Ｄａｍｎ!!（くそぉっ!!）」

「Ｇｏ　ｔｏ　ｈｅｌｌ!!（地獄に堕ちな!!）」

上空に放り、鏡花水月で蜂の巣にし、落ちて来たところを、マグナカルタで串刺しにした。

絶命する悪魔。悠李は槍の血を振り払い、地に倒れたラウラを担ぎ、ピットへ向かう。

千冬達が到着したころには、ことは既に終わっていた。

「5

◆◇◆◇◆◇

――力とは何なのか。

――暴力？精神？それとも。

――あの男は、心だと言った。しかし、私は……。

――あれが、私なのか？

――教官には憧れていた。しかし、あの野獣が、私の力か？

――違う。そんな筈が無い。私の〝心〟は、あれを否定している。

――私は、心を強さと認めたのだ。あの野獣の様な凶暴さ、傲慢さが強さな筈が無い……！

――黙っていろ小娘！貴様は我が食らわれ、力の拡張となれ！！

――ラウラッ！！そんなモンに呑み込まれるな！！そんなちっぽけなモン、自分で飲み干せ！！

――貴様は、私の心が産んだ過ち……。

――私の中で、消え去れ！！

◆◇◆◇◆◇

ラウラが眼を開けると、保健室の天井が見えた。

周りにはカーテンが張られ、誰もいない空間が形成されていた。

身体を起こす。ＩＳスーツのまま、眼帯も無い。

つまりは、あの戦いで倒れ、そのまま運ばれた。

「気が付いたか」

「教官！」

カーテンを開け、千冬が入ってきた。

「寝たままでいい。神威が言うには、ジャストリリースを喰らったら、普通はバラバラになってるらしい。手加減はしたそうだが、壁にまで吹き飛んだ威力を見れば、加減の意味がなさそうだ」

言われた途端、腹部に強い痛みが襲った。ＩＳスーツをめくり、腹部を見ると、悠李の掌大の跡が遺っていた。

「神威……？息子どのの姓ですか……」

「ああ。奴は、人種が違う。半人半魔、そしてある意味での人造人間だ」

「訳が判りません……」

「単純に言うなら、魔剣士クラウスというヤツのコピーらしい。クラウスは伝説の魔剣士で、２０００年前、魔界と人間界とを断絶

した」

あの力や、ドレッドノートは、この話を聞いて辻褄が合う。頭の中で整理した。

「父親がその息子だとさ。相変わらず、並外れた家系だ」

「私は、そんな男と一騎打ちを……」

考えてみれば、死なずにいるのが驚きだ。

「力を理解できず、むやみやたらに手に入れようとして、溺れていくお前を助けたかった。それがアイツの、今回戦った理由だ」

「……彼には、感謝しなくてはなりませんね」

「ああ。二つ借りが出来ているしな」

確かに、そうだ。シュヴァルツェア・レーゲンの暴走。所有者のラウラさえ、知らない能力。

「ヴァルキリー・トレース・システムは知っているな？」

「はい。モンド・グロッソ歴代優勝者のデータをコピーした、アラスカ条約で禁止されたテクノロジーです」

「それを使っていた。更に、神威が言うには、それを悪魔が操作していたらしい」

「悪魔？」「ヤツの言う、イレギュラーな存在だ。詳しい事はアイツか、もしくは〝Ｂｌａｃｋ　Ｃｈｅｒｒｙ〟に電話でもしろ」

下品そうな便利屋。あれが創龍、悠李の家か。とても進んでスラムに行こうなどとは思わなかったが、それを聞き、興味が少し湧いた。

「今、動けるのなら、着替えて食堂に行くといい。馬鹿みたいな量の食事を取っているだろう」

「今、何時でしょうか？」

「２０：３０だ」

もう夜だ。と、なると、半日近く寝ていたことになる。

「それでは、聞いてきます。失礼します」

弱くなってきた痛みを制し、起き上がって制服に着替える。そして、悠李の所へ向かった。

背中を見送り、千冬が呟く。

「私より、まだ若いんだ。悩んで、しっかり何かを掴めよ、小娘」

◆◇◆◇◆◇

「お疲れ様ー」

「ああ。流石悠李だ、ボーデヴィッヒも軽い腹部損傷で済んだらしい」

「ジャストリリースであれかぁ。手加減したけど、あれモロに喰らったら粉々になっちゃうんだよね」

食堂でカルボナーラとパンを平らげる悠李と、その前に、鍋焼きうどんを食べている相方の箒。悠李の隣に一夏、箒の隣にシャルロットと、一回戦に当たったメンバーで食事をしていた。

「いやー、アイツも腹やられたなんて、痛みが判るぜ」
「あっちの方が数百倍痛いと思うよ、一夏」「あれ、この前父さんが僕にやったのと同じ技だからね。あの後、僕は少し吐血したよ」
「マジかよオイ、そんなモン使っちゃやべえだろ」
「まあ、あははは……」

笑って誤魔化す悠李を、シャルルと一夏がジト目で見た。箒だけが、薄く笑っている。

あの状況では、闇魔刀の次元斬か、あれしか安全策は無いだろう。手加減してあるなら、尚更あれしかない。次元斬はシールドごとラウラを斬ってしまう。シュヴァルツェア・レーゲンもジャストリリースでシールドが関係なくボコボコになっていたが。
「噂をすれば、なんとやら、だ。悠李、ボーデヴィッヒが来たぞ」

箒が静かに微笑みながら言う。悠李は後ろを向き、ラウラに声をかけた。

「やあ、ラウラ。お腹は大丈夫なのかい？」
「ああ。色々と迷惑を掛けて済まなかった。この通りだ」

制服姿で、ペコリと頭を下げるラウラ。腹部が少し痛むようだが、それを抑えた。

「へえ、ガッツあるじゃん。流石軍人だけあるね。それで、どうして謝ったり？」
「貴方には助けられたし、借りも出来てしまったから」
「僕は、君を助けた覚えはないなぁ」

ふふふっ、と笑う悠李。どういうことか、悠李以外にはさっぱり

わからない。

「自分の在り方を提示しただけだよ、僕は。自分がどう在りたいかを決めたのは君自身だ。そんで、あの黒いのに取り込まれずにしたのも君自身。僕は何もしてないよ？」

優しさなのかどうかはわからない。だが、それがラウラにとっては優しさに感じ、同時に彼女に自信を付けさせる物になろうとしていた。

「それに、迷惑なんざ思っちゃいない。僕に謝るより、君自身と、セシリアと鈴に謝った方がいいんでない？」

「そうだな。後で謝っておく。では……息子どのには何と言えばいい？」

「別にいらないよ。後は、その『息子どの』っての、辞めて欲しいかな。確かに親父の子だけど、親父が強いから僕も強い訳じゃないし。僕は僕、親父は親父だよ」

――そうか。なるほど。

自分は自分にしかなれない。ラウラが千冬になることなど、できっこない。

なら、『ラウラ・ボーデヴィッヒ』になればよい。それにしかなれないし、それが最良の選択の一つであることに、間違いは無いのだから。

そして、悠李に言うべき言葉が、二つ分かった。

「ありがとう、悠李」

見たことのない、非常に可愛らしい笑顔を見せながら、悠李に礼

を言った。悠李は、笑ってそれに応えた。

「私も食事を取るかな。相席しても構わないか？」

「うん。いいよ。みんなで食べよう」

また一人、仲間が増えた。心強く、また自分を見つけた、新しい仲間が。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１２　真実の告白（前書き）

Ｍ１２まで行きましたね～。しかも知らない内に１０万文字突破、お気に入り件数もいっぱい、評価もたくさん。これも皆様のおかげです、本当にありがとうございます。

５０部目です。ギャグセンスはありませんが、ギャグミッションのつもりです。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１２　真実の告白

◆◇◆◇◆◇

食事を済ませ、ラウラに聞きたいことがあると言われ、悠李は彼女を自室に招いた。無論、悪魔の事である。

「さて……。何から話そうか？」
「悪魔のいる理由、出現する理由を」
「奴らは大抵人を狙うために出てくるんだよね。それは、現世（うつしょ）を今だ侵攻せんとするからさ」
「本当に、幻想じみてるな……」
「それが現実で起こってるんだから、信じざるを得ないでしょ？」

ベッドの上に腰掛けていた悠李の隣に座るシャルロットが横から言う。ラウラは悠李のソファに座っていた。

「それを狩るのが僕と親父って訳だよ。親父は、伝説の魔剣士クラウスの実子、僕はクラウスの肉と親父の血で創られた、人造の半人半魔」

成る程、教官が言っていたのはこういうことか。ラウラの中で、一つの疑問がなくなる。

「蛙の子は蛙、ってね。ある意味、それを継いでる訳だよ。まあ、親父は複雑な関係の親父なんだけどね」
「複雑ではあるな」

理解は追いついている。問題はない。

「二千年前、魔界とこの世界は繋がってね。魔帝ムンドゥスの手下だった御祖父様と、叔父様のスパーダが、ムンドゥスを封じ込めたんだ。だけど、魔帝なしでも悪魔は活動してる。彼らにセオリーはない。あるとしたら、臭いだ」
「臭い？」
「掃き溜めの臭いがするんだ。奴らは」
鼻を指す悠李。スラムで嗅ぎ馴れたから判る。創龍も実際に掃き溜めと言っている。
「後は、悪魔も階級があるんだよ。でも、君らには関係ない。君らは僕に教えてくれるだけでいい。ＩＳでも、勝てないもんは勝てない」
「無理をするな、ということか？」
「そうじゃない。『一切戦うな』って言ってんだ」
人差し指を突き出し、ラウラを指した。
「軍人だろうと何だろうと関係無い。僕に全て任せてほしい。それが君達にしてほしい、一番の事なんだ」
「成る程。判った」
「同じく。君の役に立つなら」
悠李に賛同する二人。勿論、シャルロットは最初からその気であった。
「んで、ラウラ。僕の事は、シャルルとか以外の人間がいる時は、ランチアと呼んでくれ」
「ああ……。それは、本名がバレれば、裏が騒ぎ出すからだろう？」

「うん、その通り」

判っていることが多いなら、やりやすい。

「悪魔のお話はこれで大体終わり。君のＩＳの悪魔は、もういないよ。ラウラ自身が、呑み込んでしまったからね」

見たことの無い悪魔ではあったが、悠李はそれを言わなかった。少なくとも上級悪魔であったことに間違いは無い。

「ＤＲＩＮＫ　ＩＴ　ＤＯＷＮ……か」

「どうしたの、いきなり急に」

「いや、頭に浮かんだだけだ。

そちらの情報をただ聞いただけでは、そちらの割が合わないだろう。私の生まれと、この眼について、教えよう」

親がいない。彼女自身、そう言っていた。

孤児なのか、と悠李は思い込んでいた。

「私は、試験管から創られた」

しかし、彼女は予想の斜め上を行く産まれ方であった。

「遺伝子調整され、鉄の子宮で産まれた。産まれたときから、ドイツ軍に入ることが因子づけられていた」

「成る程」

悠李と同じ様な産まれ方。あちらは科学的、こちらは魔術で産まれた子。

「何度か身体も弄られた。お前との闘いで見せた、この左眼も、ＩＳとの適合性を上昇させる為に、手術された。越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）と言ってな、擬似的ハイパーセンサーだ。適合に失敗して、オッドアイになってしまったが」

言い方が悪いが、ドイツのモルモットの様に思えた。悠李とシャルロットは真剣にそれを聞く。

「見る世界が悪い意味で変わった。部隊では落ちこぼれ、何度も苦悩した。その時に現れたのが織斑教官だ。あの人のおかげで、私はトップに返り咲き、同時に、自分の心の弱さが力に固執させた」
「なるほどね、だから千冬さんを慕っている訳か」

こくり、と静かに彼女は頷いた。悠李は微笑みながら言う。

「憧れを持つのは、自然な事だ。僕だって、一時期は親父に憧れた」
「ああ。今はそう思っている。前までは、教官になりたい、と思っていた。しかし、お前と会って、変わった」

自信有りげな眼で、ラウラは言った。

「私はラウラ・ボーデヴィッヒだ。私はラウラ・ボーデヴィッヒにしかなれないし、また、他の奴もラウラ・ボーデヴィッヒにはなれない。心の強さを重んじる、な」
「わかってんじゃんか。流石だね。ってことは、一夏も？」
「ああ。あいつはあいつだ。教官の弟がどんなであろうと、織斑一夏という存在は、認めなくてはならん。あいつはまた、教官とは違った強さがあるし、心は私より遥かに強いと思う」
「前とは人が違うな……」
悠李とシャルロットが、人間的成長に感心した。歳は殆ど同じだ

が。

「何か強さか……。もう見失わない。私は、自分の魂を信じるさ」
「なんか、かっこいい……」

厨二病を再確認。悠李は苦笑いした。

「部隊長としても、恥ずかしくない自分を出せるな……」
「へっ？隊長なの！？」
「へぇ……。部隊名は？」
「シュヴァルツェア・リーゼ。日本語訳で、黒ウサギだ」

その部隊名に、悠李は聞き覚えがあった。何かしら店に、『ドイツ軍のシュヴァルツェア・リーゼ、クラリッサ・ハルフォーフ』という人間が、やけに『日本の漫画の入手』をしていた。一週間に一度はその依頼が来る。その度に、悠李は漫画をスクーターに積み、ドイツ軍に運びに行くのだ。しかも、深夜に。

「クラリッサ・ハルフォーフさんって、その部隊だよね？」
「何故知っているのだ？確かに、クラリッサは副部隊長だが」
「何か、漫画読みまくってない？」
「ああ。アニメのＤＶＤなどもな」
「やっぱし……。それでいいのかドイツ軍……」
「黒ウサギの名前を付けたのもアイツだ。行き着けの店から取ったらしい」

段々シャルロットも感づいてきた。しかし、「Ｂｌａｃｋ」しか名前を取っていない。
ウサギは何処から来たのか。

「その漫画を運んでるのは僕だよ……。〝Ｂｌａｃｋ　Ｃｈｅｒｒｙ〟の……」
「創龍殿だけがやっていたのではないのか！」
「便利屋は四人経営なんだよ。漫画は、僕だけでやっていたけど」
クラリッサとは親交がある。あちらでの数少ない親友の一人で、彼女が休日の日は、呑みにまで付き合わされる。

「な、なんだ。取り敢えず、黒ウサギ隊もよろしく……」
「う、うん……」

知らぬ所で繋がっていたラウラと悠李。シャルロットが苦笑いしながら、その話を聞いていた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１２　真実の告白（後書き）

◆◇◆◇◆◇

「なあ、箒。聞いていいか？」
「なんだ、一夏？」

「学年別トーナメントで優勝したら、悠李とか、俺とか、シャルルとかと付き合える権利があるって言ってたが、なんで俺らと買い物に行くのに、そんなのが必要になるんだ？」
「……さあな」

――この鈍感大悪魔め！！

2

◆◇◆◇◆◇

翌朝。シャルロットが女子用の制服を着、くるくると鏡の前を回っていた。

「可愛い制服～♪」

「ただいま～。ん、シャルロット、似合ってるじゃない」

トレーニングを終えた悠李が、部屋に入ってきた。シャルロットが悠李に近付き、スカートを手で広げ、見せびらかす。

「可愛いよね、この服」

「うん。あれ？今日からだっけ？」

「そうだよ！これで女の子として通うの！ボクじゃなくて私になるんだよ！」

別にどっちでもいいよ、と悠李が言った。いい加減な反応に、シャルロットがぶぅ、と言った。

悠李はシャワールームに入り、朝の汗を流し始める。

「……まあ、でも、ボクって使えばいっか。悠李も使ってるし」

『シャルロットの”ボク”っての、僕は好きだよ』

「更に使おっと」

シャワールームのドア越しにされる会話。１０分でシャワーを終え、上半身裸で出てくる。

シャルロットは、それに見惚れてしまった。

おーい、とシャルロットの目の前で手を振る。はっと我に戻り、シャルロットは目を擦った。

その時、ドアからノックの音がした。

「シャルロット・デュノア、ランチア・ストラトス、いるな？」

千冬の声だ。は～い、と悠李がドアを開けると、千冬がいつもの黒スーツでいた。

「おはよう、千冬さん」

「ああ、おはよう。

デュノア、今日から女子としての生活を始める前に少し知っておいて欲しいことがある」

「はい、何でしょう？」

シャルロットには予想が着いた。部屋割の変更だろう。

「その通りだ」

「読心術まで……。僕と同じ、半人半魔なんじゃ……」

「つまり、この部屋から離れることになったんですよね？」

「ああ。今日から、別の部屋に移動だ。ボーデヴィッヒと相部屋の、１１５６号室になる。ストラトスに荷物は運んでもらえ。そして、もう一点。お前の資金の援助についてだ」

「資金？」

学費などだろう。デュノア社の後ろ盾が無くなった以上、払うことは出来ない。奨学金や特典ではどうにかならないのだろうか。

「デュノア社と縁を切った以上、これからは資金が回って来ない。

そこで、だ。神威のその金と、Ｂｌａｃｋ　Ｃｈｅｒｒｙの資金援助という二択が取られた。勿論、創龍氏には承諾を取ってある。どうする？」

悠李も別にそれで構わなかった。一人じゃ在学中に半分も使えまい。

「学費は、自分で賄います。母が遺したお金があります」

「……愚問だったな」

創龍が管理しており、またシャルロットの為に、金を増やし続けていた、母の遺産。ここから、学費を捻出する。

「代表候補特権での、資金援助も参加しておいた。まあ、大丈夫だ。最後に一つ。デュノア社のお前のパーソナルデータは、こちらで破壊しておいた」

ハッキングか。本当に、シャルロットとデュノア社との関係を断ち切った事になる。

「念には念を、とな。神威氏の忠告だ。少し知り合いにやってもらった」

「……ありがとうございます」

複雑な気持ちだろう。実父との関係が絶たれた今、喜んでいいのか、悲しんでいいのか。

千冬とシャルロットが話している最中に悠李はタンクトップと制服を着る。

「それと、神威。お前に聞きたいことがある」

「なに？」

「今度の臨海学校、お前が行くかどうかをな。私達の万が一の為に、お前が来るか、学園の万が一の為に、ここに待機するかどうかを決めてくれ」
「無論、行くけど。こっちに誰か置いてきゃいいんでしょう？なら、キリエさんか親父に連絡して頼む」
「それなら、いい」

問題なし。父親と違って、悠李はちゃんとしている。

「デュノアは食事後、職員室にて待機」
「わかりました」

笑顔のシャルロット。よし、今のところはひとまず安心だ。
「じゃ、後々」
「ああ。ったく、面倒かけすぎだ……」

最後の方の愚痴を聞かなかったことにし、悠李達は千冬の背中を見送った。

◆◇◆◇◆◇

そして、朝のＨＲ。
真耶が入ってきて、困ったような声を出した。

「今日は……、転校生を紹介します」

悠李は机に突っ伏して寝ていた。これからクラスがぎゃーぎゃー騒ぎ出すのだ。何か聞かれるのが面倒だから、意識を落としておく。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

「えーっと……。デュノアくんは、デュノアさんということでした……。はあ、ややこしい……」

クラスが騒ぎ出す。予想的中。そして悠李に視線が集中。しかし悠李は睡眠中。

「えっ、じゃあ……」
「織斑くんとストラトスくんって……」
「混浴してたのっ?!」
一夏が冷静に否定した。彼は、悠李が入った30分前、一人寂しく上がっていたからだ。

「一夏ァァァッ!」

地獄耳チャイニーズ・鈴が、甲龍を展開しながら、壁をブチ破ってきた。

「なにやってんだ!しかもそれは校則違反並びに器物損壊!」
「うるさいっ!死ねっ!」

聞く耳持たず、襲い掛かろうとする鈴。
しかし、シャルロットがそれを止めた。

「ちょっと待った!ボク、一夏と入ってないよ?」
「嘘よっ!」
「だって……一夏に対して、そういう気持ちは持ってないし。それに、入ったのは悠李とだし」
「なんか酷いことと言っちゃイケないこと言ったな……」

感づく一夏。シャルロットは一夏に大丈夫だとウィンクで知らせ

た。その仕種に、数人の女子が心奪われたそうな。

「ちょっと待った。デュノアさん、今『悠李』って言ったよね？」

「……げっ！」

真耶の言葉。一気にまた、悠李に視線が集中した。

「へぇ……。ランチアくんって、悠李って呼ばれてるんだ」

「まぁったく、関係ないあだ名だけどねぇ？」

バラした。シャルロットがバラしてしまった。

「何があったかと思えば……。おい、神威」

そして、後ろから入った千冬。寝ていた悠李を手荒に起こす。

「んあ？千冬さん？」

「先生と呼べ馬鹿者。デュノアがお前の本名をバラしてしまった。腹を括って自己紹介しろ」

「あ、なるほど」

悠李がその場で立ち上がった。そして、改めて。

「ランチア・ストラトス改め、本名は神威　悠李です。入学と同時に、この学園に雇われた便利屋さんです。そして、皆さんより一個年上です」

「な、なんだってぇっ！？」

どこぞの漫画で見たことのあるような空気。悠李は続けた。

「出来れば、今まで名乗っていた『ストラトス』と呼んで欲しいのですが――」

「神威。もう問題ない。職員会議で、お前の情報の秘匿はもう必要ないと決定した。こちらの手回しで、外部からのお前の情報は、お前の家族以外に知らせることはない」

「だそうですので、やっぱいいや」

もう目茶苦茶だ、この学園は。

そう思いながらも、悠李は口に出さなかった。

「3（前書き）

なんか色々とおかしいですが、勘弁してやってくだせえ。

3

◆◇◆◇◆◇

「結局、何もない一日だったなぁ」
「質問攻めにあっただろうが……」

授業が終わると、悠李は久しぶりに、箒と一緒に射撃場に来た。
いつものＵＳＰを的にぶち込みながら、箒は悠李と話す。

「ところで……。あの」
「なぁに？」
「お、お前は、デュノアが好きなのか？」

直球。悠李は備え付けのベンチの上で寝転がりながら答えた。

「家族という関係としてなら好きだよ。異性としては、あまり意識してないかな」
「そ、そうか」

箒の心中に安堵感が産まれた。勢いに任せ、自分のことも聞いてみようとする。

「な、なら、私は――」
「僕は、異性として意識する人はあまりいないね。残念だけど、未だ箒もそれなんだ」
「ううう……」
「ラウラも、鈴も、千冬さんも、セシリアも、山田ちゃんもね。別にホモでもないけど」

親しい関係の女性達だ。しかし、恋心は抱いていない。
「ま、努力次第だね」
「むう……」

マグチェンジの最中に、箒が唸った。カートリッジを装填し、スライドを引き、また発射体勢に戻る。

「まだ、悩まなくてもいい年頃だとは思うけどね、僕は」
「お前はな……」

恋は悩むものだ、と箒は付け加える。そうかい、と軽く返し、悠李は笑った。

「でも、今のこの関係が、僕には一番合っているのかもね」
「私は、はっきりさせたいが……」
「そのうち、誰が彼女なのか、どうなのかも決まるよ」

微笑む悠李。あどけない笑みに、少しだけ箒の口元が緩んだ。

そうしてまた撃ち始めると同時に、ラウラが中に入ってきた。

「うっす」
「二人だけか？」
「まあね。ラウラも撃ちに？」
「ああ。実銃も扱っておかないと、腕が鈍ってしまうからな」

自前の拳銃を出し、的へと向かう。流石現役軍人、中心へと命中させていく。

箒も負けじと中心を狙い、撃ち込む。こちらも中々のものだ。
「改めて思うが、弾丸とは美しいものなんだな」
「え？」
「弾丸は、先は丸いが、常に真っ直ぐだ。芯があるし、壁に当たっても、突き進もうとする」
トリガーを引きながらラウラが話す。彼女の変貌ぶりはとてつもない。
「真っ直ぐとは、包み隠さぬことでもあるだろうな……」
「なに、この詩人展開」
悠李が小声で突っ込んだ。ボーデヴィッヒ先生、とでも言うべきか。
「これも、お前のおかげだな、悠李」
「詩を教えた記憶はないんだけど」
「そうではない。やはり、行動で表さないとわからないか……」
射撃を一旦止め、悠李に近付く。箒もラウラが何をするかが気になり、銃を置いた。
「心は、真っ直ぐで、優しく、厳しい弾丸のことが強さだと思う。矛盾点もあるが、使い分けるのも大事だ。私の弾丸は――」
ラウラが悠李の手を掴み、胸を触らせる。箒が顔を歪ませるが、ラウラはいたって普通の表情だ。
「お前によって、ここにリロードされた」
「なんか、凄い事してるよね」

「ああ……。今すぐその手を離せ。そして動くな。お前の頭を撃ち抜いてやる」
「これ、僕が悪いの？」
「悪いことなど、お前は何一つしていないさ。むしろ、感謝してる。だが、私は、お前に別の弾丸を装填してもらいたい」
「別の弾が……！？」
「悠李、ここにい――え？」

ラウラが必死に背伸びをして、悠李にキスをした。同じタイミングで入ってきたシャルロット、一夏、セシリア、鈴が、そして箒が釘付けになる。

――なんだこのフラグ！！いらねえよこんなん！

心中でそう思う悠李。唇が離されると、ラウラは背伸びを止め、周りの沈黙を止めた。

「私はお前の嫁になる。決定事項だ。もう取り返せまい」
「は、はあ？」
「私がお前を嫁にしたいが……。お前に支配されたくなった」

シャルロットと箒が、悠李を睨みつける。僕は何も悪くないよ！、と必死に否定するが、聞く耳を持たない。

鈴は一夏を狙う敵が減ったのにほっとし、セシリアは頬を赤くし、両手を当てながら、笑顔で悠李を見、一夏は腕を組み、目を閉じている。

次に口を開いたのは一夏。悠李に近付き、肩を叩く。

「悠李」
「なんだよ……」
「結婚おめでとう。だが、ＴＰＯは弁えろよ。式はいつがいい？披露宴は？」
「ふざけんな！！ノーカンだノーカン！」
「照れるなって」
「ああもう……ダメだこりゃ」

突っ込む気力さえ起きない。というか、色々と吸い取られた。

シャルロットと箒に睨まれながら、ＩＳ学園の”神威　悠李”としての初日が幕を閉じた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１３　ステキなお買い物

◆◇◆◇◆◇

翌日。休日の朝。

「ふわぁっ……」

いつも通り、トレーニングの為に、朝早く起きる悠李。眼を覚まし、起き上がろうとするが、右手に何かが引っ付いているのが解った。

一人部屋になったばかりだ。誰かが入ってきたというのか。いや、それなら千冬か真耶から連絡が来るだろう。

問題の腕を見る。裸の、銀髪の小さな少女がいた。そう、ラウラだ。

「ったく……。どうやって入ってきた……。起きろ、ラウラ」

身体を手で揺らし、起こそうとする。やがて、ラウラが眼を覚ますと、軽く瞼を擦りながら悠李を見た。

「なんだ、もう朝か……？」

「何時頃入ってきたんだよ」

「ん……。確か、２時頃」

それは眠い筈だ。今は午前５時。およそ３時間しか睡眠していない。

「身体壊すぞ」
「なに、馴れているさ」
「馴れても、壊れるもんは壊れるし、まだ成長期なんだから、成長に支障を来す」
「お前がそういうなら……。仕方がない」

腕から離れないラウラ。悠李はラウラを引っ付けたまま立ち上がり、彼女の額に人差し指を指を弾いた。

「きゃんっ！」
「離れろ。それと、僕に何もしていないよな？」
「……？ただ寝ただけだが……。クラリッサから、夫婦とはこういう風にすると聞いた」
「なにやってんだ、あの人は……」

大人しく離れるラウラ。悠李はタンクトップとカーゴパンツに着替え、外へ出る。

「何処へ行く？」
「日課」
「ああ、トレーニングか。私も着いていく」
「服は？」
「今、ジャージがある」

◆◇◆◇◆◇

鬼の速度でグラウンドを走り、重負荷を掛けた筋トレをする悠李に、ラウラが付いてこれる筈が無かった。

こちらが1周走る最中に、5度は抜かれる。ラウラが腕立て伏せを１００回終えると、悠李は片手の人差し指で、逆立ちしながら２００回もやっていた。腰には一つ１０ｋｇの円筒形の鉛が５つずつぶら下がっている。

外転筋だけでなく内転筋も鍛えるため、軽負荷のものも、回数を増やしてやっている。ちょうど今、スクワット１０００回が終わった所だ。

「よし、終わりだな」
「先に帰っててていいよ。この後、箒と稽古があるから」
「さあ、まだ続けよう」

悠李は、ぷっ、と吹き出す。そして、ラウラと共に剣道場へと向かい、箒と真剣の稽古をするのだった。

◆◇◆◇◆◇

その後、場所は食堂へと変わる。朝食をシャルロット、一夏、セシリア、鈴と共に取る。ラウラと箒はまだ剣道場で稽古をしている。

「今日どうする？」
「買い物に行きたいなっ♪」

シャルロットが悠李に言った。別に構わないのだが、予算はどうするのか、何を買うのかが気になった。

「なるほど。臨海学校が近いから、”ＭＩ・ＺＵ・ＧＩ”を買いたい訳だな、シャルロット」

「なにか凄い動作が見えたけど……。その通りだよ」

一夏に感想を述べるシャルロット。

「なんでまた水着？」

「察しなさいよ」

好きな相手に可愛い水着を見せたい、そういう意図があるから欲しいのだろう。

「聞くのは野暮ですわよ、悠李さん」

「聞かないよ。じゃ、食事終えたら行こっか」

「うん」

買い物の代金は勿論悠李持ちだ。使っても無くならないのだから構わない。

「私も行きましょうか」

「つか、皆水着買いたいから行きたいんだろ」

「そうだけど？勿論、私らの水着代は悠李持ちだから」

悠李の苦労がまた増えそうだ。一夏は苦笑いしながら、悠李を見た。

「お前も大変だなぁ」

「別に？お金なら沢山あるから。つか、使ってくれないと部屋が札束で埋まる」

先程の言葉を撤回する。一夏は羨ましく思った。

「俺にもなにか奢れよ」

「パフェでも食べるかい？」
「パフェオンリーじゃ甘い！！バイキングだ！！」
「おっけー」

ニコリと笑う悠李。アタッシュケースが一個無くなりそうだ。

「ごちそうさま。先に行ってるよ。シャルロット、行こっか」
「うん」

二人は横に並びながら、不思議な空間を作り出す。シャルロットがさりげなく悠李の手を握り、更にその空間は立ち入り辛くなった。

「ぐぬぬっ……！！なんか腹立つわ……！！」
「でも鈴さん、あの二人はカップルではないのですよ？」
「尚更ウザいわ！！」

怒る鈴を無視し、昼の食事にしか頭にない一夏。セシリアは、この間に挟まれて少し困惑してしまっていた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１３　ステキなお買い物（後書き）

◆◇◆◇◆◇

―剣道場―

「左がお留守だぞ、ボーデヴィッヒ！」
「足元ががら空きだ！真っ二つにしてやる！！」

互いに木刀で打ち合う箒とラウラ。悠李の取り合いのつもりが、いつの間にか別に真剣勝負になっている。

ラウラが右肩からを一閃され、箒は下から一直線に喰らう。真剣ならば、相打ちだろう。

「ふっ……。引き分けか」
「そうみたいだな……。ふふっ、中々楽しませてくれるじゃないか、篠ノ之」
「こっちの台詞だ、ボーデヴィッヒ」

何かが彼女達の間で目覚めた。手を出し合い、固く握る。

「悠李を狙うライバルとして、認めてやる」
「こちらこそ。織斑一夏はくれてやるがな」
「う……。どちらか選んでみせるさ」

2

◆◇◆◇◆◇

ショッピングモール「レゾナンス」。ＩＳ学園から一駅の、巨大なそのモールは、駅をもモールの一部としていた。

女性用の水着売場にて、悠李はシャルロットの試着を見ては色々と感想を述べていた。

「これなんかどうかな？」

「もうちょっと淡い色の方がいいかな。これは？」

シャルロットに、悠李が選んだ水着を渡す。少しオレンジがかった薄い黄色に、パレオの着いたビキニ。中々際どいとシャルロットは思う。同時に、自身でも可愛いと感じ、気に入った。

「よぉし、着ちゃおう」

試着はタダだ。買うのはその後でも良い。試着室のカーテンを閉め、今渡された水着に着替える。

「悠李～？終わったか～？」

「ちょうどいいや、一夏。シャルロットの水着も見てあげてよ」

試着室の外で、悠李と一夏が話しはじめる。シャルロットの水着を見るために、彼女が着替え終わるのを待った。

カーテンが開かれる。素直に、可愛い、と悠李と一夏から褒めら

れた。

「これ、お尻も際どいんだけど？ラインが……」
「パレオがあるから良いんでない？」
「俺もそう思う。つうかシャルロット、似合い過ぎだ、それ」
「そう？ありがと、一夏」
「僕のコーディネイトは正しかったようだ……、ふふっ」
「うん、それは真実。それじゃ、これを買うよ」

試着室のカーテンを閉め、制服に着替える。今日は一夏も悠李も皆制服だ。悠李の制服の着方は色々とおかしいが。

胸元のボタンを2つ開け、袖を捲り、スラックスはブーツの外に、皺くちゃになるようにしている。魅力の肉体に、赤いアミュレット。ファッションセンスは良い方だろう。

「おまたせ～」
「よし、Ｇｏ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｒｅｇｉｓｔａｒだ、悠李」
「はいよ」

札束を取り出し、水着を持って会計を済ませた。

◆◇◆◇◆◇

「悠李～！これも買って～！」
「はいはい、待ちなさいって」

続いて、鈴の買い物。水着は勿論、他の物も買わされている。

「もう、最っ高！」
「代金持ちは僕だけどね」

「だから良いんじゃない！！」
悠李の札束を、我が物顔をして使う鈴。片手に諭吉が何人いるのか、誰にも分からない。
「はっはっは、私こそ真の成金無双よ！！」
「誰に言ってんの？」
どや顔で鈴が言う。それを突っ込む悠李に、鈴は「ここにいる誰か」、と言った。
「そうそう。悠李？箒が、誕生日が近いって知ってた？」
「いや？初耳だけど……」
「悠李、今すぐ誕プレ買えっ！！」
一夏を狙う敵を減らすため、そして何より箒の為に、鈴は言った。
「何買ったらいいのかわかんないや……」
「リボンとか、アクセサリーとか……。身に付けられる物がいいと思う」
ネックレスが目立つかも、と悠李は考えた。シルバーアクセサリーの店に行き、ネックレスを見る。
「これなんてどう？クロスのやつ」
「僕、十字架はあまり好きじゃないんだよね……。この、指輪が付いたやつが良さそう」
指指した物は、１０万もする、ペアリングの付いたネックレス。思い立った悠李は、即座にそれを購入した。
「後は……。オニキスも買ってつけよう」

「き、金銭感覚が狂ってる……」

別のジュエリーショップに行き、大きなオニキスと台座、金具を買い、ペアリングの間にオニキスを付けた。

「はい、魔除けの完成」
「へえ……。魔除けねえ。いいセンスしてるじゃない」
「そう？」

大切に、アクセサリーが入っていたケースに仕舞い、懐に入れた。果して、箒は喜んでくれるのだろうか？

「気持ちが大事だけどね……」
「１０ウン万使っといて、それはないわ……」
「えーっと、今日の鈴の出費はじゅう――」
「大丈夫！！きっと喜んでくれるわよ！」
「変わりすぎだって」

くくっ、と笑う悠李。しかし、それだけ買っても金は余る。

「よし、次は――」
「鈴さん？少し悠李さんをお借りしますわね！」
「あたしの財布が無くなった……」

僕の扱い……、と悩みながら、悠李はセシリアに拉致されていった。

◆◇◆◇◆◇

「ここは少し淡い青の方が良いと思うのですが、悠李さんはどうで

すか？」
「濃いほうがいいんじゃない？」
セシリアも水着のチェックを悠李に頼んだ。今回はセシリア自身が代金を払う。
「このヘアドレスも変えたいのですが……」
「そのままでいいと思うけど？それをライトブルーにしてみてもいいとも感じるね」
「成程……。では、こういうのはいかが？」
フリルの付いた、スカイブルーのヘアドレスを手に取り、悠李に見せた。彼はそれもいい、と行ったので、セシリアはそれを買うことにした。
「あとは日焼け止めと、パラソルと……」
「日焼け止めなら、化粧品売り場に相当強いのがあったよ？化粧水と一緒に買っちゃえば？」
「そうですわね、そういたしましょう。パラソルは……、このカラフルなので良いですわね」
ファッションセンス再発動。悠李のセンスはセシリアをも凌駕する。
「本当、悠里さんがいらっしゃると、助かりますわぁ……♪」
「そういうのなら、大歓迎なんだけど、僕に女装させようとするのやめてくれないかな？こんなごつい体で女装は地獄絵図だからね？」
何かと苦労が絶えない悠李であった。

「3

◆◇◆◇◆◇

暫くセシリアの買い物に付き合った後、一夏御希望のバイキングに行く。セシリアの荷物を持ちながら、悠李は一夏達と合流した。無論、一夏も鈴とシャルロットの荷物を持っていた。

調子に乗り、一夏の荷物の上にセシリアの荷物を乗せた。負荷が付加され、一夏の自由がほとんど不可になる。食前の運動だ、と悠李は言った。

「お、重てぇ……っ！！」

「頑張ってください、一夏さん」

セシリアが笑う。一夏が苦笑いしてセシリアに返した。

「わたくし達はお先に参りましょうか」

「らしいから、荷物係、任せた」

「んな、殺生な！！」

◆◇◆◇◆◇

一夏はバイキングに向かう途中、同じ中学校出身の親友、五反田弾の妹、蘭に出会った。

久しぶりの対面、蘭は嬉しそうに話し出す。といっても、今年の五月には会っているのだが。

「私、ＩＳ学園を受けることにしました！！」

「へえ、頑張れよ」

彼女はＩＳ適性がＡらしい。今となっては、そのランクも、Ｃランクの箒にブチ壊されたのだが、言わないでおいた。先日の対抗戦でランクＢの一夏が圧倒されたからだ。

それに、ＩＳより強い化け物が、知っている中では2人いる。千冬と悠李だ。創龍は頭数に入れていない。彼は多分、どんなものにも負けないだろう。

「お、いたいた。あら、一夏まで」
「よっ」

赤髪の弾も一夏を見付けては近付いてきた。物凄い荷物の量を持っている理由を一夏に聞く。

「全部友達のだよ。つまり、今の俺はパシリ」
「人聞きの悪いことを言うんじゃねェよ」

ぽこり、と一夏の後ろから拳が当たった。振り向くと、やはり悠李であった。
弾と蘭もが悠李に注目した。切れ長の女顔。一夏と同じ、いや、それ以上のイケメン。長身。

「遅ェよ」
「わりィわりィ、同中（オナチュウ）の友達と、その妹さんに会ってさ」
「あ、あなたがランチアさんですか！？」

ＩＳを動かせると誤報された時、ランチアで流されていた。混乱を産まないように、悠李は自己紹介した。

「そうです。ランチア・ストラトス。よろしくね」
「五反田蘭といいます。よろしくお願いします、ストラトスさん」
ぺこりとお辞儀。礼儀正しい子だな、と悠李は関心した。
「五反田弾っス。この鈍感の親友です」
「よろしく弾君。この鈍感の相方っス」
変に意気投合する二人。鈍感大悪魔は誰が鈍感なのが判らずにいた。
「それじゃ、僕たちこれから行くとこあるから、ごめんね」
「いやいや、連れてってください。鈍感も治してやってください」
「治るかな、こいつ」
「出来るだけ早めにお願いします」
一夏の頭の上には？マークが回っている。ここまで鈍感だとは思いもしなかった。
「中学んとき、苦労したでしょ？」
「そりゃもう、人一倍に」
「モテ男の友達って辛いよね。それじゃ」
手を振りながら、一夏を引っ張り連れていく。弾が笑ってそれを見送った。
「治るといいな、鈍感」
「治してもらわないと困る……」
◆◇◆◇◆◇

「で？弾と蘭ちゃんに会っていたって訳？」

鈴がレストランで一夏に遅れた理由を聞いた。一夏は「はい」と何かに怯えたような声を出した。

鈴はカルピスソーダを一気に飲み干し、一夏を見た。

「……荷物は？」

「ちゃんと持ってきました」

「遅いんじゃボケェッ！！男なら3分でこんかいっ！！」

「さーせんしたぁっ！！」

極道ごっこだ、とセシリアとシャルロットに説明する悠季。各々の隣で、スイーツを食べながらそれを見ていた。

「極道って、やくざっていう人ですわよね？マフィアより怖いっていう」

「いや、意外と優しいよ？仁義っていう、人の心を重んじる人達だから。あと、約束は必ず守ったり」

「凄いしっかりしてるんだね」

凄く下らない説明だ。ブルーベリーを摘んでいる悠季が思った。

「指詰（エンコ）めるか、耳飛ばすか選べ」

「リアルだね……」

「勘弁を！！」

「夫婦漫才ですの？」

「ちっちち違うわよ！！」

狼狽する鈴。顔を赤くして必死に否定するが、逆効果だろう。シ

ヤルロットは微笑ましく思った。

「平和だねぇ……」

「そうですわねぇ……。この二人も見ていてほのぼのしますわ……」

顔が緩みきっているセシリア。次第にセシリアが垂れセシリアになってきた。

「買い物に満足して、こんなんなっちゃった……」

「こいつら、ある意味すげぇ……」

買い物もちゃんとしたし、面白いものが見れた。意外と充実した一日だった。

「3（後書き）

――ボーデヴィッヒ、こんなのはどうだ？

――うっ、際どい水着だな。だが、これで……。

それより篠ノ之。これは似合うのでは？

――白のビキニだと……。正気かッ！！いやまてよ……。よし、これに決めた！！

――合計3万5千円になります♪

――……高っ！！

Mission 14 Mad Rabbit

◆◇◆◇◆◇

《んで？今日から、俺がそっち行きゃいいんだな？》
「うん。よろしく」
《あいよ。土産モン、楽しみにしてるぜ》

臨海学校当日の、午前3時。創龍に連絡を入れて、不在時間の代わりを頼んだ後、悠李は荷物を入れた大きなドラムバッグと、金が入ったアタッシュケースを持ち、部屋の外へ出た。

忍び込もうとしたラウラが、廊下にいたが、悠李はラウラに言った。

「ラウラ、残念だけど、これから仕事だから」

忍び込んでも、何も無い。悠李はそのまま千冬の部屋へと行く。彼女も既に起きていて、部屋の前に立っていた。

「これで足りる？」
「ああ。あいつの満足するモノが作れるだろう」

千冬に、アタッシュケースを見せた。この金は、全て狂科学者・篠ノ之　束に渡された。

「見ず知らずの奴に、しかも自分が金を出す仕事なんて、聞いたことねェよ」
「投資と思えばいい。そうだ。束に、何か頼んでやってもいいが？」

「レールガンの改造しか頼めないんだけど？」

怪しい人間であることは間違いないが、それでも、千冬の依頼なのだから、聞かないわけにはいかない。本質的には束の依頼なのだが。

「んで、このあと僕がバスのチャーターでしょ？」

「ああ、頼んだ」

これは学園側の依頼。悠李は寮を出て、エアトリックで海を渡り、本土に向かった。

◆◇◆◇◆◇

そして、４時間が過ぎた。一夏達も、各々の荷物を持って本土に向かい、モノレールの駅前で待っているバスに乗り込もうとした。

千冬もその中にいた。１組のバスに入ったとき、運転手に気が付いた。

「……なかなか、難儀だな」

「そういうなら、変わってくれ……」

悠李がドライバーシートに座っていた。

「それも、依頼か？」

「一台分、金が足りなかったから、僕が運転することになった。学園は本当、仕事してンのかよ？」

「……お前に甘えてるだろうな」

運転席の後ろの座席に千冬は座った。それから入ってくる生徒の列。クラスメイトは悠李を見る度、お疲れ様と声をかけてやった。

「では、出発するぞ。はしゃぎすぎて、ハメを外さない様に」

千冬の音頭で、バスは走り出した。

◆◇◆◇◆◇

「神威くーん！これあげるー！」

走行中にも関わらず、女子は悠李にお菓子や飲み物等を渡した。無論、運転席の近くのプレートに置いている。

「大型なんて取らなきゃよかった……」

「お前、免許持ってたのか……」

「うん。フィンランドで……」

千冬とする、とてもどうでもいい会話。しかし、それが悠李の、長時間運転のリフレッシュになっていた。

「サービスエリア寄るよ？」

「構わん。時間通り着けば問題はない」

少し走った先の、大きなＳＡにバスを停める。エンジンを切り、悠李は建物内の売店に入る。

思い出せば、朝食も取っていなかった。食べ物のコーナーに向かう最中に、悠李の頬に暖かい物が当てられた。

「悠李♪」
「シャルロット？」

ホットコーヒーの缶。シャルロットが背伸びをしながら後ろにいた。

「あげる♪」
「ありがと」

プルを起こし、飲み始める。ブラックの味が口に広がる。頭を冴えさせるにはちょうどいい。

「ごはん、食べてないの？」
「うん」

食べ物を取る悠李に、シャルロットが聞いた。悠李が朝からいなかったのを思い出した。ラウラから、３時頃から出掛けていたのも聞いた。

レジを済ませ、パンを食べながらバスへ向かう。運転席に着かず、皆が座った座席に行った。

「お疲れ様だね。まだあるけど」
「うん。でも、すぐ着くでしょ」

時間はまだある。道のりもそこそこだが、悠李にとってはすぐだ。二時間三時間は集中力は切れない。
「多分、１１時頃には着いてると思う」
「時間通りだね」

全くもって順調。悠李はレッドブルを飲み干すと、ゴミを捨てに外に出た。

「ついで、シャルロットになんか買ってあげよう」

自販機に寄り、ミルクティーを買って、バスに戻る。シャルロットにそれを渡し、バスのエンジンをかけた。

「ありがとう、悠李」
「どういたしまして」

次第にクラスメイトがバスに戻ってくる。全員乗り込んだのを確認し、バスはまた再出発した。

◆◇◆◇◆◇

「はい、着きましたよ」

バスは旅館前へと到着した。悠李は皆がバスから降りるのを確認し、忘れ物がないか車内をチェックしたあと、自分も降りた。

「あら、こちらも……」
「はい。こいつらの所為で、部屋割が大変なことになってしまって……」
「いえいえ、構わないんですのよ」
「特に、こいつは存分に使ってやってください」

悠李の背中を叩きながら、旅館の女将に言った。自己紹介をしたあと、悠李達は自室に荷物を置きに行った。

悠李と一夏は勿論同室であった。隣には千冬ら教師の部屋。

「海に集合か……」

制服から、胸元が大きく開いたTシャツと、黒のカーゴを履き、一夏と共に外に出る。そのままビーチに行くと、既に何人かが遊んでいた。

「一夏、着替えよっか」
「ああ。更衣室行こう」

そそくさとビーチの更衣室に行き、着替える。悠李は上だけ別のTシャツに着替えただけだが。

裸足で浜辺に出る。柔らかい砂が心地好い。一夏は海に駆け込み、思い切り泳ぎ始めた。
鈴が後ろから襲って来ることを知らずに。

「元気だなぁ……」
「なぁに、おじさん臭いこといってるの」

一夏達を見て呟いた悠李に、黄色い水着のシャルロットが突っ込んだ。隣には、変則のツインテールの、黒と紫が彩っている水着を着たラウラがいた。

「あんらぁっ。可愛いじゃん、ラウラ」
「か、可愛いか。そうか。ありがとう」

可愛いと言われたのも初めてなのだろうな、と悠李が解釈した。

「それが悠李の水着？」
「うん。正確には水着じゃないけど、これは運動性抜群だからさ」
「運動性重視なんだ」

アクティブな悠李にはピッタリだろう。濡れても問題もなさそうである。

「前の仕事着なんだけどね、これ」

元々汚れが付いていたものだから、うってつけだ。

そんな水着の話をしている最中に、人食い鮫の鈴が悠李に思いっ切り水をかける。悠李はそれを軽く避けたが、ラウラに飛び火した。

「悠李、避けんなー！！」
「ごめん、反射的に」
「もっかい水かけてやる！！」

手で悠李にバシャバシャと水をかけようとする。悠李は避けながら鈴に近付き、海に入って鈴を捕まえた。

背中と脚を両手で抱えた。えっ、と鈴が驚く。何か、良からぬ事が起こるのではないだろうか。

「沖まで飛んでけいっ！！」
「きゃ、きゃあああああっ！！」

思い切り海の奥に投げた。足から入水するが、相当遠い距離だ。脇で見ていた一夏がそれを見て大爆笑する。

「すげえ！！」

「あれだけ飛ばせば、彼女も満足でしょ」

浜辺に上がって、鈴がこちらに泳いでくるのを見届ける。

「悠李いいいい！！」

猛スピードで泳いでくる。浜辺に着くと、悠李に向かい、ドロップキックを放ったが、脚を叩かれ、かわされた。

「何故躱す！？」

「痛いのやだもん」

ははっと軽く笑った。その後もひょいひょいと攻撃を躱し続け、鈴の体力を切れさせた。

「ぜぇ……ぜぇ……」

「動きがデカすぎるんだよ。もっとコンパクトにさ」

「もう、いいわ……」

汗だくの鈴。悠李は笑みを絶やさない。

「じゃ、ちょっと休憩。流石の僕も疲れた」

海の家に向かっていく悠李。アイスキャンディを買い、一本だけくわえる。

「あー、ゆうりゃん。私にも一本ちょーだい」

「のほほんさん？あいよ」

後ろからは本音。着ぐるみの様な服を着ている。アイスキャンデ

ィを一本渡すと、美味しそうに食べはじめた。

「バナナ味ー♪」

「ついでに、飲み物も買ってこ」

アイスボックスのソフトドリンクも買った。中には酒も入っているが、気にしない。

飲み物を持って鈴達のところにいく。セシリアも、ビーチパラソルとビーチマットを持って、寝そべっていた。

日焼け止めの様な物を塗ってくれと頼んだらしい。鈴がその役を買って出て、日焼け止めをまんべんなく背中に垂らした。

トップの方は勿論外してある。

ヒンヤリとしたジェル。セシリアがきゃあと声をあげた。

「冷たいですわね……♪」

「気持ちいいでしょ～♪」

調子に乗った鈴が、セシリアの下の水着の方に手を突っ込んだ。

勿論、ジェルをいっぱい付けて。

「ちょっ！！鈴さん！！調子に乗りすぎ――」

「あっ……」

それはセシリアも怒る。身体をあげ、鈴に声を上げるが、トップレスということを忘れていた。

「きゃあぁぁあっ！！」

「いいから、水着を着なさいよ！！」

「ぷっ……」

トップを付けようとするものの、紐で時間が掛かる。悠李は後ろに歩いて移動し、左右に動く手を制し、紐を結んでやった。

「あ、悠李さん……。ありがとうございます」

「いや、悠李でも色々とマズいっしょ！？」

あまりにも普通なことかのように言ったセシリアに、鈴が突っ込む。しかしそれを無視し、セシリアは鈴を捕まえようとした。

「悠李さんは、いやらしい眼で女性を見る人ではありませんわ！それより鈴さん？」

「ちょっ、待ちなさいって！！」

危険を感じ取った鈴。走り出すが、セシリアが追い掛けないはずがない。

「ハッスルしてんなぁ……。はい、飲み物」

「ありがとう」

近くのシャルロットとラウラに、アイスキャンディとドリンクを渡した。他にもたくさんあったので、酒以外のものを、周りの人間にあげた。

「やばっ、眼がマジだ……ぶふぉっ」

逃げるのに夢中になっていた挙句、人にぶつかった。鈴の顔面に柔らかい感触――女性の胸だ。

「……」

「ち、千冬さん！？」

悠李が吹き出す。当たる相手が悪いが、千冬はそれほど気にしていない。

「あまりハメを外すなよ。神威、酒」
「教師が昼から呑むなや」
「生徒が酒を呑むな」

麦酒（ビール）を投げて渡した。千冬がそれを受け取り、一気に飲み干す。

「捨ててこい」
「僕はパシリか」

缶を返された。それを蹴り、くずかごへ見事入れた。

「よし……。寝るか」
「いや、監督しなさいな」
「それは、神威くん……。私が頼りないからですか？」
「いえ、教師の務めを果たしなさいと言っているだけです、山田先生」

ひょっこりと出て来た真耶。何かややこしいクラスだな、と改めて認識した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6331w/

IS×DMC ～Infinity Devil～

2011年12月13日07時46分発行